
夜明けの晨星

嘉月 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの晨星

【Nコード】

N1097Y

【作者名】

嘉月 幸

【あらすじ】

星詠み それは星の動きや輝きを読み、人や世界の事象を占い予測する術。

「あたしは貴方達が『星詠みの巫女』って呼ぶ存在よ」

ある夜、フォニカ神殿に忍び込んだ魁に少女・星華はそう微笑んだ。『星詠みの巫女誘拐』。星を奉る聖なる地、聖都ナヴィガトリアで盗賊団の首領を務める魁にその罪状が突きつけられると同時に、魁の元に欲しくもなかった厄介事がやってきた。

3年 4年
ぐらい前に某所に投稿したものです。

序章 夜一夜 終わり無き夜に

見上げた夜空には、天満星が瞬いていた。

闇が覆い尽くす世界の中で月とともに輝く、世闇に生きる人々を導く光 昼の空とはまったく違う光景が天上一面に広がっていた。その点々と散らばる星達の間を、一筋の光が走り抜ける。

「流星、か……」

流れていったその星の軌跡を目で追い、青年 魁^{かい}はポツリと呟いた。

流れ星。人々の間では、流れ星が消えるまでに三回願い事を唱えると願いが叶うというけれども、彼にとってその星はそれほど良い意味を成さない。

（嫌な事がないといいけど）

星詠み 天上に瞬く星を見、その動きや輝きから人、そして世界の事象を占う術。

その結果はあくまでも占いであり、これから起こりうる可能性の一部にしか過ぎない。しかし、理論的には証明できない確率でそれらの予測が的中することも確かなのである。

その星詠みにおいて、普段そう目にする事のない流れ星は不吉な出来事の現れだといわれているからだ。

もう一度夜空を見上げ、時間を確認する。先程確認したときよりも、北天の星が数度進んでいる。この季節の星の位置からして、そろそろ深夜の十二時を回るころだろう。

時間だ。

そう内心呟いた瞬間、ガラスの割れる大きな音と共に、眼下に広がる神殿の内部が一気に騒がしくなった。その直後、見慣れた鎧を着けた兵士たちが神殿の中庭に散らばっていく。

その姿を目に収め、魁は口角を吊り上げる。そして、闇の中へと身を翻した。

白色の石を基調に作られた神殿のその区画は、外の騒ぎとはうって変わって不気味なほど静まり返っていた。音自体は遠くで聞こえているものの、それすらも別世界で発せられているかのようなだった。魁は赤い絨毯の敷かれた廊下の角から少しだけ顔を出し、その先の様子を覗き見る。

あたりに人影は無かった。ましてや、人気の欠片すらもない。

それを確認した魁は素早く物陰から移動し、その扉の前に立った。周囲の壁や床と同じ石で作られた、宝物庫の入り口を守る重厚な扉。宝物庫　それが今夜の、魁の目的の場所だった。

ただし、宝物庫といっても金銀財宝がこの扉の先に眠っているわけではない。金目の物が保管されている別の宝物庫には既に魁の間が向かっていた。囷として。

懷から鍵束を取り出し、その内の特殊な形をした一本を選び取る。魁はその鍵を、鍵穴に挿し込んだ。しかし、魁が挿したのは扉の中央に開いた穴ではなく、扉の上方　扉の影になって見えなくなっている、壁に空いた小さな穴であった。

カチリ、と何かが回る手応えを感じ、魁は別の鍵を今度は扉の根本の床へと差し込んだ。

上の鍵と同じく、開錠された感覚を確かめ、最後に使った二つの鍵をピタリと合わせて扉の鍵穴へと差し込む。

自然と、アイズブルーの魁の目が細められる。

意を決し錠を回すと、一際大きく感じられる小さな振動がその手に伝わった。

音を立てぬように慎重にその扉を押す。

（開錠、完了）

特定の鍵を用い、更にそれらを定められた順に鍵穴に通さなくては決して開かない扉。もし、間違えたりすれば、その扉の開錠は不可能となってしまう。それだけの仕掛けを施すだけの価値を持ったものがこの先にはあるのだ。

自然と高鳴る心臓を抑え、魁は部屋の中へ足を踏み入れた。途端、焼けた本と酷い黴の臭いが彼を襲う。しばらくの間誰一人としてこの部屋に入っていないかったのか、埃が目に見えて分かるほど白く積もっている。あまり長居したい場所ではない。

部屋の状態に思わず顔を歪めながらも、魁は足を進める。部屋中には一面の本棚と、床に無造作に積み上げられた本の山。

一見すれば書庫のようにも見え、自分達盗賊が狙うには不釣合いな物。

だが、それらはもしかすれば宝石なんかよりも遥かに価値のあるものたちばかりだった。

この宝物庫の存在は、フォニカ神殿の者でも極一部の者しか知らない。通常立ち入り厳禁とされているこの部屋の存在を、神殿を取り纏める長老達が最重要機密として取り扱い、外部に一切が知られることのないように隠蔽しているのだ。故に、一般の兵にこの場所が預けられることはない。ここが大切な場所であるという事を、悟られないようにするためである。立ち入り禁止の理由など、老朽化が原因とでも言っておけば十二分に通用する。

魁がここまで容易に侵入できたのは、そういった事情のおかげでもあった。

だが、未だ兵に見つかっていないとはいえ、悠長なことはいられない。

魁は本の一山に積もった埃を荒々しく払い、本を手を取った。闇に慣れた夜目を駆使し、ぱらぱらと中身にざつと目を通しては、その中の意に適った目ぼしいものを乱暴にザックへと放り込んでいく（見つけてやる。師匠せんせいが見つけようとしたアレの、手がかり）ただひたすらに、大切なものを取りこぼさないように、魁は黙々と作業を続けた。忙しく走らせる目は、瞬きもしないほどに真剣さを帯びていた。

だからこそ、魁は気付くことが出来なかった。

小刻みなリズムで近づいてくる、その軽やかな足音に。

バタンッ

と、突然響いた扉の閉まる大きな音に、魁は反射的に振り向いた。手に持っていた本を放り投げると同時に、腰のベルトにかけたナイフに手を伸ばし、それを視線の高さで構える。

（　っ！　見つかった……！　）

湧き上がる焦燥。一足飛びに敵との距離を縮めようと、両足に力を込める。

だが、魁がその場から動くことはなかった。

彼の視線の先　そこにいたのは、魁の予想に反し鎧を着込んだ兵士ではなく、ビロードを纏っていた。屈強な兵士どころか、暗がりにおいても判るほど華奢な体付きをしているのが分かる。

扉を押さえるようにピタリと背を貼り付けている人影。雲間を抜けて、吹き抜けるような天井近くにある窓から差し込んできた月明かりが、その姿を浮かび上がらせる。

頭からすっぽりと被った濃紺のローブのせいで顔は見えないが、暗がりでも判るほど華奢な体付き。フードの隙間から漏れる、星屑のような長いブロンドの髪。

「女……？」

「た、助けて！」

「　っ！？　」

怪訝そうに眉を寄せる魁が、呟くのと同時。ローブを被った少女がタツクル紛いの勢いで魁に飛びついた。

突拍子もないその行動に、魁は回避行動を取ることすらも出来ず、されるがままに少女のか細い腕が彼の体に回される。その慣れない柔らかな感覚に一瞬肩を飛び上がらせるが、ハッと我に返り慌てて女の体を引き離す。

「なんなんだお前　」

「ちよつとへまやって追われてるのっ。　お願いします。どうか助け

てくだ……」

助けて下さい。そう言おうとした少女の言葉を、荒々しい足音が遮った。

その音にハッと気付き、魁が身を潜めようとするが、遅い。次の瞬間には、大きな音を立てて扉が開け放たれていた。

そこに現れる、鈍い光を放つ簡素な鎧を着た一人の神殿兵。何か相当な運動をしたのか、無様にも息が上がっている。

素早く、少女が魁の背に隠れる。その兵の表情が、彼女を見つけ、微かに緩み、

「見つけ……」

直後、彼の視線が魁を捕らえ、固まった。

「なななっ！　なんで盗賊が　」

「慌てるな！　お前は他の者を呼んで来い！」

おろおろとうろたえる兵士とは対照的に、その後ろから入ってきたもう一人が冷静に命じた。それに従って、気弱そうな神殿兵は姿を消す。

チッと、表情には出さず、魁は内心で悪態をついた。

見つかった以上、のんびりはしてられない。

だが、正面には入り口を塞ぐ兵士。おまけに、何故だか知らないが正体不明の少女にジャケットの裾を、皺が出来るほどにぎゅっと掴まれている。双方から逃げるのは、容易ではない。

ちらり、と魁は横目で少女の姿を見遣る。兵士の様子から察するに、差し詰め、魁達の騒動に紛れて神殿の宝を狙おうとした同業者、というところか。

「いい度胸だな、シャドウ・スター影の星　首領　魁」

真っ直ぐに魁を見据えて、兵士がその手に持っている鉄槍を構える。洗練された動き。

「だから？」

だが、向けられた槍の矛先を全く脅威ともせず、魁は鼻で嘲笑うかのように言い返した。

兵士が、じりつと半歩前に出る。

「ここでお前を捕らえる！」

気迫の言葉と共に、兵士が真正面から魁に向かって走り出した。重そうな鎧を着込んでいる割に、その動きは素早い。

魁が鞘からナイフを引き抜き、兵士の懷に潜り込もうと、駆け出す。

が、

「こ、来ないで　っ！！」

そんな叫び声と共に、走り出そうとした魁の頬を何かが物凄い勢いで掠めていった。

魁がそれを目で追うよりもやや早く、ドゴオ、とそんな間抜けな擬音がびつたりの音を立てて、十数センチはありそうな分厚い本が、兵士の頭にクリーンヒットしていた。

ふらり、と仰向けに倒れこんでいく兵士。魁の目の前では、それを見た、今しがた強烈な一撃で大の兵士を昏倒させた当の少女が、両手を腰に当てて何故だか誇らしげにふんぞり返っている。

少女のその見事な投げっぷりに、魁は半ば口を開いたまま呆然と立ち尽くしていた。しかし、そんな魁の鼻先に、突如勢いよく振り返った少女の人差し指が突きつけられた。

「あーっもう何やってんのよ！　早く逃げなさいよ、あたしを連れて！」

開口一番。その口から出てきた言葉は、最初のしおらしさなど欠片もなかった。

またもや唐突なその一言に、不機嫌さを隠そうともせず魁が目細める。

「……お前を連れて　？」

「そうよ、あたしを連れて逃げるの！　か弱い乙女がどこぞの敵つくて汗臭い兵士どもに追いかけてんのよ。普通男なら乙女を連れて颯爽と逃げるもんでしょ！」

威勢のよい、高らかなソプラノ。だが、魁はその言葉に異を唱え

ずにはいられなかった。

「誰がか弱い乙女だって……？」

「あたしが」

「……悪い。もう一回」

「だからあたしが」

「すまない。どこをどう見たらか弱い乙女に見えるのか俺には理解不能だ」

「あああああつ！ もうつ！ 早くしてよ！ 捕まっちゃうでしょ！」

彼女の言葉が示すとおり、急速に近づいてくる大量の人氣を魁は感じ取っていた。

仲間もいないこの状況、兵に囲まれればどうなるのかは想像に難くなかった。

「ねえちよつと！ あんたなんとか言いなさ……！」

「喚くな、五月蠅い」

溜息一つ。頭痛のしだした頭を振って、魁は少女の体を軽々と肩に担いだ。

ひゃあ、と上がった短い悲鳴を無視して、無言で、手に持っていた袋を少女に押し付ける。

それと同時に、数え切れないほどの大量の兵士が部屋に雪崩れ込んで来る。

取り囲まれるよりも早く、魁は床を蹴り、本棚へと足を掛けた。

そこから間髪おかず、天井からぶら下がった古いシャンデリアに飛び乗り、更に上へ跳躍。魁の視線の先 目指す場所には、この宝物庫唯一のガラス戸。

「ま」

待て、と、眼下から投げ掛けられた一言を聞くよりも早く、魁は月明かり差し込む天窓へと身体を投げ出した。

* * *

身の凍るような冷気が漂う神殿の外、担いでいた少女を砂地の上に下ろし、魁は盛大な溜息を吐き出した。

「ったく……お前のせいで色々計画が台無しじゃないか」

「あらそう？ それはごめんなさい」

全く悪びれる様子のない少女に、魁の中に殺意に近いものが湧いてくる。この女のせいで魁は敵に見つかり、満足に目的を達成することもできなかった。下手をすれば捕まっていた可能性もある。しかも、何故その諸悪の根源を助けなくてはいけないのか。

「顔も見せずにどういつもりなんだ。それに神殿に忍び込むならもっと用心して入れ。お前のような技量で神殿の宝を狙うなど、俺の目から見ても自殺行為に等しい」

「忍び込む？ あたしは忍び込んだわけじゃないわよ。それに宝なんか興味ないしね」

「……？」

言葉の意味が解らず、魁は怪訝そうに眉根に皺を寄せる。

「あたしは神殿あそこから抜け出してきたの」

少女が細い指先をフードにかけ、ゆつくりと下ろしていく。月明かりに照らされて、その顔が夜でもはっきりと見え 魁は息を呑んだ。

砂漠に生きる者にしては珍しい、透き通るような白い肌。さらりと流れ落ちる、腰よりも長いブロンドのポニーテール。

星空の下、月光を浴びるその姿は、まるで月の女神のように神々しく

「あたしは星華・セイリオス。貴方達が『星詠みの巫女』キノスラって呼ぶ存在よ」

浮かべた笑みは、導く星のように強く輝いていた。

第一章 キノスラ

灼熱の太陽が、砂で覆われた大地を容赦なく照らしていた。その強い光が砂で灰ばんだ石壁を白く照らし、熱せられた地面からはゆるらと陽炎が立ち昇っている。

砂漠の昼は、暑さとの戦いだ。

なおかつ今日は街の外で砂嵐が起こっているせいか、本来ならば涼しさをもたらす風すらも、吹く度に砂が肌に張り付いて気持ちが悪いくらい。

いくらオアシスの周りに出来た街といっても、大自然の摂理には敵わないという事を実感させられる。

その熱気の立ち込める砂漠の街・ナヴィガトリアを、猫の毛のように跳ねた金髪を揺らして、魁は黙々と歩き続けていた。

「ねえねえ」

その広い背に、鈴を転がしたような声が投げ掛けられる。魁の背後には日の強い砂漠というのにショートパンツとキャミソールしか身に着けていない少女と、鳶色の髪をした背の低い少年がちまちまと歩いて付いている。声は、その二人の片方　少女のものだ。

しかし、彼は応えようと歩みを止めようともしない。

「ねえってばあ」

もう一度、少女の声が投げ掛けられるが魁の反応は変わらず。

さすがに痺れを切らしたのか、その声の持ち主はとうとう声を張り上げた。

「ちょっと聞いているの!？」

「聞いてない」

聞こえている、という事を如実に示しながらも魁は言葉でそれを否定する。

その態度が癪に障ったのか少女が大声を上げて抗議しようとし、彼女を必死になだめる少年。

そんな様子が視界の端に映るが、魁は背後でのやり取りを当然の如く無視し、大通りの一角に設けられている、二階建ての建物の古びた扉を押し開けた。

瞬間、風のように押し寄せる、立ち込める熱気と騒ぎ声。そして強烈な酒の臭い。

魁がその酒場に足を一步踏み入れるのと同時に、彼に向かって幾つもの罵声にも似た声が挨拶代わりに投げられた。

「よお魁！」

「珍しいな！ 今日女連れかあ？」

大ジョッキで水のように酒を飲みながら、魁をからかうように声を上げる中年男どもや柄の悪そうな大柄の男達。その中には魁の同業者や、表では口にも出来ないような仕事を手にかけている者もいる。貧民街スラムにあるこの酒場は、そういった者達が集まる場所だった。対し、魁はまるでそれらが他人事のように、徹底的な無視を決め込んでいた。

だが、

「神殿に忍び込んだんだって！？」

「人相書きが出てたぜ！ お前もいい加減首が危ねんじゃねえのか！？」

その一言にピクリ、と魁の右頬が引き攣った。

反射的とも思える反応の速さで、魁は気だるげに進めていた足を止め、その声の飛んできた方向をゆっくりと見遣る。金色の髪によつて作られた影から覗く、釣り目気味のアイスブルーの瞳。

彼の氷の刃を思わせる視線が、問題の一言を発した男を貫いた瞬間。愉快そうに酒を飲んでいた男の笑顔が時を止めたかのように固まった。

途端、酒場が不気味なほど静まり返る。

先程とはがらりと雰囲気の変わった、風のない水面を思わせるような静寂に包まれた店内を抜け、魁はカウンター席へと付いた。その左隣に髪の長い少女、更にその隣に少年が腰を下ろす。

「……いつもの。強めで」

「あいよ！」

ぶつきらばうな魁の注文に、カウンターに立っていた大柄な男店主が威勢良く返事をする。その明るい声に、不穏な空気に支配されていた酒場は徐々にいつもどおりの騒がしさを取り戻していく。

数秒後、いつも好んで飲むカクテルが手際よく作られ魁の前に置かれた。グラスの縁に添えられた、幾筋もの切込みを入れたライム。この男は、見た目に似合わないお洒落心でこういった飾りをつけることが多いのだ。

それを感情の任せるままに、魁は一気に呷った。グラスから急激に減っていく黄色い液体を見て、先程までの怒りはどこへ行ったのか隣にいる少女が興味深そうに目を丸くする。

「なーにそれ？ お酒？」

「おうつ。嬢ちゃんも飲むか？」

「飲むー」

そう輝かんばかりの笑顔を見せられ、店主もそれに釣られて笑みを浮かべる。

（少し弱くしてやれよ）

そんな店主に向かって、魁はグラスを傾けながら目配せする。すると、素早くその意図を読み取った店主が、返事代わりに片目を瞑って見せる。魁が好んで呑む酒は美味ではあるのだが、薄めても尚かなり度が高いのが難点なのだ。特に、女が飲むにはきつい代物だった。

店主が魁と同じカクテルを少女に、無数の気泡が立つ炭酸水を少年にそれぞれ手渡す。

「あいよ、嬢ちゃん。斎いっけはこっちな」

「ありがと」

「ういッス！ ありがとうッス！」

斎と呼ばれた鳶色髪の少年と、例の少女がそれぞれ礼をし、口をつける。どうやら、少女はそれがお気に召したらしく、気分上々に

斎と話し込み始める。これではしばらくはゆっくりとした時間が過ぎそうだ。

この場所に来るまでの道のりを思い出し、グラスに目を落とした魁の口からは自然と溜息が漏れた。

その様子を見、店主が呆れ顔になる。

「で、魁。昨夜、やらかしたんだって？」

「どうだっていいだろ」

つい数分前にされたものと同じ質問をされ、魁はぶっきらぼうに言い口を閉ざした。だが、店内に群がっている男達に対するものと違い、店主への態度は角が取れたものだった。

目の前の大柄な男性　この酒場を営む初老のマスターは、魁を幼少の頃より知る数少ない人物の一人であるのだ。昔から親も同然に世話になり、特に、魁が盗賊業を始めてからはその数も増えた。だが、そうは言っても、触れて欲しくないことだである。

「おっちゃんには関係ないだろ」

突き放すような魁の物言いに、店主　通称『おっちゃん』の眉根に皺が寄る。

「そうは言っけどなあ、宝を盗んだだけじゃなくて、その……『キノスラ』を連れ出したんだろ？」

「連れ出したんじゃないくて、抜け出したの」

渋々応えようとした魁が口を開くよりも早く、不機嫌そうな声がその質問に異を唱えた。視線の先には、やっぱりというべきか、例の少女。

「魁……この子は……？」

店主の訝しげな視線が、魁の隣に座る細身の少女に向けられる。それは『誰か』を尋ねるものではなく、事の真偽を確かめるものだった。

頭痛のしそうな頭を押さえ、彼にだけ分かるように魁は小さく頷いてみせる。

「まさかとは思ってたが、やっぱり……か」

にこり、と。豪快な、それでいてどこか爽やかさを感じさせる笑顔
顔を浮かべ、店主は少女に握手を求める手を差し出した。

「夏埒^{からつ}だ。よろしくな。皆にはおっちゃんって呼ばれてる」

「よろしく。あたしはせい……ふがつ！」

おっちゃんこと、夏埒にならって名乗ろうとした少女の口を、横
から伸びてきた魁の手が押さえつけた。突然息が出来なくなり、少
女が暴れる。その顔が苦しさを訴えるようになって、魁はようやく
手を放した。

「な、何すんのよお！」

「余計な事言うな。自分がどういう立場が分かってるのか」

「魁のいけずう。いいじゃない別に、それぐらい」

「良くない。周囲のやつらに知られたら面倒だ」

自分を面倒扱いされたことに対してか、少女の顔が一瞬にして怒
気に染まった。

手にあった酒を豪快に飲み干し、目くじらを立てて、店主の前に
ドンツとグラスを置く。

「おっちゃん、もう一杯頂戴！ あ、今度は高いやつにしといてね
！ 勿論お代は魁の方で」

「ちよつ……！ お前勝手に、それを誰の金だと思って……おっち
やんも意気揚々と作り始めるな」

あくまでも声を静めたまま、魁は少女を諫めるが、彼女はその声
を気にする素振りすらも見せない。

「お前、誰のおかげでこうしていられると思ってるんだ」

「魁様のおかげです。感謝してます」

その棒読みの台詞に、今まで散々我慢してきた魁の中で何かが音
を立てて切れた。

（この、女は……！）

一瞬、相手が女という事すらも忘れて殴り飛ばしたい衝動に駆ら
れるが、何とか理性で押さえる。きつと相手が野郎だったら確実に
その首筋にナイフを押し当てている。

こちらは散々迷惑をこうむって、首すら危うくなっているのにこうして自由を堪能させているというのに

自分のせいで俺がどれだけ苦労してるのか分かっているのか。

斎が魁の異変を察知して、少女を宥め二人の仲裁に入ろうとするが、それも次の瞬間には徒労に終わった。

（いい加減にしろ　！）

「星華っ！」

その魁の鋭い一言に、店中からガタンツと椅子が動く音が聞こえ、直後再び店内が静まり返った。

しまったと、自分が口にした名の重大さに気が付いたときには、もう遅い。酒場中の視線が隣に座る少女に集まっていた。

「ほえ？」

静まり返った店内で、皆の視線の先にいる少女　星華・セイリオス。第五十六代星詠みの巫女の名を継ぐ少女だけは、事態が呑み込めずにただグラスを傾けていた。

星の動きや輝きを見、未来を占う星詠み。その占星術を専門的に扱う者達を『詠人^{よみびと}』と呼ぶ。

その詠人たちの頂点に立ち、フォニカ神殿において星に舞と祈りを捧げる役目を授かった者　それが『星詠みの巫女』である。

星詠みの巫女は原則的に、自分の命運を司る『宿星』が、星回りも中心である北極星であるものが選ばれる。人の世における星回りの中心　不動の星として人々の道標となる象徴的存在。故に、星詠みの巫女となった者には、代々キノスラの名が授与されている。

その役を十年ほど前に継いだ第五十六代目星詠みの巫女。それが、今魁の隣にいる星華・セイリオスだ。

星詠みの巫女は、その重要性から本来ならば星詠みに関する一切を管理する宗教組織・星枢軸^{フォエニクス}　その本部であるフォニカ神殿によって、その最奥で護られている。年に一度、三日間かけて星を讃える星夜祭で、夜空の下その姿を見ることは出来るのだが、実際にそ

の姿が見られるのは権力や富をもった一部の者たちだけであり、一般の者たちはせいぜい遠くからその姿を米粒程度に見ることしか叶わない。

ましてここにいる者たちの殆どが、財や名誉を失ったり裏の仕事に手を出したりしている、いずれにしても表では生きられない者たちだった。星詠みの巫女など、雲の上のそのまた上、遥か高いところにいる存在。

その存在が、突然スラム街のど真ん中にある酒場に現れたとなつては、大変な騒ぎになることは目に見えていた。だからこそ、魁は彼女の存在を公にすることを避けたかったのだが……

「マジで星詠みの巫女？」

「本物の星華・セイリオス!？」

酒に酔った男達がわらわらと星華に群がってくる。邪魔だ、五月蠅い、暑苦しい、あっち行け。魁が星華の隣で不機嫌そうな顔をしているのにも関わらず、先までの怯え具合はどこへ行ったのか男達に気にした様子は見られない。

「なな、ちよつと踊り見せてくれよ!」

やがて、群がる男の内の一人がそんなことを言い出す。

「ちらり、と気になって様子を伺えば、

「んー? どうしよつかなあ? ……高く付くよ?」

「何でも奢つてやるよ! 皆だつて見たいんだからさ。巫女様の宇宙一の舞をよ!」

「なあっ!」と、声を張り上げて男が酒場中の奴らに同意を求め、それに大きく頷く酒飲み達。

「んじゃあ、星華・セイリオス、一曲いつきまーす!」

と、まんざらでもない様子の星華。

酒場の一角に作られた小さなステージに向かっていくその小さな背中を見、

(身の程知らずが)

その胸中の呟きは、星華と酒場の者双方に向けられたものだ。

あれのどこが可愛いと思うのか、魁には不思議で仕方がない。

まあ、可愛くないこともないと思う。というよりも、容姿を言えば確実に平凡の域を出るだろう。

小さな動きにもあわせて揺れる、流れるようなブロンドの髪。ほんの少しの光にも艶めくその髪には、一つの癖もない。

瞳は澄んだ奥深さを併せ持った天色。光の角度によつては時々神秘的な翠色が覗く。

日焼けしていない白い肌に、華奢ではあるが程好く肉の付いた体つき。巫女として舞を嗜むためか、その体には無駄というものが感じられない。

ポニーテールに括られたその髪が、活発な印象を与える。世の女達がさぞ羨ましがらるだろう容姿を持った少女。それを目の前にして、ここにいる連中が目を奪われないわけがない。

ただし、性格を除けば、だ。

……かくいう魁も、その姿を初めて見た瞬間は呼吸を忘れてしまったのだが。

カラリ、と魁はグラスの中の氷を回す。

「で、お前は何だつてあの子を連れて来たんだ？」

「連れて来たんじゃない。あいつが無理矢理付いて来たんだ」

魁はそう言つて、昨夜の事の顛末を説明する。

神殿に忍び込んで、隠された宝物庫を狙つてきたこと。途中、あの女の邪魔を喰らつて計画が失敗に終わったこと。そして、その後囹役として別行動を取つていた仲間達と合流し、魁は先に聞きだしておいた星華のことを話したのだった。

神殿の奥に閉じ籠っている 本人談では閉じ込められている生活に嫌気が指し、自由を求めて盗賊団の騒ぎに乗じて上手く抜け出してきたらしい。だが見張りの兵たちに見つかつて危うく捕まりそうになつてしまい、そこで隠れようと咄嗟に入った部屋で魁と鉢合わせ。そして現在に至る。

成り行き上、魁は星華を連れてきてしまい、星華は結果として抜

け出すことに成功した。しかし、だからといって星華を望みどおりに自由の身にするわけにはいかなかった。

星詠みの巫女は、人々にとって道標となる大切な存在。その役目を背負う彼女がいなくなっただとなれば、民の間に動揺が走るのは必至だった。

仲間と話し合い、当人には悪いが星詠みの巫女を神殿に早急に帰すべきだという意見に帰結した。

魁たちとて神殿を全面的に敵に回したいわけではない。相手は世界中に根の葉を広げる星枢軸、対しこっちは一介の盗賊。直ぐにでも星華を送り返したかったが、フォニカ神殿に堂々と返しにいくわけにも行かないのが現状だった。

魁を首領とする盗賊団「影の星」は、以前から神殿と何かと敵対することが多く、事ある度に衝突を繰り返してきた。

それどころか、今回の一件で『星詠みの巫女誘拐』などという罪状を突きつけられ、下手に神殿関係者の前に姿を現すことも出来ない状況だった。

この酒場に入ったときの「人相書き」や「そろそろ終わり」とはそういった意味だった。

最良の方法は、星詠みの巫女である星華本人が自ら帰ってくることなのだが、それは到底期待できなかった。なにせ、彼女は捕まる危険を冒してまで神殿を抜け出してきたのだ。わざわざ戻るわけがない。

結果、魁は星華・セイリオスを一時的ではあるが盗賊団に身を置く形で保護することに決めたのだ。

神殿の最奥で護られてきた少女だ。街の治安、特にスラムの危険性など知らないはずだ。理由はどうあれ星華がこちら側にいる以上、何かあつてはそれこそ本当に魁達の命が危うい。

そう覚悟は決めたものの、これがもうちょっと大人しい女だったら、とどれだけ望んだことだろうか。

「誰が好き好んであんな厄介な女抱え込むかよ……」

はあ、と無意識のうちに深く長い溜息を吐いてしまう魁。その視線は長いブロンドを靡かせた少女の背に注がれていた。

「あんな……星枢軸の奴」

どこか嫌悪感を滲ませた一言と共に、スッ、と細められる目。

その今までとどこか違う魁に夏埒と斎から出てくる言葉が消え失せる。

しかしそれも一瞬のことで、そうだ、と夏埒が唐突に思い出したようにに呟いた。

「アメフリが呼んでたぞ」

夏埒の口から出て来たその名に、魁はグラスを傾ける手をピタリと止めた。

「アメフリが？」

「そのままだと用事が忘れられそうだから会ったら言っといてくれ、だよ」

そう言われ、彼の視線がどんどん明後日の方向に逸れていく。その様子を察した夏埒と斎の視線が魁に痛いほど突き刺さる。

そして、グラスを口につけたまま、一言。

「……忘れてた」

跋が悪そうに呟いた魁に、おい、と夏埒が低く呻く。

「お前それでも 影の星 の首領かよ」

首領だからなんなんだと言い返したいところだが、仕事の約束を忘れたことを突かれては言える言葉もない。

再び疲れたような溜息一つ吐き出し、魁は残った酒を飲み干してすつと立ち上がった。

そこには先程まで見えていた、崩れた表情はない。あるのは敵を見据えるのと同じ瞳をした、仕事の顔。

「斎、行くぞ」

「了解ッス！」

数枚の安い硬貨を酒代としてカウンターのの上に置き、踵を返す。その背を、夏埒が呼び止めた。無言で振り向いた魁に、夏埒が小さ

なステージの上に立つ少女を親指で差す。

「あの子は？」

「……放っておけよ」

夏埦の視線の先を目だけを動かして一瞥し、魁は小声で吐き捨てた。

そんな魁に、夏埦は信じられないものを見るような視線を向けた。その理由は、星詠みの巫女に対する信仰心の強さだろう。

宗教として信仰される星、そして星詠みに対する人々の信仰心には開きがある。

星詠みを単なる『占い』の一言で片付けてしまう人もいれば、『予言』であるとして星詠みが全てである、といった感じで病的なほど強い信仰心を持ち星詠みに依存する人もいる。それは、祈りによって星の光を守り、全天の枢軸を支えるとされる星詠みの巫女に対しても同じであった。

信仰心の薄い魁には理解できないが、そういった信仰心の多くは予言にも匹敵する星詠みの過去と巫女の功績に裏づけされているとされる。

顕著な例としては、過去に星詠みによって大火災を小規模に抑える事が出来たり、水害や日照りをピタリと予測。また、全天の星の輝きが翳ってしまい、同時に大規模な疫病が蔓延した事が上げられる。その際には、巫女が星に祈りと舞を捧げた途端星が光を取り戻し、疫病も治まっていったなど、星詠みを単なる占いとしてだけは扱えない面もある。

そんな事例もあつてか、巫女は人々の導き手として崇められ、星詠みと、星詠みの巫女に対する信仰心は強い。

ナヴィガトリアは、古来よりそういった信仰心の強い者達が集まる場所でもある。故に夏埦は、熱心な信者溢れる街の真ん中に星詠みの巫女を連れ出し、更に一人で放置していいのか、という事を懸念しているのだ。下手したらパニックになりかねないだろう。

しかし、それも真つ当で善良な民に限ったこと。それぞれの事

情で星枢軸に恨み辛みをもつ奴が多いこのスラムでは関係のないこととだ。それは先程の男達の様子からも分かる。

「だがなあ……」

それでも尚納得のいかなさそうな夏埒に、魁は渋々応える。

「帰りには迎えに来る」

そう言つて、魁は再び酒場の戸をくぐった。

＊ ＊ ＊

星を奉る聖なる地　聖都ナヴィガトリア。熱砂の砂漠の中に鎮座するこの街、ナヴィガトリアは、星詠みを司る星枢軸によって統治されている。

街の中央に巨大なフォニカ神殿が据えられ、そこから放射線状に黄道十二宮に合わせて十二分割されている。ちょうど真北に双児宮ジヘミニーが、死を司るとされる人馬宮サジタリウスが真南に位置付けられ、魁が住むスラム街は北東の巨蟹宮にある。

その内の一つであり、金牛宮タウロスに住む情報屋　それが畢あめふりである。

魁が住むスラム街のある北東の巨蟹宮より歩くこと十数分。炎天下を歩き二宮となりの金牛宮に辿り着いた魁は、その一角にある細い路地へと足を向けた。薄暗いその先に、決して広いとはいえない細い階段が見える。

魁は慣れた足取りでその階段を下りていった。地下に潜る深さに比例するように、そこに潜んでいた冷氣　いや、寒気を感じさせるような薄気味悪い空気が這い上がってくる。その先には、真つ黒に染められた重厚な金属の扉。

看板も灯りもないそこが、店の入り口だ。

「……相変わらず陰気だな」

扉を開け、光が差し込まずに闇色で覆われた室内をぐるりと見回す。同時に、

「陰気で悪かったね」

どこからともなく響いてきた不思議な声色と共に、部屋の中に炎が灯った。その光に照らされて店の奥に人の輪郭が浮かび上がる。

最初に目に付いたのは砂漠の暑さに似合わない闇と同化した色のローブだった。それから、それと同じ色の髪。鬱蒼と伸びた前髪に覆われて目元はよく見えないが、纏う雰囲気は不気味さを欠片も感じさせない。

その艶のある黒髪に炎の光を反射させながら魁達を出迎えた情報屋・畢の口元には、言葉とは裏腹に笑みが浮かんでいた。

「いらっしやい、魁。斎君もよく来たね」

「お久しぶりッス！」

手近にあったソファに座った畢の向かいに、魁と斎も腰を下ろす。

「依頼通り、持ってきたぞ」

「うんうん、約束通りね。でも随分と来るのが遅かったんじゃないかい？ その様子だと、また僕の存在は忘れてたみたいだね。……

魁？」

そう畢はわざとらしいほどくつきりとした笑みを形作り、魁を見据える。その視線から逃れるように、魁は酒場と同じく明後日の方向を向いた。

魁が畢のことを忘れ、仕事をすっぱかしたのはこれが初めてではない。印象が強い割になかなか記憶に残りづらい。それが、魁が思うところのこの情報屋の特徴であった。

「忘れても仕方がないだろ。お前、影が薄いんだから」

「闇に潜んで生きる情報屋が、影が濃くてどうするんだい？」

そう言つて畢が面白そうにくつくつと喉の奥で笑う。

いつも通り掴み所のない畢に頭を抱えつつ、魁は片手に持っていたものを無造作にテーブルの上に置いた。

「とりあえず、例のやつだ」

テーブルの上に置かれたもの。それは一冊の古い本だった。表紙がめくれて砂が付き、紙も十分に黄ばんでいて見た目にもかなりの年代物と分かる。昨夜神殿から複数盗んできたものの本の一つだ

った。

「……これだけ？」

「これだけ、だ。他にもいくつかあったが、唯一読めそうなのがこれだけだった」

今回この情報屋に頼まれたことは、魁が神殿に忍び込んだ際に何か情報を手に入れてくること。畢も魁と同じくしてあの隠された宝物庫にあった様々な書物。そこに記された日の下にはない情報を欲していたのだ。

畢は本をその手に取り、まずは外側から、と様々な角度から本の状態を観察する。

「ナヴィガトリアの歴史書、みたいだな」

「……魁は中身見たの？」

その問いに、魁は静かに首を横に振る。

「いや、流し読みした程度だ。古くてあちこち破れている上に、旧語で書かれててそう簡単に読めそうにないからな」

旧語というのは、今は使われていない旧世界語。地域語のこと

だった。昔は世界中それぞれの地域によって異なる言語が使われていたのだが、数百年前に今の現代語への前面的な統合が行われた。

ある言語を基軸にし、多言語を吸収して作られたのが現代語である。

この地域で使われていた言語は今の言葉に全く要素が受け継がれていないわけではないので魁も一応は読めるのだが、解読にはそれなりの労力と時間を要する。

ぱらぱらと畢が魁の言葉を確認するようにページをめくる。

言葉に反さず、中身もところどころ破れ、めくられる度に宙に埃が舞う。とても読める状態とはいえなかった。

一度中身にざっと目を通した畢が、再び最初のページから目を通していく。

長引きそうなその様子に、魁は読み終わるのを待つことなく話を進めた。

「で、そっちで何か情報は？」

その言葉に、畢は本から目を放さずに答える。

「特に何も進展なし、だよ。相変わらず、あの遺跡は星枢軸の守りが堅すぎる」

いつもどおりの言葉。故に半ば予想は付いていたのだが、それでも残念な言葉に魁は落胆の色を隠せなかった。小さく「そうか」とだけ呟く。

「……遺跡って『星の旧跡』のことッスか？」

と、それまで何も発していなかった斎が首を傾げて魁を見た。

斎はまだ幼いために仕事を学ぶために魁についてくることは多いが、仕事の話には基本一切口を挟んでこない。そんな斎がこの場で自ら発言することは珍しかった。

「ん、ああ……^{ミラージュ・ルイン} 蜃気楼の遺跡 星の旧跡の事だが……」

蜃気楼の遺跡 別名『星の旧跡』。聖都ナヴィガトリアより東の砂漠に位置する、枯れたオアシスの畔に建つ千年以上前に滅びたとされる都の遺跡だ。周囲の蜃気楼地帯と呼ばれる砂漠の中、それらに護られるようにして聳え立っていることからその名で呼ばれている。

過去に星に関する重要なことがあったとかなんだとかで星の旧跡とも呼ばれ、それ故に神殿が直轄管理している場所だ。しかし、いくら重要な場所といえどその嚴重さは度を逸していた。

なにしろ、ここにいる畢ですら情報を断片的にしか掴むことができないのだ。魁から見ても、畢は稀にない情報網の持ち主だ。その彼が現在掴めている情報は警備兵たちの交代時間や外側から見た遺跡のおおよその造りのみ。

その中がどのようなになっているのか、その場所では何があったのか。欲しい情報は、神殿に隠されていたあの宝物庫の物のように闇の中だった。

神殿側にはそうしてでも護りたい何かがある。そのために、魁は畢に情報収集を依頼していた。

「それがどうした」

「い、いや、別に……ただ、魁兄ずっとその遺跡について調べてるみたいッスから……」

どこか突き放すような魁の言葉に、斎が戸惑いを隠すようにハハと笑う。しかし、それは魁の鋭い呼び声によって直ぐに途絶えた。

「斎、余計な詮索をするな。これはお前が首を突っ込んでいい話じゃない」

「ご、ごめんなさいッス……」

「魁も厳しいねえ」

項垂れる斎を見て、畢が苦笑混じりに呆れる。

「……当たり前だ」

そう視線を厳しくした魁に、畢はふーん、と取り分け興味もなさそうに相槌を打ち、音を立てて本を閉じた。

「読めそうか？」

「……情報としては役に立たなさそうなんだけどね……魁。これ貰っていいかい？」

畢の意外な申し出に、魁は少しだけ目を丸くする。

「別に構わないが、どうかしたのか？」

「……個人的にちょおーつと調べたいことあるんだよね」

見えない双眸が底光りする。畢がそう言った瞬間、魁は僅かだがそんな錯覚すらも覚えた。

「さて、それじゃ俺たちはお暇させていただ……」

「ちよつと待ちなよ」

どこか慌しく立ち上がった魁の服の裾を、身を乗り出してきた畢ががしつと掴んだ。

「代金、お忘れじゃないかな？」

「その本でいいだろう？」

「僕は言つたよね……？」『情報としては役に立たなさそう』って

そう、わざとらしいほどくつきりとした笑みを口元に刻んで。置かれた机に半分身を乗せるようにして、詰め寄ってきた畢に対し、魁は無意識の内に半歩体を引いて睨み返す。

だが、酒場の男達を黙らせたその凍てついた瞳にも畢が怯むことはなかった。

星の旧跡に関する情報を常に収集してもらう。代わりに、畢の依頼を常に無償で引き受ける。それが互いの仕事の代金であり契約だった。

畢の仕事は『結果に関わらず情報を収集すること』であり、魁の仕事は『畢の依頼を達成すること』である。

だが、持ってきたものが情報にならないということは、今回の依頼に反する。ならばこちらが依頼したことに對してそれ相応の代金を払うのが常道というものだ。

だから、魁は畢に何か追及される前に、とつとと退散したかったのだ。

「盗賊団 影の星 首領　今まで全くと言っていいほど女性に興味を示さなかったあの魁が女を手元に置いている。しかもそれが星詠みの巫女。今スラムの連中がこれ以上欲しがってる情報はないんだよ。話してもらおうかなあ、何があつたのか魁がどうしちゃったのか」

目を見ることはできないが、見ることができるとしたら畢の目はさぞ爛々と輝いていることだろう。噂話好きも、情報屋としての性分か。

「さあ、吐いてくれるよね？」

その追及の魔の手から逃れる術は、今の魁には備わっていなかった。

* * *

「あの、馬鹿……」

酒場を出るなり、開口一番魁は呆れ顔で呟いた。

畢の所を出た魁は先に斎を盗賊団のアジトに戻らせ、真っ直ぐに夏埒の酒場へと向かった。あの、神殿の奥で護られてきた星詠みの

巫女を迎えに行くために。

だがいざ酒場に着いてみれば当の本人の姿はなく、訊ねた夏埒から返ってきた言葉は「先に帰った」の一言。

下手に外を歩かせるのも危険だと思い、それならばまだ夏埒のいる酒場のほうが安全だと判断して置いて来たというのに。

面倒なことになった、と魁は今日何度目になるかも分からない小さな溜息を吐き出した。

予想していなかったわけではない。むしろ彼女の性格からしてこうなる確率が高いと踏んでいたし、この事態になることを望んでいたのも事実だ。しかし、心のどこかで予想を裏切られることを願っていたのも事実だ。

沈んで行きそうになる思考を中断させて、魁は強く地を蹴った。たった一蹴り。しかし、それだけで魁の体は軽々と宙に舞い上がった。そのまま慣れた動作で酒場の一階の屋根に上がり、続けて二階の屋根　建物の屋上へと登る。

二階建ての酒場の上からは全てを見られるわけではないが、それでも粗野な光に照らされた夜の町が一望できる。

ナヴィガトリアの中でも、スラム街は無駄に入り組んだ構造をしている。人探しであれば地上を歩き回るよりも、高い場所から探したほうが断然早い。

魁は不明瞭な足元に臆することなく、並ぶ石造りの町並みの上を渡っていった。

ダンッ、と鈍い衝撃が星華の頬を打った。冷たく硬質な感触。その感覚を感じ、星華は自分が壁に叩きつけられたのだと理解した。

「くぁ……」

無骨な手で壁に押さえつけられている頭を動かして、背後にいる三人の男達を睨みつける。だがその反抗的な瞳も、今は奴らを興奮させる材料としかならなかった。

あまりにも遅い魁を待ちくたびれて酒場を出た星華を待ち受けて

いたのは、昼よりも治安の悪くなったスラム街だった。

星華とて巫女として自身を守るための護身術は習得している。神殿に呼ばれた各地で名を馳せる様々な武術の達人を師とし体得した力は、粗野な喧嘩をするごろつきの二人や三人程度なら勝てるほどだ。

だが、その認識が心の隙を招いたのか、いつの間にか忍び寄ってきた三人の悪党どもにあっさりと捕まり、今こうして路地の最奥で人生最大ともいえるピンチを迎えていた。

（力、が……）

強い酒ではないが、先ほど酒場で普段は飲まない酒を飲んだせいだろう。どこか頭がぼうつとし、四肢に力を込めようとしても思い通りにならない状態だった。

いつもであればこんなことにならないのに。内心そう毒づく星華は、今はそこらへんにいる小娘となんら変わらなかった。

急速に冷えていく空気が、大きく晒した星華の肌を刺す。日はとうの小一時間も前に沈んでいた。

「巫女様よお、あんまり暴れないで下さいよ。こっちだってお痛しくないんですから」

男が下卑た笑みを浮かべる。

その男の緊張が緩んだ一瞬の隙を狙い、星華はまだ自由を奪われていない左足を振り上げた。がつ、と鈍い音を立てて、星華の蹴りが男の脇腹に鮮やかに決まる。だが、

「きやあつ！」

ポニーテールを強引に引っ張られ、星華の口から甲高い悲鳴が迸った。

「……調子にのってんじゃねえぞ」

生暖かい息がかかる距離から発せられた男の声に、背筋が粟立った。逃げる逃げる、と頭の奥で本能が警鐘を鳴らしている。なのに、体が動かない。

対抗できない悔しさに、星華が齒軋りしたそのとき、

「そいつを放せ」

突如として髪を引っ張る力が緩んだ。

「退け。出来るのであれば事を穏便に済ませたい」

状況を把握するよりも早く聞こえた低い声。見上げれば、既に見慣れた月色の髪が夜風に揺れている。

隣接する建物の屋上。そこに、月明かりを背負った魁が佇んでいた。

「か、い……」

「はっ。こんな上玉を目の前にして誰が退くっていうんだよ！」

「首領様自らお出ましくてわけか。そんなに大事なら取り返してみろっての！」

星華を掴む男が懷からサバイバルナイフを取り出し、彼女の首筋にあてがう。その冷たい刃触りに、星華は息を呑んだ。

満月の逆光のせいで、魁の姿がはつきりしない。それでも不思議と彼が眉根一つ動かしていないことは見て取れた。

「……先に手を出したのはお前達だ。よく覚えておけ」

射すような言葉を一つその場に残し、魁は屋根より飛び降りた。

勝負は、一瞬だった。いや、あまりにも呆気なさ過ぎて勝負とも呼べない。勝敗は魁が最初の一步踏み出した時点で既に決まってしまったのだから。

去っていく野郎共の背に荒んだ一瞥を投げ掛け、魁は足元に座り込む星華を見下ろす。

顔は見えない。俯いた影と夜の闇に隠れている。ただ彼女の体が震えているのは夜の寒さのせいではないだろう。

（所詮、こんなもんか）

「何のために、酒場にお前を残したと思ってるんだ」

問いただすような魁の声音に、星華の肩が跳ね上がる。

「仕事にお前を連れて行くわけにはいかない。おっちゃんの所にいれば俺がいなくとも安全だと、少なくともそう判断したからだ」

星華は応えない。

「分かったか？　ここは、お前みたいな温室育ちの奴がうるついいような場所じゃないんだ。痛い目みたくないなら」

冷たい光を宿した目。それは、酒場で星華の背に向けて一人呟いたときの瞳とよく似ていた。

「とつとと自分のいるべき場所へ帰れ」

今度こそ、星華は身じろぎ一つもしなかった。

「……嫌だ」

震えた、しかし毅然として呟かれたその一言に、更に言葉を畳み掛けようとしていた魁は口を噤んだ。

星華が真っすぐに魁を見上げてくる。体は小刻みに震え、今でも立つことすらままならない。けれど、それでもその瞳の光が翳る事はなかった。

「嫌よ、絶対に。絶対に神殿には戻らない。あんな、あんなところ

」

その視線に射抜かれ、魁は言うべき筈の言葉を失ってしまった。

二つの視線が、真っ向からぶつかる。似た色の、けれど違う光を宿した互いの瞳。まるで奥で炎が燃えているような星華の瞳と、どこまでも冷ややかな氷のような魁の瞳。

どれぐらいそうしていただろうか。時間にして、おそらく十秒にも満たない沈黙の後、魁は無言のまま右手を差し出した。

出てくる言葉は何もない。右手が、魁にとって言葉の代わりだった。

唐突なその魁の行動に、星華がきょとんとして魁を見返す。あまりにも突然すぎて、魁の行動が理解できていないようだった。

「もう遅い。とつとと帰るぞ」

瞬間、星華の顔が華やいだ。その笑顔の前ではどんな花も星も魔力を失ってしまう、それはまるで全天一の輝きを持つ天狼星シリウスのようだった。

繋がった華奢な手を引いて、魁は歩き出した。

第二章 影の星

時刻は深夜、既に日付が変わってから大分経っている。巨蟹宮のほうでは毎度のごとくまだまだどんちゃん騒ぎが続けられているだろうが、この宮は違った。

聖都ナヴィガトリア第一宮^{アリエス}白羊宮。おひつじ座の星を宿星に持ち、神殿の下でこの街の外務を担う一族が統括する区は、その大半が商店で占められている。

ナヴィガトリアを十二分割する宮はその区を統括すると同時に、星枢軸に仕え、街の統治の補助を行う。白羊宮はその内、外務全般を担う。この町並みは、主に西にある王都レクスフォールからの外部者を招き入れる検問所としての役割ゆえだ。

その店も、今はどこも漏れるような灯り一つ付いていない。

そんな中に、ポツリと一つの柔らかい光が浮かび上がった。最初

は小さく、それから徐々に大きくなってくる。
「^{けいりん}炯、^{りん}燐。問題はなにか」

屋根の上にひっそりと身を隠して、魁は自身の後ろで待機している二人に尋ねる。

「全くもってない」

「いつでも行けるわよ」

黒髪瘦躯の青年と彼の姉である黒曜石の瞳をした女性から返ってくる、頼もしい言葉。それらに頷き返し、魁は白羊宮のメインストリートに再び目を下ろす。

徐々に近づいてくるランタンの灯り。それを吊るした荷馬車。
「行くぞ」

魁の呟きを合図に、三人は飛び出した。

（やだなあ……）

前を歩く二頭の馬の手綱を握りながら、御者は内心独りごちた。

不気味なほど静まり返った街に、馬の蹄の音と馬車の車輪が回る音だけが木霊する。行く先は完全な闇に覆われていて見えない。こうして見ると、まるで地獄に続く道のようなのだ。

何故自分がこんな仕事をしなくてはならないのだろう。王都に近い平穏な町でしがたい御者として妻と一人娘のためにと毎日働いてきたのに、どうしてこんな表に出せないような仕事を。

いや、これもきっと普段の仕事振りが評価されてのことなのだろう。けれど、今更になって罪悪感が押し寄せてくる。

しかも雇い主は荷馬車の奥でぐっすりと就寝中。フォニカ神殿に仕えている貴族というのはどうにもものきなものだ。

でも、そんな仕事ももう直ぐ終わる。この馬車の中にいる人と積荷をフォニカ神殿に届ければ、大金とともに胸を張って家族の下に帰れる。

そう手綱を握り直したその時。

ドンツと、腹に響くような衝撃が荷馬車を襲った。突然のその衝撃に、馬達が嘶きを上げて足を止める。

間髪おかず、もう一度同じ衝撃が荷馬車を襲う。荷馬車の上に何かが乗ったのだと、そう理解する前に御者は馬車から引き摺り下ろされていた。そのまま、誰かに地面に叩きつけられる。

「なななな、な、何事だ！」

衝撃に目を覚ましたらしい雇い主 ナヴィガトリアでも有数の権力を持つ貴族が上擦った声を上げて、馬車の中から飛び出してくる。そう思った次の瞬間には、彼の体は地に伏せられていた。

黒髪の青年が良く肥えた貴族を地面に押さえつけている。後ろに回らないのではないかと思うような短い腕を背で掴まれ、その上から体重を掛けられている。

同様にして、自分の上にはウェーブのかかった黒髪の女性。一瞬その妖艶な姿に状況を忘れてしまいそうになるが、じやりと砂を踏み音にハッと顔を上げる。

下弦の三日月の夜空には数多の星の光。その光を遮る人影の蒼い

瞳が、御者を見下ろす。

「影の星の名を持って、この富、民に返してもらおう」
鮮やかな金髪を夜風に靡かせ、ただ一言、そう告げた。

「首尾はどうだ。彩、斎^{さい}」

ナヴィガトリアの治安を守る人馬宮の人間の姿が見えないことを確認し、魁は馬車の積荷を確認しているはずの二人に声を掛けた。
貴族と御者は、炯と隣がしつかりと縄で拘束し、少し離れた所に放置してある。

魁の呼びかけに、すぐさま無邪気な表情をした斎が馬車の窓からひよこりと顔を覗かせる。

「すごい量ツスよ。それも高そうな金ぴかのやつばかりツス。よくこんなに溜め込んだツスねー」

「……彩は？」

「魁さん、こつちです」

その声に応えて、姿の見えないもう一人 彩が馬車の後ろから現れる。濃い亜麻色の、髪と瞳が印象的な少女の手には少し黄ばんだ紙と安物のペンが握られている、

「どこら辺からのものだ？」

「物品の刻印からして、王都近くのだと思いますけど……知らない刻印の物もあるので、もしかしたらもつと遠くのものなのかも……」
「……星枢軸の手が意外と伸びてるな」

渡された紙に記された、おそらくは馬車の積荷の出所と思われる地名の数々を見て、魁は眉を顰めた。王都レクスフォールは勿論、その周辺の町や村、名前しか知らない遠い場所も列挙されている。ナヴィガトリアは星枢軸によって統治されている街。しかし、その統治は決して立派とはいえない。

聖都ナヴィガトリアは星奉りの中心地として、世界各地から熱心な星詠みの信者が集まってくる。ナヴィガトリアに在住しているものの大半がそういった人間だ。

彼らのその信仰心に付け込み、寄付金や何だといって無為に税金を高くしたりと圧政を繰り広げている。おかげで、ナヴィガトリアの人々の生活は困窮する一方だった。

影の星　はそうして星枢軸　主にフォニカ神殿の元に集まった金品を奪い、その内自分達に必要な分だけを頂き、余ったのを街の民間組織を通して人々に返している。

必要以上は要らない。それが魁の信条だ。多過ぎる金はトラブルの元になるし、なにより元は罪のない人々の物を奪い手に入れるだけであれば、星枢軸の奴らと何も変わらない。

その仕事も最近面変わりし始めていた。こういうことをやり始めた頃はナヴィガトリア内で集められたものを盗み、それを再び街の者の元へ返していたのだが、近頃は違う。今夜のようにナヴィガトリアの外で集められたものが、神殿貴族の本拠地であるここへ集まってくる。それは、星枢軸の要らぬ権力が拡大している証拠であった。

「にしても魁兄も星枢軸嫌いッスよねー」

報告を済ませ作業に戻る彩と入れ替わりに、斎が再び馬車から顔と覗かせる。その手にはゼロがいくつ付くか分からないようなほど高価だと思われる、色とりどりの宝石類。

「今月に入ってからまだ半月も経ってないのに、もう片手の数は神殿に喧嘩売ってるッスよ」

「あんだだけあくどい事しといて、嫌いにならないほうがおかしいだろーが」

「ま、僕も嫌いッスけどね。……星枢軸なんか」

スラムに生きるものは大抵が人に話せないような過去を持つ。ナヴィガトリアでは多くが財を失った者だ。その原因は神殿の圧政。まだ幼いが、斎も例外ではない。

しかし、斎はそう言った後に、「でも星華さんは好きッスよ！」などと満面の笑顔で調子のいいことを言ってみせる。出てきたその名に思わず頭痛を覚えそうになった、魁のことなど露知らず。

「無駄口叩いてないで、とっとと仕事しろ」

「無駄口じゃないツス！ こみにゆけーしょんツス！」

「……それを言うならコミュニケーション」

反論する斎の少し間違った言葉を正して、魁は渋々仕事に戻る小さな背に苦笑する。

その背後を、暗い影が横切った。

「どうかしたツスカ？」

目を細め剣呑な顔をする魁に、斎がきょとんと目を丸くする。どうやら、斎は何も気付いていないようだが、おそらく見間違えではない。影の星 以外の何物かが、夜の闇に潜んでいる。

感覚を研ぎ澄ます。

直後、斎を大きな影が覆った。否、影ではない。夜の微かな光に浮かび上がるのは屈強な体つきをした大柄な男だった。その手には、大振りの剣。

（この男っ、雇われの護衛か……！）

神殿内でも有数の實力を持つ貴族であるのだから、護衛の一人や二人いるのは当たり前のはずだ。襲撃の時点で何の反応もなかったからか、そのことが綺麗に頭から抜け落ちていた。

「斎、伏せろ！」

そう叫ぶと同時に、ナイフを抜いて一歩踏み出す。反射的に斎が体を屈めその場から飛びのこうとするが、遅い。斎は盗賊団の中でも一、二を争う俊足の持ち主だが、相手との距離が近すぎる。

間に合うか そんな言葉が脳裏をよぎる。だが、

「はあっ！」

魁のナイフが男に届くよりも早く、裂帛の気合と共に小柄な人影が飛び込んできた。

舞のように、滑らかで軽やかな動き。背後からの攻撃は予想外だったのか、見事な回し蹴りが男の頭に直撃する。

大男が慌てて反撃しようと試みる。だが、自分を蹴ったその人物を見て、大男は一瞬だけ動きを止めた。

その一瞬の隙を、魁は見逃さない。相手の懐に入り込むと、筋肉質な腕を掴み男の足を一蹴。巨躯がバランスを崩した反動を利用し、勢いよく地に叩きつけた。

その隣で、長い星屑の髪を夜風に靡かせて、星華が華麗な着地を決める。

「油断大敵ってやつ……あだっ！」

すぐさま駆けつけた炯に傭兵の処理を任せ、魁は誇らしげにブイサインを向けてきた星華の額に、でこピンを一つ喰らわせた。

魁は軽くやっただつもりだったのだが結構な痛みなのか、星華が両手で額を押さえる。

「な、何するのよ！」

「俺は、出てくるなと言った筈だが」

「べ、別にいいじゃない。そのおかげで無事に済んだんだから。ね？」

「そそそ、そうツスよ！ 星華さんは命の恩人ツス！」

「斎」

笑顔で同意を求められ、慌てたように何度も頷く斎を魁は鋭い一言で制した。その鋭い瞳に斎が小さな呻き声を上げてうるたえるが、彼は直ぐに星華に向き直り、機敏な動作で頭を下げた。折った腰の角度は、およそ直角。

「ありがとうございましたツス。それと、すみませんツス……」

「いえいえ。斎君が無事でなによ……」

「いえいえ、じゃない」

得意げに微笑んで見せた星華を、魁の視線が射抜く。

「星詠みの巫女様に何かあってもらったら困るって言っているんだ。あの傭兵がお前の顔を知っていたから手を出さなかったが、もしそうじゃなかったらタダじゃ済まない」

「じゃあ、隠れててそこでまたわっるーい男達に連れて行かれそうになってもいいんだー」

頭痛に頭を押さえる魁を見て、面白そうに星華がクスクスと笑う。

無人のアジトに彼女を置いておくのも危険だと思い連れて来てはいるが、仕事に関わらせるわけにもいかない。相手は何よりも巫女様だし、事によっては今日のように乱闘沙汰になることも少なくない。

（今のお前だったら、野郎共の方が尻尾を巻いて逃げてくつての）
思わずそんな台詞が口を付いて出そうになるが、魁はその台詞を心の中だけに留めて置いた。

我侬を言い出した星華に何を言っても無駄だという事は、ここ数日間で既に学んでいる。

もつとも、星華自身も身の危険というものを自覚しているらしく、以前無頼漢どもに襲われかけたときのように独りで出歩くといったことはなくなつた。

「とにかく、人馬宮の奴らが出てくる前にとつと引き上げるぞ」「了解」

と、

「ふ、ふふふ……」

口々にする仲間達の返事に混じつて、突然聞こえた不気味な忍び笑い。

何事かと聞こえてきた方に目を向けると、その視線を待っていたかのように貴族が口を開く。

「巫女を手中に収め、勝つたつもりか？」

「……何？」

唐突な貴族の嘲笑に、眉根を寄せて魁が不快感を表す。

「師弟とは似るものだな。師匠のみならず、弟子までも神殿に無駄な刃を向けるとは。二度と日の目を拝めなくなるのも時間の問題よの」

そう言い終わるとほぼ同時、貴族の頬を何かが掠めていった。直後そこから流れ落ちる一筋の赤い液体と、その背後の地面には、突き刺さる細い一本のナイフ。

目にも見えない、一瞬の投擲。ナイフは魁の手から放たれた物だ

った。

「……それ以上言ってみる。二度と日の目が拝めなくなるのはどっちだか分かせてやる」

「魁！」

「お前、止める！」

普段とは違う、魁の不穏な気配を察知した燐と炯が、彼と貴族双方を止めようと動く。だが、遅かった。

貴族の口元が、これ以上ないという位に裂けたような笑みを形作る。

「揃いも揃って馬鹿なことよ！ 在りもしない星など、見つけられるはずもな……」

「ない、とその言葉が貴族の口から最後まで発せられることはなかった。」

ゴツと、骨に何か当たる嫌な音が聞こえる。

魁がその貴族の横つ面を蹴り飛ばしたのだと、周りが理解する頃には、貴族の丸々とした体が既に数メートルも飛んでいた。

「っ魁！？」

星華と盗賊団の仲間が上擦った声を上げる。

しかし、魁は彼女達の呼び声に反応することなく貴族に歩み寄っていく。まるで声が聞こえていない。

咄嗟に星華が駆け寄って彼の腕を掴み、止めようとする。

「か、魁！ 止めなって」

「放せ」

凍てついた声。そう評するのが正しい声に、星華が肩を震わせた。殺気 溢れんばかりの殺気が抑えられずにその声を通して撒き散らされている。

けれど、腕を掴んでくる華奢な手は力を緩めなかった。

「ちよつと魁！ 何もそんなことしなくてもいいじゃない！」

「っ！ 触るな！」

明確な拒絶の一言。それと同時に、星華の手が力の限り振り払わ

れた。

反動で星華が数歩後退る。

つい数秒前までは貴族に向いていたはずの怒りの矛先が、今は何故だか星華に向いていた。

「か、い……？」

「そんなこと、だと？」

事態が呑み込めずに揺れる瞳で、見上げてくる星華に魁は冷たい一瞥を投げ掛ける。

「お前にとってはそのんなことだろうな。だが、こいつは言ってはならないことを言った」

「魁が……神殿を嫌ってるのは分かる、けど、何もそんなこと……その人は何も手を出してない。計画通り馬車を襲えたんだから……それで十分じゃないの」

たどたどしくも言葉を紡ぐ星華に、魁は「ハッ」と呼気だけの嘲笑をする。

「お前に何が分かる。星詠みの巫女様だもんな。詠人なら誰もが憧れる地位だ。日の下を歩いてきたお前に、何が分かるっていうんだ」侮蔑とも取れる言い様に、星華が目を見開く。彼女の口から出てくる言葉は何もない。

「何も、知らないくせに」

「魁、止める！」

鋭い炯の一言とともに、魁の左腕がぐいつと強引に引かれた。

強制的に星華と向かうことを止めさせられる。

「……止めな。これ以上余計な罪状を突き付けられたら、それこそ目的どころじゃない」

違つか、と念を押された燐の正論に、魁は押し黙る。それに、と燐は続けた。

「星華は無関係だ。そう判断したのはあんたじゃないのか？」

その言葉にハツとなり、魁は星華を見た。

星華は無言のまま、俯いている。細い双肩が小刻みに震えている

のは、気のせいなんかではない。

「せい、か……？」

名を呼んだ声は、何故だか少しだけ震えているようだった。ややあつて、星華がようやく唇を動かす。出てきた声は、魁とは比べ物にならないくらいに大きく揺れていた。

「……あたしは、魁が何で神殿を嫌っているのかは、知らない。でも星枢軸の奴らを嫌ってるっていうその気持ちは、少なくとも分かっていると思つてた。あたしは……」

そこで一度、星華の言葉が途切れた。その場にいる誰一人として何も言わず、ただ星華の言葉の続きを待っている。

「なりたくて星詠みの巫女なんかになつたわけじゃない」

空気が凍りついたかのように、場が静まり返った。

「普通に育つて、普通に生きて……なのに突然巫女なんか選ばれて。そりゃ、踊るのは好きだよ。けど、自由に踊れるわけでもなければ、神殿の外にもめつたに出してもらえない」

星華が、ギュッと拳を握り締める。強い力にもともと白い彼女の手が、より一層白さを増した。

「うらやましいよ、自由を謳歌できる、あんた達が」

その言葉を発した星華の声は、まるで泣いているかのように震えていた。

「だから、この盗賊団においてもらえらるって知ったとき……それが一時的なものでも、あたしは嬉しかった」

それを最後に、星華の口からは何も発せられなかった。燐が、優しく星華の両肩に手を添える。

周囲を、沈黙が包み込んだ。誰も、何も言わなかった。否、言えない。星華にも魁にも掛ける言葉が見つからないのだ。砂漠の乾いた風が吹き抜けていく音だけが聞こえる。

優に十数秒は経った後、これ以上の沈黙に耐えられなくなり、魁はようやく口を開いた。

「燐、皆を連れて先に帰れ」

唐突に命令を下した魁に、燐が一瞬だけ怪訝そうな顔をするが、その命令に何が含まれているのか直ぐに悟ったのだろう。真っ直ぐに魁を見て、小さく頷く。

「魁兄……何かあったんスか？」

「少し……野暮用」

魁から何か感じ取ったのか不安げに見上げてくる斎に、いつも通りの声色を作って応える。いや、多分いつもより幾分か沈んで聞こえたかもしれない。

「炯」

いつもは自分の後ろを追って歩く少年を炯に預ける。炯も、姉である燐と同じく一度だけ小さく頷いた。切れ長の瞳孔を宿した炯の双眸は、いつだって力強さを感じさせる。

「分かつてる。無茶すんなよ」

その言葉を背中で受け止め、魁は一人夜の街へと姿を消した。

* * *

「……馬鹿野郎」

貴族の馬車を襲った通りから一つ違った通りで、魁は自嘲気味な笑みを浮かべた。

半ば倒れこむように、近くにある店の壁に体を預ける。同時に軽く、頭をぶつける。走った鈍い痛みは気にもならなかった。ただ、壁の冷たさだけを感じた。石の壁の冷たさが頭を冷やしていくようだった。

しっかりしろ、自分は誰だ？

自身への問いかけに対する答えは、考えるまでもなく出てきた。

仲間の命を預かる盗賊団 影の星 の首領。そして、碌牙・ミルザム^{せい}の弟子だろ。

そのことを改めて噛み締め、魁は深い溜息を吐き出した。それは最近良く零していた、星華に呆れてのものとは全く異なっていた。

（何も分かってないのは、俺だよ）

簡単に気付けるはずの神殿貴族の挑発にあっさりと乗って手を出し、拳句自分を止めようとしてくれた星華に八つ当たり　最低なことこの上ない。

あのまま炯と燐が止めてくれなかったら、貴族の事も星華の事も大変なことになっていただろう。

星詠みの巫女誘拐に留まらず、貴族の命でも奪うようなことがあったら、それこそ神殿は黙っていないだろう。星枢軸はなんとしてでもこの首を取ろうと刺客を差し向けてくるだろう。

星枢軸の狙いは、そこだ。自分達の手は一切汚さずに、俺を捕まえること。

今、星華を攫っておいて目立った手を何も打ってはいないが、燐の言ったとおりこれ以上重罪を犯せば魁を葬るのに十分な動機が成立する。

そして、星華。

何も知らない。その一言じゃ済まされないことを、魁は星華に言った。星華がどんな思いで星詠みの巫女になり、どんな思いで神殿を抜け出してきたか魁は知らず、勝手な推測だけで怒りを叩きつけた。

星華だって 影の星 のメンバーのように暖かい太陽の下を歩いてばかりいたわけじゃなかった。むしろ、暗い夜道を歩いていたのかもしれない。

彼女の不運な境遇に同情しているわけではない。

（俺と同じ、か……）

だからこそ、退きたくなくなった。

口元から笑みが消え失せる。

「出て来い」

その言葉を発すると同時に、街のところどころの物陰からわらわらと人間が姿を現してくる。その数は、ざっと見ても十は超えている。彼らはやがて、ぐるりと魁を取り囲んだ。

魁は動かない。逃げてても意味がなければ、逃げる理由もない。射すような魁の視線に臆することもなく、一人の男が前に歩み出る。腰に提げられているのは、柄に獅子の装飾のあしらわれた剣。暗がりに映ったその姿を見て、魁は知らず笑みを浮かべていた。嘲笑という名の、笑みを。

「まさか、獅子宮^{レオ}の首星様直々のお出ましとは、ね。星枢軸も大分切迫してると見えるな、レオ」

魁の嘲笑に対し、レオと呼ばれた男はにこりと微笑んで見せた。あからさまな、余裕の笑み。いけ好かない笑みだ。

「我らが星詠みの巫女様の一大事。巫女を守る我々が動かなくてどうしましょう」

フォニ力神殿の正規兵を務め、主に星詠みの巫女を危険から守る役を授かった者達。それが第五宮獅子宮の人間だ。

十二宮の家柄の者はそれぞれの星座の星を宿星に持ち、その内星座の首星を宿星に持った者が宮の人間を取り纏める長となることが決められている。

そして長はその宮の役割を継ぐ者として、宮の名を名乗ることが許されていた。

今魁の目の前に佇んでいるのは、獅子宮を継ぐ者・レオ。

「先程の一件、見させていただきました」

「ふん、今までもこそそと付け回していただろうが」

丁寧だがどこなく嫌味さを漂わせた口調に、魁が鼻を鳴らす。

だが、レオは蚊ほどの反応も見せなかった。星枢軸の威光を守るためなら、獅子の風格にそぐわない事にも平気で手を染めるか。

「見たところ、巫女様には随分と手をやいている様子。今巫女様を返せば今回の件は放免にすると、長老会も言っています」

長老会。それが星枢軸の実権を握る者たちの集まりだ。実力を持った偉い詠人だとかいうが、真偽のほどは怪しい。事実そうなのだとしても、分かっていることは一つ。腐敗した権力の海におぼれる老いばれ達でしかないという事だ。

「貴方も自分の命は惜しいはず。素直に応じて下さい」

完璧なる、だが陳腐な脅し文句に魁は呆れて思わず溜息をつきそうになる。

夜空を見上げて、深呼吸一つ。

「断る」

夜の冷気を切り裂いて響いた返答に、レオが不可解だというように眉をしかめた。

星達から目を放さず、レオの理由を問うような視線に魁は続けた。
「あんなクソ爺共の言葉なんて、今更信用できるわけがない。それに」

唐突に、魁が言葉半ばに口を閉ざす。

砂漠の夜空には塊となつて漂う雲はいくつも浮いているが、それでも星は良く見えている。ぼんやりと輝く星の多い今日の空の中には獅子座の姿もある。

残念なことに、澄み渡っているはずの空でも一獅子の輝きは霞んでいる《……………》ようだが。

視線をレオに戻す。その表情は不敵な笑みと、そう例えるのが最も適切だろう。

「あいつを手放す気が、なくなつたんでな」

ざわり、と獅子宮の奴らがざわめき立つ。その反応が、どこか楽しく感じられた。

多分、数十分前までの魁だったらこの取引に応じていただろう。長老会の言葉が信用できなくとも、厄介者の星華を追い払える。それだけでも十分な意味を成していたのだ。

もともと魁は星華の気の済むまで街を堪能させ、街に飽きたか治安の悪さに弱音を上げたところで神殿の奴らに引き渡せばよかった。盗賊団にいつまでも置いておくつもりはなかった。守られてきた巫女に盗賊など、務まるわけがない。

そう、置いておくつもりなどなかった。だが、気が変わった。

「俺と同じあいつの夢を、絶つわけにはいかないんでな」

同じ神殿に道を絶たれた者として、今の魁に星華を放っておくという選択肢は存在しなかった。

慎重に獅子宮の兵が魁との距離を縮める。

フツ、とレオがそれまで浮かべていた上流の笑みを崩す。代わりに浮かび上がってきたのは、スラムにうろつく奴らとそう変わらない歪んだ笑みだった。

「ならば力ずくで連れて帰るだけだ！」

距離を詰めながら、レオが腰の上質な剣を抜き放つ。レオに続いて、獅子宮の神殿兵がそれぞれ剣や槍などの武器を手に一斉に魁に接近する。

相手の隙は十分。重い武器を扱う相手より、軽器を手にした自分のほうが早い。問題があるとしたら数の多さだけだ。

（上等だ……！）

大振りのナイフと投擲用のそれを両手に構え、魁は笑みを浮かべた。

「魁兄！？ どうしたんスかその怪我！」

巨蟹宮の一角にかまえた 影の星 のアジトに戻ってくるなり、素っ頓狂な声を上げた斎が真っ先に魁を出迎えた。斎が驚くのも無理はない。今の魁の姿は、剥き出しにされていた肌にくつつもの切り傷がつき、頬からも血が滲み出ている。更にジャケットはあちこちに切り裂かれて破け、おそらくは返り血だろうがどす黒く染まっている。

「……なんでもない。ちょっと恨み買ってた奴に出くわしたただけだ」
深く追求されるのを避けようと、それだけ言って魁は自室に引き上げようとする。だが、

「馬鹿野郎」

その頭を、斎の声を聞いて奥から出てきた炯が思いつき叩いた。静かな声に似合わず、それが怪我人に対する仕打ちかと思うくらいに、それは思いつき。

ギロリと、背の高い炯を睨みつけていると、

「彩、救急箱取ってきな！」

「は、はいっ！」

燐の鋭い一喝に、後ろの方でおろおろしていた彩が慌てて奥の部屋に消えていく。その様子を目で追っていると、このアジトの中のものでも上質なソファに座って両膝を抱えている星華が瞳に映った。思わず、動きが止まる。数刻前の自分の行動が、脳裏に次々と現れては消える。だが、それは唐突に中断された。

「何突っ立てるの」

と、燐は血と砂で汚れているのを全く気にすることなく、魁の腕を掴んで彼を無理矢理近くの椅子に座らせた。その勢いに安物の椅子がぎし、と軋む。

燐は魁よりも五つ年上である。盗賊団の中でも最年長者であり、元来持ち合わせたリーダーシップからか、こうして首領の魁ですら彼女に逆らえないときがある。それは時に魁と意見の対立を招くこともあるが、彼にとっても頼れる存在だった。

普通の女なら血に怯えそうなもののに、こうして少しも臆せずに触ってくる。可愛げがないともいえるが、魁としては助かる。ただし、少々乱暴なところはいただけない。

「ほらとつと脱ぎな」

『お前それセクハラ』

「馬鹿言ってんじゃないよ」

見事に声が重なった青年二人に半眼を向け、魁のジャケットを引き剥がすように奪う燐。これを見ているとセクハラといわれても仕方がないような気もしてくる。ジャケットを脱がされた勢いそのままに、下に来ていたＴシャツまで奪われる。

線は細いが程よく筋肉の付いた上半身にもいくつかの切り傷と、それ以上の打撲痕があった。

戻ってきた彩と燐は手際よく消毒したり、包帯を巻いていったりする。

「よくも私たちの首領を……！ あの、忌々しいレ……」

「燐」

レオ、とその名を上げそうになった彼女の言葉を、魁は遮った。見返してくる燐に、首を横に振って応える。

何も言うな。その魁の意思を瞬時に読み取って、燐は作業に戻る。

「怪我は、俺の責任だ」

あの人数を一人で、それも無傷でどうにかできるとは最初から思っていた。だが、獅子宮の奴らを一人で相手すると決めたのは魁自身だ。

付けて来ているレオの存在に炯も燐も気配で気付いていた。斎と彩、それから星華。三人を無事に帰らせるには、あの姉弟が必要だった。

斎はまだまだ一人前には程遠いし、彩はまだこの稼業をはじめて半年も経っていない新米だ。可能性としては低いが、獅子宮の奴らが二人を狙ったとしたら燐一人でも炯一人でも守りながらでは対処しきれない。その点、二人が揃っていれば安心だ。

「無茶するなってオレは言わなかったか？」

「……無茶しなきゃならないときも在るんだよ」

炯の追求に不承不承言い返し、ちらりと、部屋の端にいる星華の姿を覗き見る。

なによりも、あんなことがあった直後に星華をいざこざに巻き込みたくなかった。

自分で酷いことを言っておいて、都合がいいとは思っている。

これは、魁の問題だ。星華の一件があるうとなかろうと、魁と神殿の対立は今に始まったことじゃない。

「はい、終わり。今度一人でこんなことになって来るんだったら、それこそミイラ男にして動けないようにするからね」

「……お気遣いどうもありがとうございます」

気抜けする声で冗談交じりのお礼を言い、魁は立ち上がる。

星華はまだ両膝に顔を埋めていた。寝ているかも知れないと思う

ほど静かで、だがかすかな身じろぎに起きていることが分かる。

「星華」

名を呼ぶと、びくつと肩を跳ね上がらせて星華が顔を上げた。驚きと恐怖の入り混じった瞳。魁が一步近づけば、それは直ぐに硬く閉ざされた。

その様子に、魁は息を吐いた。

俺はそこまで乱暴者か。先程の仕打ちを考えれば、うなずけてしまう。

仲間の視線が痛いほど魁に突き刺さる。

ゆつくりと、彼女に手を伸ばす。

そして、ただ一度だけ、柔らかく頭に手を置いた。

星華が驚いたように魁を見上げる。けれど、そのときには既に魁の手は星華を離れ、彼は奥の部屋へと向かおうとしていた。

彼女に掛けられる言葉を、今の魁は持ち合わせていなかった。

* * *

「魁……起きてる？」

まだ空は暗いが夜が浅くなってきた頃、星華はアジトの一番奥にある魁の部屋を訪ねた。

いつも高く括っているブロンドは、今は解かれ地に向かって真っ直ぐに落ちている。星詠みの巫女になった頃から伸ばしていた髪は、今では床に着きそうなほど長くなっていた。

星華の声に、反応はない。しかし中からはかすかな物音が聞こえている。

「魁……？」

恐る恐る扉に手を掛けると、予想に反して鍵はかかっていなかった。

今まで、部屋には絶対に来るなと魁に言われていた。その言葉が気になって何度か、こっそりと部屋に入ろうとしたこともある。だ

が、部屋の扉にはしっかりと鍵が掛けられていて入ることは叶わなかったのだ。

その鍵が今は開いている。

星華はゆっくりと音を立てないように、扉を開けていく。

「わ、あ……」

驚きからか、思わず感嘆の声が零れた。

広めに作られた、円形の部屋。その壁一面に設置された本棚には、所狭しと本が詰められ、床にも乱雑に本が積み重なっている。盗賊の首領の部屋というよりは、学者の部屋といったほうが似合う。そんな部屋だった。

「すごい数……」

クシャリ、と一歩踏み出した星華は足元に散らばっていた紙を踏んでしまい、慌てて飛びのく。だが、飛びのいた先にも紙があり結局踏んだまま足を進める。

紙が散らばっているのは、床だけではない。机は整頓されていない紙が一面を多いつくし、その上に羽ペンや蓋の開いたインクのビンがある。あまつさえは、寝るためのベッドまで書物や紙に占領されかけている。

汚れた、乱雑な部屋。だけど、その光景に不思議と不快感は覚えなかった。それどころか、日の当たる書庫のような、そんな雰囲気さえ感じる。

しかし部屋のどこを見回しても、肝心の魁の姿が見えない。

「……上がって来い」

突然、聞こえたハスキーな声に、心臓が大きく跳ね上がる。

声のしたほうを勢いよく振り返る。よく見れば部屋の奥、本棚の裏側に沿うように階段があり、魁がそこから顔だけ覗かせて星華を見ていた。

一瞬だけ、交錯する視線。

だが不意に目を逸らすと、魁は階段を上がっていつてしまった。慌てて後を追う。階段は螺旋状になっていて、上へと伸びていた。

そこでこの建物が塔になっていることに気付く。確か、巨蟹宮には古くなって今は動いていない時計塔がある。アジトの入り口は奥まったところにあるだけで一般的な建物と同じだったのだが、時計塔の一階　魁の部屋に続いていたようだ。

古くなって若干不安定になった足場に気をつけつつ駆け上がった先は、魁の部屋と同じ広さ　だが天井が丸みを帯びた、小さなホールになっていた。

中央には、白色の巨大な装置。その一部である一本の筒が窓に向けて伸びている。

「これ……天体望遠鏡？」

「俺のだよ」

開けた東の天窓から、魁が顔を見せる。背景には星空　時計塔の屋根に、魁はいた。

「こつちだ」

指で手招きする魁に、星華は急いで屋根に上がった。

しばらくは、沈黙ばかりが続いた。屋根に並んで座った二人は互いに何もいう事なく、澄み切った空の星の輝きに目を凝らしていた。

「……すまなかった」

やがて呟かれた魁の唐突な謝罪に、星華が驚いたように魁を見た。金糸のような長い髪が、夜風に攫われて宙に舞う。地上では心地よい風も、この高さでは少々強いようだ。

魁は、見つめてくる星華の視線から目を逸らさなかった。

「何も知らないのは、俺のほうだった」

「いいよ、もう……魁がなんで神殿を嫌ってるか、あたし知らなかったし。あたしだって、ごめんだよ」

星華が何故謝っているかわからずに、今度は魁が星華を見る番だった。

眼下のスラム街を見下ろす星華。夜明け時も近くなった今は、遅くまでついている店の明かりも皆無と違っていいほど消えていた。

目を凝らせば、酔い潰れた奴らがふらふらと歩いている。

「レオ、でしょ？」

簡潔な、一言。だが思いもよらなかった名前に、魁は目を見開いた。

街を見下ろしたまま端正な横顔を向けている星華に、気付いていたのか、と視線だけで問う。

「ここ数日ずつとストーカーしてくるんだもん、気付かないわけないって。……ごめん……あたし、魁達を巻き込んだ」

そう言っ、部屋にいたときと同じように立てた両足に顔を埋める。

何か言おうとして、しかし咄嗟に何も言葉が出てこなくて、手持ち無沙汰になった右手で頭をかく。

「あのなあ……前に話したと思うけど、俺等は前から星枢軸と敵対してて……」

「知ってる。でも、ごめん」

はあ、と魁は深々と溜息を吐くしかなかった。星華に会ってから、溜息しか出てきていないような気がするのには気のせいではないだろう。

今更になつて気付くが、この少女は予想していたよりも責任を感じ易いらしい。こういうことになりたくないから、事を言いかけていた燐を止めたというのに。

これでは自分が悪人のような気がして 実際に悪いことはしたのだが 魁は星華の腕を引くと、無理に面を上げさせた。

「これだけは言わせて貰うが、あれはお前の責任じゃない。俺が勝手に怪我したんだ」

困惑する星華の鼻先に、立てた人差し指をびしりと突きつける。

「お前のことがなくても、その内俺は獅子宮……星枢軸と真っ向から勝負する羽目になってたと思うし」

言葉の最後は、自分でも情けないほど弱々しかった。

不明瞭な意味の言葉を呟く魁に、星華が首を傾げる。だが、分か

らないなら分からないままでいい。

それから、再び沈黙が流れる。空からは、徐々に星が消えていつていた。夜の終わりが近づいている。

「……星華は、なんで踊りが好きなんだ？」

「あー……さっきの話？」

自分の本音を晒したことが今更になって恥ずかしくなったのか、白い頬に朱が差す。

先程の星華の事を聞いてから、ずっと気になっていたことだった。神殿に閉じ込められるから星詠みの巫女が嫌いということは理解できる。だが踊ることが好きなら、神殿にいた方が多くの人の前で踊れるのだから、それこそ踊り手にとっては目指す所であるはずだ。

ややあつて、星華は口を開いた。

「ちっちゃい頃にサルーンに連れてってもらって……そこで、たまにただけ踊り子さんの踊りを見たの」

昔を話すのが気恥ずかしそうに、星華が苦笑する。

「そのサルーンは今にもつぶれそうにボロボロで汚くて、舞台だって小さかった。お客さんだってそんなになくて、すごく寂れてた」

見つめる先の空でまた一つ、空気に溶けるように星が消えていく。

「でもね、その人は綺麗だった」

脳裏にその光景が浮かんだのか、星華の顔がふわりと綻んだ。

「顔がいいとかじゃなくて、踊ってるその姿が星みたいに見えたの。何よりも楽しそうだった。あの人がステップを踏むたびに、店中が湧くの。お客さんから向けられる笑顔で、踊り子さんも笑顔で溢れて、その笑顔でまたお客さんが楽しそうに笑うの」

幸せそうな顔で 事実、その頃は幸せだったのだろう 星華が星を見上げる。

「旅の一座かなんかの人だったみたいで、それ以来あたしは見てないんだけどね……いつかあたしもあんなふうに踊ってみたい。観客と一緒に楽しくめるような場所で、疎踊りたい。そんなことずっと思ってる」

恋する乙女、とはよく言うがまさにそんな感じの表情だった。どこか夢を見ているような、ぼんやりとした笑み。だが、その笑みを魁は綺麗だと思った。だからだろうか。

「俺はな、探し物があるんだ」

気が付けば、そんな台詞が口をついていた。

「そのせいで、星枢軸に首を狙われている」

「あの……貴族が言ってたこと？」

「ああ、在りもしない星とかいうやつか」

魁を気に掛けて、その言葉を言わないようにしていたのだろう。だが今は不思議と、その言葉を口にすることに何の抵抗も憤りもなかった。波風のない水面のように、心が落ち着いている。

「在るさ……あの星は、ちゃんと」

真っ直ぐに見据える東の空が、薄っすらと白み始めた。

「盗賊になつてから、ずっと探してるんだ」

ずっと、物音一つ立てずに魁が立ち上がる。合わせるように、星華も立ち上がった。彼女の背から真っ直ぐに流れ落ちる髪は、金色の天の川ミルキウェイのようだった。

「一度でいいから、この目で見てみたいと、思ってる」

限られたほんの一時、どんな星よりも強く輝くその光を、見たい。だから

明るくなり始めた空に、星が見えた。

ほんのり赤く染まつた東の空にあるほかの星はもう見えなくなっているというのに、その星だけが空に残って輝いていた。否、残ったのではない。現れたのだ。

砂漠地帯の終わりを告げる、東のシェダルクバ山脈。その山並みの中で最も標高の高い、ツイーと呼ばれる山。ナヴィガトリアから見ると丁度塔のように細く見えるその山の頂付近の左側に、ポツリと小さな、だが夜明けの光にも負けずに光る星が一つだけ浮かんでいた。

夜明けの眩しさではなく、魁が目細める。

忌々しげに。

「夜明けの晨星^{しんせい} あ之星は俺が必ず見つけ出す」

その一言に、分かつてはいたが驚いて星華が魁に食いつく。

「ちよつと待つてよ！ 晨星を見つけるって、だって晨星は、ちゃんとあそこに……」

「晨星ではない別の星だ」

慌てふためく星華に、一刀両断の言葉を下す。

「嘘……」

「嘘じゃない。俺の他にもあ之星を探している人がいた」

迷いを感じさせない魁の言葉に信じられない、といったように星華は呟いた。

北極星が世界を支える軸であると言われる星ならば、晨星は世界にとつての夜明けを導く星とされている。晨星がその姿を隠せば、人々の間に災厄が降り注ぎ、経済は悪化の一途を辿るようになる。とされている。世界の太陽^光を導く事が出来ずに、長い夜に閉ざされるといわれ、北極星と並んで信仰される、大切な星のひとつだ。星華が驚くのも無理はない。

「じゃあ、星枢軸は星を偽って……民に嘘をついてるってこと……？」

「そういつ、ことだな」

「そんなつ、そんな、大変なこと……！」

「だから、隠し通してるんだろ」

もし晨星の存在が偽りだと世間に知られれば、神殿の権威は瞬時に崩れ、星詠みに関する信仰も大きく揺らぐだろう。神殿の権力に縋っている長老共が、そんなこと許すわけがなかった。

「別の星が存在するはずだ。太陽を導く、本当の夜明けの星が空のどこかに存在している」

偽りの晨星が姿を消していく。一時しか見られないのは、本物の晨星と同じ。だからこそ、あ之星が偽りであると人々に気付かれな
いのもしれない。

「俺が星枢軸と敵対してる理由、分かつたろ？」

どこか自嘲めいた笑みで、魁は口角を吊り上げた。

新たな星の認可には、星に関する一切を管理している星枢軸に申請をし、査定を受ける必要がある。自力で新たな星を見つけたとしても、神殿の査定に合格しなければその星の存在が正式に認められることはない。当然、そんな申し出を認めるはずがないのだ。

魁としては先にとつと晨星を見つけ、その存在を星枢軸の権力が及ばぬ王都レクスフォル内で、証明させればいいと思っている。晨星が偽りだという確たる証拠があれば、王も黙ってはいない。いかに長老会であろうと、王の力には敵うまい。

だが、星枢軸はそれすらも阻止しようと盗賊として生きる魁を狙ってくる上に、最近星枢軸の勢力も広がりを見せている。もしかしたら、王都内も既に食われているかもしれない。

「……魁があの日、神殿に盗みに入つたのもその為だったの？」

「まあ、な」

曖昧な返事を返しつつ、魁は街の外を眼で示した。

「あの遺跡だ」

ナヴィガトリアの東部六宮の一つである巨蟹宮からは、蜃気楼地帯と呼ばれる東の砂漠がよく見える。その蜃気楼地帯の真ん中に、崩れかけている蜃気楼の遺跡が遠目に見える。

「星の旧跡と呼ばれるにしては、そこで何があつたか分からない。更に神殿の異様なほど厳重な警備、漏れてこない情報」

朝日を受けて蒼い光を放つ魁の瞳の中に、未だ手の届かない遺跡の光景が映りこむ。

「あの遺跡に、何かがある」

それだけは、妙な確信として魁の中にずっとあつた。

「だから、あの遺跡の情報でもいいから何かはないかと思って神殿に行つたんだ」

「神殿みたいなのに、また忍び込んだりはしないの？」

考えなくても答えが出るであろう率直な疑問にやはり魁は溜息を吐きそうになり、止めた。溜息を吐くと幸せが逃げていくというが、

「できるんだつたらとづくにやつてる。神殿の奴らの警備が厳しすぎて入れないし、入れたとしても中の構造が分からない。逃げ道も分からなければ、一網打尽にされる」

「だから、そうだって言ってるんだよ。畢に……あー、情報屋に調べてもらってるけど、全く分かんねえし……」

さらりと。あっさり過ぎるほどあっさりに言われたその言葉に、魁は咄嗟に反応を返すことができなかった。数秒後、

ようやく、そんな間抜けた返事を零す。ぽかん、と口をあけて滑稽なほど呆気にとられた顔に、星華が吹き出しそうになる。

あは、と憎たらしいほど眩しい笑顔。その瞬間、魁の中で何かが大きな音を立てて切れた。

一日の始まりを迎えた聖都ナヴィガトリアに、影の星 首領・魁の怒声がどこまでも響き渡った。

第三章 黄昏の地

月のない、澄み渡った星月夜だった。真っ黒なインクを広げたような闇空に、今にも落ちてきそうなほどたくさんの星の花が咲いている。

魁は枯れた椰子の木の根元に身を潜め、一心に星空を見上げていた。その背後には、炯と斎、それから星華の三人が控えている。

月のない夜は、好きだ。月明かりのないおかげで、星がいつも以上によく見える。星の輝きがいかに眩いものであると、月の強さには敵わない。孤高に輝くのではなく、仲間と寄り添いあつて輝きを増すのが星だ。

なおかつ、新月の夜は身を隠すのもうってつけ。遺跡に忍び込むのに、これほどいい日取りもない。

「現在地は、ここだな」

そう静めた声で言つて魁は、砂の上に広げた大雑把な地図の一箇所を指差した。

今魁達四人がいるのは蜃気楼の遺跡、その西側にある、干上がったゆ湧泉の畔だった。

星華の思わぬ発言で遺跡に忍び込めるチャンスを得た魁は、すぐさま畢からありったけの情報を集めた。そして三日後の今日、昼の内に蜃気楼地帯の近くを通るというキャラバンについて砂漠を渡り、夜を待った。

「で、どこから侵入するか決めたのか」

「ここだ 一番の近道で行く」

干上がった泉の東側一体を覆うようにある、枯れた椰子の群生。その直ぐ向こう側に並ぶ遺跡群の一番中央に位置する巨大な建物を地図で示す。

それを見て、炯は目を細めた。

「正面突破、か。きついな」

「仕方ないだろ。星華が遺跡の地下構造全部把握しているわけじゃないんだから」

畢や星華から聞いたところ、この遺跡が最も嚴重に管理しているのが中央にある、ナヴィガトリアにあるフォニカ神殿を連想させる神殿のようなものらしい。その地下に、舞を奉納する場所があり、また他にも星に関する壁画類が眠っている、とは星華の言。彼女自身はそれらを目にしたことはないが、星枢軸の最高位星学者や詠人たちが度々訪れているから間違いないという事だ。

狙うとしたらこしかない。

星華曰く、この遺跡は迷路のように張り巡らされた通路で繋がっているとのこと。つまり複数ある、地下に繋がる建物どこから入っても目的地には辿り着けはするのだ。

が、星華が肝心の地下の構造を全て記憶しているわけではなかった。

彼女が以前ここに来たときは順当に正面から入った上に、話から察するに、地下の構造は十分複雑らしく、とてもではないが一度や二度来ただけで覚えきれるものではない事が分かる。

侵入したという事はどのルートから行っても直ぐにばれる。迷路のような地下でもしも迷い、相手に追い詰められることを考えたら正面突破で侵入して、とっとと引き上げてきたほうが安全だ。

遺跡の造りを教えてくれるだけでもありがたいのはありがたいのだが、その中途半端さには呆れるしかなかった。

「ホント……なんでああいう大切なことを黙つとくかな」

はあ、と無意識の内に嘆息してしまう。

大切なことというのは、星華が蜃気楼の遺跡に入ったことがあるという事だ。星華が盗賊団に身をおいてから既に二十日近く経とうとしている。もっと早くにそのことを知っていれば、と思うとその期間が無駄に思えて仕方なかった。

魁の言うところに直ぐに思い当たった星華が、彼のその言い草にむっとする。

「だってあたしそんなの知らないもん。魁が星を探してるとか、蜃気楼の遺跡に目つけてるとか。何も教えてくれなかった魁がいけないんだからね」

そう言われては、魁は何も言い返せなかった。

この半月、魁は星華に自身の事など全くと言っていないほど何一つ伝えていなかった。一時的に盗賊団においておくだけなら、教える必要もない。そう思っていた。

それどころか、星華のことを全部において信用しようとしてもいなかった。長老会のように人柄が悪いわけではないことは分かっていたのだが、それでも心のどこかで星詠みの巫女　星枢軸の人間だという事が引かかっていた。

そのことに、今更ながら罪悪感を覚える。

「とりあえず、話を戻すぞ。炯、兵たちはどうだ？」

魁の問いかけに、炯は木立の向こうに目を向けた。炯は　影の星の誰よりも夜目も遠目も効くのだ。

「配置は畢の情報どおり。回り込むんだったら、比較的兵が少ない北側からがいいと思うが……」

そこで炯は、にわかに言葉を少し濁した。何か気になる事があるのか自分の判断を確かめるように、遺跡群の闇に目を凝らす。

「そろそろ見張りの交代だからか、兵がちよっと落ち着かないな。

あとは混じってる獅子宮の奴ら。前までの獅子宮に比べて、纏まりがないように感じる」

炯の言葉を確かめるように、魁も闇に目を向ける。それから、ふと思い当たったように天を仰いだ。

「最近獅子宮で何があったか知らないが、どうも輝きがよくないかな。それに、若干形が歪んでいるように見える」

星空の獅子を見上げそう呟く。星はレオと会った夜と変わらず、どこかぼんやりとしていた。加え、直感で感じる程度ではあるが、星の位置も少しだけずれているように見える。蜃気楼は昼にしか発生しない　星のずれはここが大規模な蜃気楼が発生する砂漠の真

ん中であるからというわけではないだろう。

星を瞬時に詠み説く魁に、何故だか星華が目を丸くした。

「魁、すごいねー。星詠みできるんだ」

と、星華は感嘆の声を漏らす。

そつえば星詠みするところを見せるのも初めてならば、星詠みができることも伝えてなかったなと思い当たり　星華のその反応に違和感を覚える。

「……お前、できないのかよ？」

星を詠んで人々を導き、星を讃える星詠みの巫女なのに。どこかそんな言葉が含まれた視線を受けて、星華のそれが宙を彷徨う。行き場を無くした手は、胸の前で無意味に指を組んでいた。

「あ、えつと……まあアレだね！　人には得手不得手っていうものが……」

「んじゃ俺が今やってみたに何か詠んでみるよ」

「すみません。できません」

なんとか言い逃れようとした星華に、追い討ちを掛ける魁。逃げ道が塞がれ、星華は瞬時に、それは潔すぎるほど潔く白旗を揚げた。
「……別にできないわけじゃないけど、苦手なんだってば。魁みたいにパツと見て直ぐには分からないよ」

拗ねたように口を尖らせる星華。その瞳が僅かに影を帯びた。

「だってあたしは前の星詠みの巫女に勝手に選ばれただけで、別にそこまで星に興味あったわけじゃないもん。巫女だから必然覚えさせられるけど、そこまで詳しくもないし……ま、最初から覚える気なんてなかったけどね！」

それにいつか抜け出して巫女なんて辞めてやるつもりだったしね。と片目を瞑って見せた星華に、魁は頭痛のしてきそうな頭を抱えた。その迷惑千万な後先考えない行動だけは止めて欲しい。今となつては、あながち迷惑だけではないが。

「でも魁が星詠みできるなんて意外だなあ」

「……星を見つけるのに、星詠みができなくてどうするんだよ」

「や、ほら天文学者とかかとも思ったし」

星に関する職は三つに分類される。星詠みを扱う『詠人』、星を科学的かつ理論的に扱い星の発見・観測・研究を行う『天文学者』。そしてそれらの中間職、星を天文学的に見、それを星詠みと交えるのが『星学者』だ。

確かに、星を見つけると言われたらまず真つ先に思い当たるのは、星の観測を専門的に扱う天文学者だろう。

零れそうになった溜息を魁はなんとか呑み込んだ。

「一応、星学者だからな」

少しだけ吐息にも似た声が、口から漏れる。押さえ込んだのは、星華のせいではないからだ。

（今はもう、その資格もないけど）

星に携わる学者は、それぞれの分野に応じ星枢軸に登録しなければならぬ。星学者としての資格など、とうの昔に神殿に剥奪されていた。星に携わる者であるという登録証がなければ、星枢軸の査定も受けられるはずがない。

「魁、無駄話はそろそろ終わりだ。……兵が動く」

陰鬱になりそうな魁の思考を察してか、炯が遺跡のほうを見て呟く。鋭い声は、一瞬にして魁の思考を切り替えさせた。

「じゃ、俺と斎が囧になって入り口の兵を引きつける」

「その隙に、魁兄と星華さんが神殿に侵入するんスよね」

「お前達が上手く侵入できた後は隠れていいんだな」

最後に大まかな手順を確認する炯と斎に、魁は頷いた。

「ああ、そう時間は掛けない。夜明けまでになるべく厩気楼地帯を進みたいからな」

「了解」

奴らと戦うことはないと思うが、万が一に備え炯が軽器類をチエックする。それに習い斎も。そして意気揚々と二人は立ち上がった。

「んじゃ、斎。行くか」

「はいッス！」

クシヤリと斎の頭を撫でる炯。

歩き出したその背を、同じように立ち上がった魁が呼び止めた。

もう一度だけ星空を見上げ、確認する。

「風星のひとつが、変光を始めてる。風が変わって……突発的な砂嵐がくるかもしれない」

気をつける、と背に投げ掛けられた首領の言葉に、炯が振り向いて戻ってくる。

「それはこっちの台詞だ」

ニツと快活な笑みを浮かべ、炯は斎にしたのと同じように魁の跳ねた金髪を掻き撫でた。

「風星が司る物は『風』。それは現象として現れる風だけに限らない。……そうだろ？」

晨星は『夜明け』を導くと同時に『世界にとつての夜明け』を導く意味を持つ。それと同様に風星は『大気の動き』を知らせる他に『世界の風向き』を人々に教えるとされている。

「気を付けろよ」

その言葉に魁が力強く頷き返したのを見、炯と斎は走り出した。

* * *

建物の中は、予想以上の暗さだった。

月明かりがないことも影響しているのだろうが、それでも外のあちこちに設置されている灯りすらもあまり入ってこない。それ以上に、炯達が起こした騒ぎとは正反対の、水を打ったような静けさがこの暗さに拍車を掛けている。不気味なほどの静けさが魁達にそう感じさせた。

闇は心に恐怖を呼ぶ。その恐怖が、更に周囲の闇をより見せる。

建物の一階部分に辿り着いた魁は、フリントの取り付けられた簡易式の発火具で携帯用のランタンに灯りをつけた。そのままもう一つのランタンにも灯りをつけ、星華に手渡す。

明かりが漏れて場所が知られることがないように、物陰に身を隠しながら、周囲を見回す。

「外観に比べて、中は思ったほど崩れてないんだな……」

近くにあった柱に手を当てて魁は興味深げに呟いた。

夜ではなく石の黒に塗りつぶされた壁や柱は、千年以上経っているにもかかわらず形状を殆ど崩していなかった。

昼に見た、真っ黒な石造りの遺跡群はさすがに千年という歳月に見合い、荒廃が酷く進んでいた。建物の中にはあちこちが剥がれ落ち、崩れ、既に原型を留めていない物もあつたのだ。

星華が魁の手元を眺めながら、奥へと足を進める。

「あたしも初めて来たときは、ちよつと驚いたよ。多分、中がしっかり造られてるとか、あと周りが砂漠のせいもあるんだろうけど」

確かに、連日のように起こる砂漠の砂嵐は建造物に大きなダメージを与える。風に舞う砂の粒が石を削り、緑地のある場所よりも風化は早いかもしれない。

だが、

（これが本当に千年も経っている物なのか　？）

そう思わずにはいられなかった。

魁の専門職は星に関することであるが、考古学的知識が乏しいわけではない。むしろ、先人によって構築されてきた文化である、星にまつわる事象を調べる上でこういった考古学的調査は必要となることが多い。まだ星学者としての資格を持っていた魁も、数えるほどであるが遺跡を訪れたことがある。

その経験から言っても、内部のこの様子は崩れていなさ過ぎる。

「魁、こつちこつちー」

一足先に奥に向かった星華の招き声に、魁はハッと我に返る。念願がなつて来ることでできた遺跡のためか、つい没頭してしまったようだ。

注意深く周囲を見渡しながら星華の後を追う。

今夜、本当ならば星華を連れてくる必要はなかったのだが、魁は

星華に遺跡の案内役を頼んでいた。

魁も彼女から教えてもらった内部構造を一通り把握してはいるが、それは星華のあやふやな記憶に頼ったものだ。魁に伝えよりあやふやになってしまっている地図に頼るならば、実際に連れてきて案内させたほうが手っ取り早い。

故に、今回のメンバーは運動神経に優れている炯と斎を含めた四人。アジトを何日も無人に晒すわけもいかなないので、彩と燐を残してきてあった。

「ここから地下に行けるの」

星華が灯りで照らし出した先　そこが地下に続く階段だった。黒い岩の積み上げられた階段は所々形を失ってはいるがやはりこれも見た目よりしっかりしているようで、魁が乱雑に足を踏み入れても足場はぐらつく素振りすら見せない。

星華を背後に回し、魁は一步を踏み出す。

「それにしても、本当に遺跡の内部には兵がいらないんだな」

周囲を訝しげに見回しながら、魁は階段をゆっくりと降りていく。遺跡の外は異様なほど警備が厳重だが、中には人の気配すらもなかった。

「うん……あたしが入ったり、フォニカから星学者が来たりする時は何人が護衛の人が入るんだけど、それ以外の　普通の見張り兵とかは立ち入りが禁じられてるらしいの」

魁の背を星華が追いながら、最後の一段を降りる。その先にも階段は続いていたのだが、星華は分岐点を右に曲がった。その先に続く、全てを覆い隠すような濃い闇が支配する回廊。

（兵すらも立ち入らせたくない……か）

フォニカ神殿に隠されていた宝物庫と、何もかも同じだ。大切なものであるが故に幾重にも守らせ、しかしその大切なものには何人たりとも近づけない。

その時、あつ、と星華が何かを見つけ、魁を抜かして小走りに駆けていく。

「これじゃない？」

回廊を抜けたその先に、まるで小さな展示場のような空間が広がっていた。その壁一面、ぐると部屋を囲むように、彫刻用であると思われる白い石の壁に隙間なく何かが描かれていた。

炎に浮かび上がったのは、壁に刻まれた獅子や乙女の姿など、黄道十二星座を模した絵とそれにまつわる御伽噺の風景。剥がれたり色褪せたりしているが、着色してあった後もうかがえた。

十二星座は、星を奉るものとしては極一般的だ。

太陽の通り道にある十二星座は北極星と自らが取り囲む世界を守る。その意識は星詠み文化の中でも古くから人々の中に根付いている。

それは、第十一宮^{アクエリアス}宝瓶宮がナヴィガトリアの水を管理するように、ナヴィガトリアに住む十二の一族はそれに見合った仕事を古来より任されていることから分かることだ。

「どう？ なにか分かった？」

顔を覗き込んで来る星華の声に、応える声はない。つまりは、否定だった。

おそらくはこの壁画そのものは年代的に価値のあるものなのだろう。だが、あまりにありふれ過ぎていて、一見しては分かるようなことはない。

星座物語を順に手で辿って読み解きながら、隣の部屋へ移動する。

「……っ！」

炎に浮かび上がった光景に、魁は反射的に半歩後後退った。

最初に感じたのは、異質さ。どこか、幾何学模様を思わせる大量の線が視界一面に。壁だけではない。天井や床にまで、刻み込まれていた。だが、それは単なる幾何学模様と違い規則性がない。

落ち着いて見直してみると、その線の描き方に覚えがあった。

部屋をぐるりと見回す魁の目が、ずっと細められる。

「これは 星図だな」

「星図？」

ポツリと零した独り言のような魁の言葉を、星華が反芻する。星華には、この部屋が星図に見えていないようだった。

星図に見られなくても仕方がない。

「部屋自体が天球を模した星図になっている。昔のだから、今とは少し表記の方法が違うが、ここに点在して描かれているのを辿ってくと、星座が見える」

「へえ」

魁はいくつか刻まれた大小さまざまな点を、星座の形が分かるよう指でなぞっていく。それに星華も星図が描かれていることが分かったのか、感嘆の声を漏らした。

部屋自体を天球に見立て、そこに星を描いたというところか。確かに、星を図に表すのであれば平面に描くよりも、観測者がいつも見ている天球の中心から見たほうが分かり易い。こういった類の物は、昔王都にいたときに見たことがある。そのときはドーム上の部屋の天上を北天に見立てた簡素なものだったが。

ただ現在主に使われる星図と決定的に違うところは、そこに恒星で作られる星座だけではなく、惑星の動きや他の星の光を反射して光り輝く星の姿までが示されているところだ。

「なんか古くてあちこち欠けちゃってるね」

星華が欠けた石の断面を指でなぞる。

先に見た星図物語と同じように、あちこちが剥がれ落ちて一部読み解けないところがある。むしろこちらのほうが、劣化が激しいかもしれない。

（違う）

尖った断面を撫でながら、心の中で否定の言葉が浮かび上がる。心臓が妙に早鐘を打つ。

「欠けたんじゃない」

どこか震えた言葉に、星華が勢いよく振り返る。

魁は点在して欠けている箇所を辿って、その周囲の星を見ていく。けれど　　ない。

「誰かが、欠いたんだ」

そうだ、あるはずだ。他の惑星と同じ光を持たない、星座を構成する星とは違う晨星が。なのに

「晨星がない」

その眩きだけは、異様に大きく空間に反響した。

言葉を失った星華の瞳が、驚愕に大きく見開かれる。

「晨星は惑星の一つ……他の火夏星ひなつほしや辰星たつほしのようにそれぞれの時期に見える場所　動きが描かれているはずだ。なのに、どこにも見当たらない」

火夏星なども、その全てが残っているわけではない。やはりその周辺の欠けている影響である時期の火夏星の一部が欠けてしまっていたり、姿が消えている箇所もある。だが、それでも姿全てが見えない星は少ない。これが、偶然なのか　否。

「それに普通こんなふうに点在して細かくは剥がれ落ちない。第一、劣化したにしては、割れた断面が鋭すぎる。まるで石を割ったときのように　強い力で罅を入れたような断面だ」

目を見開いたまま、星華が唾を飲むのが分かった。

「じゃあ、星図がこんなふうになっているのも……星枢軸の仕業ってこと？」

「まだ可能性でしかいえないが、おそらく。元から晨星が描かれていなかったかもしれないし、本当に自然に剥げてしまったのかもしれない。けど……偶然とは思えない」

そして、星華と共に遺跡に來られたことも、こうして星図を見られたことも。

まるで何かに導かれるように、少しずつ晨星に近づいているようだった。

一心不乱に星図を見続ける魁。その隣で、星華は部屋がさらに続いていることに気付いた。

「まだ、奥にも部屋があるみたい」

そう言って星華が足を踏み出す。

その瞬間、彼女の足元にある床が、まるで泥沼に踏み込んだときのように沈んだ。

「え……？」

がくんと、バランスを失った星華の体が崩れ落ちる。

「なっ……！ 星華！」

咄嗟にカンテラを放り投げて手を伸ばし、華奢な体を引き寄せる。だが、魁の重みも加わった床は崩壊速度を急速に増し、彼の足元も飲み込んでいく。

落下。その単語が頭に浮かび、身を反転させる。そう、ちょうど星華が自分の上になるように。星華をその胸に抱きかかえ、
「きよあ！」

そんな声が至近距離で聞こえるのと同時に、衝撃が背を打った。

「っ……」

背に岩の硬さと脈動するような痛みを覚え、魁は小さな呻き声を漏らした。

自分の体の上には広がる金の髪と柔らかな感触 星華だ。

「お前……『きよあ』って、一体どこからそんな悲鳴が出てくるんだよ。普通『きよあ』だろ」

星華が口を開くよりも早く、真っ先に出てきた言葉は奇怪な彼女の悲鳴に対する呆れた文句だった。

かすかに降ってくる石の欠片と砂を払いながら、少しだけ体を起こす。途端、鋭い痛みが駆け抜けた。

（受け身に失敗したかな）

だが、星華に怪我がないようならそれでいい。これで星詠みの巫女に残らぬ傷でも付けようものなら、後が怖い。

「……じゃあ次は『きよあ』って言う」

「まず次がない様子をにつけるよ。というより早くどけ。重い」

「な……っ、重いって……ちよつと、魁！」

反論する星華を無理矢理引き剥がし、上体を起こした。お前は男

の上に乗ったままで恥じらいとかいうものがないのか、と思わず言いそうになる。

立ち上がって自身を落ち着けるように息を吸えば、珍しく妙に湿った空気と、苔生した臭いが鼻を突いた。

「ここは……」

「落ちた、みたいだな。この場所、知ってるか？」

頭上の落ちてきた穴を見上げる魁に、星華は首を横に降った。

落ちたのはそう大した高さではなさそうだ。受け身が上手く取れなかったのは、乗っていた星華のせい。そういう事にしておこう。

「遺跡が崩れるなんて、今までなかったんだけど……」

一つになったカンテラのかすかな光に照らされて浮かび上がる、周囲の様子。それを見て、魁は息を呑んだ。

「灯りを貸せ」

落ち着いてはいるが、どこか星華がカンテラを差し出すよりも早く、半ば奪い取るようにして周りを照らす。

部屋というよりは、どちらかといえば通路のような縦に細い空間。その先に、鎮座する小さな岩　いや、石版だ。

ドクン、と何故だか心臓が大きく脈打った。

もう一度足元が崩れ落ちるのではないかという心配すら忘れ、気が付いたときには魁はその石版に駆け寄っていた。

遺跡を造る黒色とも、壁画を描くための白色とも違う砂漠の砂礫のような岩。その表面はまるで積み木が組み合わさってできたように、酷くでこぼこしている。

その平らとはいえない石版の表面に細かな文字が刻まれていた。

「これは　旧語？」

「魁、読めるの？」

「少しは」

早口にそう言い返し、石版の表面に目を走らせる。時折、降り積もっていた砂塵を払い、忙しなく何度も視線を往復させ、やがてその口が小さく言の葉を紡ぎだした。

「キノ……………あ、り、捧ぐ……………役目、ち……………しん、軸とし……………この地　ナ、ヴィガ」

そこで、唐突に魁は読むのを止めた。

「魁？　どうしたの？」

怪訝そうに顔を除きこむ星華。しかし、魁は何も応えなかった。

自分の口から出てきたその名を確かめるように、再び何度も石版に刻まれた言葉を読み直す。

文字を書くには不適切な武骨な石版。文字が、単語が、割れ目や繋ぎ目を跨いでいて読み上げたものがあっているとは決していえない。

だが見間違えではない。はっきりと刻まれた、『N a v i g a t o r i a』の文字。

「おうと……………央都ナヴィガトリア　？」

* * *

その日、フォニカ神殿は夜明けを迎えると同時に騒がしくなった。いつもの荘厳な静寂はどこへ行ったのか、廊下を走る音さえも聞こえてくる。

「馬鹿な……………遺跡に忍び込んだと？」

その神殿の一角、慌しい音と空気を遮断するように窓も扉も閉めた部屋で、暗黒色の茶髪の青年は机を挟んで目の前に立つ女性に訊き返した。

洸樹・A・アリオス　星枢軸に登録し、神殿に仕える星学者の内

最高位の称号を持つ青年の柳眉が跳ね上がり、端正な顔が歪む。

信じられないといった洸樹の翡翠の視線を浴びながら、それも表情を一つも変えることなく彼の補佐官は答える。

「はい。首領の魁が星華様と共に逃げていく姿を、兵が目撃したようです。他にも『炯』と『斎』の姿を確認済みだそうです」

そう淡々と告げる補佐官の言葉に、思わず目眩を覚えそうになる。

明け方を待たずに神殿に飛び込んできた報せ。それは 影の星の首領を務めるあの魁が、蜃気楼の遺跡に、忍び込んだというものだった。それも、星詠みの巫女である星華を連れて。

警備の合間を潜り中に入った。それだけでも称賛に値するのに、更にそこから無事に抜け出した。

複雑な地下構造を使って巢穴の虫を追い詰めるような兵たちの追及の手を逃れ、それも協力者である彼女がいたから成し得たことだ。

協力者は第五十六代目星詠みの巫女 先日その盗賊団 影の星と共に神殿から逃げ出した星華・セイリオス。

星詠みの巫女誘拐に、硬く立ち入りを禁じた蜃気楼の遺跡への不法侵入。

魁がこれ以上罪を重ね いや、これ以上本物の夜明けの晨星に近づこうものなら、長老会が黙っていない。

ぐつ、と爪が皮膚を破りそうなほど強く拳を握り締める。

まだ、大丈夫だ。まだ まだ晨星に直接手が届くわけではない。あそこに残された旧跡は、すべて取り除いたのだ。あれだけの条件で見つけられるわけがない。

「洸樹様、如何なされました？」

「いや、何でも……」

抑揚のない声色で、けれどどこか気遣うような響きで様子を伺ってきた補佐官に、何でもないとはいかけ、口淀む。

「長老たちは、今どうしている？」

「盗賊と、星華様の対処について話し合っておられます。巫女様の御付である洸樹様にも早急に会合に参加して欲しいとの要請が来ています」

星枢軸最高位星学者。その役目は神殿に仕える星に携わる学者の統括だけではない。星詠みにおける巫女の補佐、それに巫女の付き人のような役割も時にはすることになる。

最高位として星詠みの巫女の傍で仕えることができるということ

は、世間一般に見ればとても名誉なことなのだろう。しかし、仕えるべき当の巫女があれでは、とても喜べなかった。付き人的役回りも、星華の場合では監視も兼ねての事だ。

その上で、星華を逃がしてしまった責任は大きい。

星華の事といい、長老会の事といい、自分にはとことん疫病神が憑いて回っているのだと、こういう時思い知らされる。

「今しばし、待つように伝えてほしい。三十分以内にはそちらへ行く」

「かしこまりました」

そう丁寧な一礼をして、補佐官が退室する。扉を閉じるほんの小さな音が、与えられた無駄に広い部屋に虚しく響き渡る。

朝日の差し込む窓の外に見える、白い光に照らされた聖都ナヴィガトリア。綺麗なところばかりではない、むしろ神殿の手によって汚れきってしまった街。そんな街の風景ですらも、今の洸樹は直視できなかった。

あの街のどこかに、星華がいる。そして魁と名を隠した青年が。

もう、止める。晨星なんか探さないでくれ。頼むから

「これ以上は、足を踏み込まないでくれ。魁斗……」

その呟きは、朝日に溶けていくように掻き消えた。

第四章 雨降り

その部屋の惨状は、凄まじかった。まるで盗賊に荒らされたかのように。ここがその盗賊の本拠地なのだからそれはまずないと思うけど。本棚に詰め込まれていた本はその殆どが床の上に散らばり、机の中の物という物がひっくり返され、とても人が生活する空間とは思えない。

そんな部屋の奥、良く確保できたと感心してしまうほど小さなスペースで部屋の主である魁が黙々と机に向かっていた。机の上に幾重にも重ねられた開きかけの本の上に紙を敷き、右手には羽ペン、左手には分厚い紙の束を持っているその状態は器用としか言いようがない。

数時間前に見たときよりも酷くなっているその部屋の様子を見て、星華は思わず口をぽかんと開けて呆然とするしかなかった。

「ねー、魁」

そう足元の物を蹴散らしながら一歩進めば、ふわりと大量の埃が宙を舞う。元から散らかっていた部屋であつたためか、どこからか出てきた綿埃もサンダルで晒した素足の周辺をふよふよと漂っている。

塵気楼の遺跡から戻って既に二日、ナヴィガトリアのアジトに戻って以来魁はずっと部屋に籠り切っていた。集めた本や論文を片っ端から漁り出し、熱心に何かを調べ。いや、探している。それこそ食事も取らないほどだ。

その結果が、この部屋だ。

かろうじて燐の用意してくれる軽食は取っているようだが、砂漠を渡った後というのにずっと寝ていないようだし、このままでは倒れてしまうのではないかと心配になる。

「……ちよつとはさ、部屋の掃除とかしようよ」

部屋の汚れ具合に顔を顰めながら、ようやく魁の元まで辿り着く。

ちよつとした本の密林を進んでいたような気がするののは気のせいだろうか。

「ねえってばあ」

しかし、魁からの反応は何一つない。

「かーいつてば！」

とうとう業を煮やし、星華は声を張り上げた。それも魁の耳元で。その至近距離での怒鳴り声に、ようやく魁が紙に何かを書き記していた手を止める。

が、何か言い返してくるのかと思いきや、魁は突然立ち上がると星華に一步詰め寄った。

いつになく真剣な瞳。底の見えない瞳の蒼さに、思わず星華の心臓が高鳴った。

「ちょ……か、魁？」

顔を近づけてくる魁に星華は後退ろうとするが、足を移動させるスペースすらそこにはない。

怒られるのか。そう思ったが魁の瞳に怒気はない。ただ静かで、吸い込まれるような澄んだ瞳が星華のそれとぶつかる。

視線を逸らすことも出来ず反射的に目を瞑り　瞬間、何故だか両足が地から離れた。

胴体を感じる他者の体温、瞼を上げれば部屋のドアに向かって移動している視界。

自分が荷物のように魁に抱えられているのだと気が付いたときには、星華は廊下に、文字通り放り投げられた。

無造作に放り出され、怒りと涙の混じった目で魁を見上げる星華が口を開くよりも早く、追撃の一言。

「邪魔だ」

凍えた声が頭上に降ってくる。

「気が散る。静かに出来ないなら出てけ」

「な、何よその言い草！　誰のおかげで遺跡に入れたと思ってるのよ！」

「星華様のおかげです。感謝してます」

どこかで聞いたようなその応え方。言っている魁はさも楽しそうな悪戯じみた満面の笑みを浮かべている。

（こいつ……！）

神経を逆撫でしてくるその笑みが憎たらしい。

しかし、そんな星華を気にも留めずに、魁は小さな麻袋を彼女に放り投げた。ジャラリと、キャッチした瞬間、硬質な音が鳴る。硬貨の音だ。

「あれ以来獅子宮も付いて来てないんだ。彩でも斎でも連れて買い物にでも行つて来い」

言うや否やパタンと、静かに閉じられる扉。

ただ一人廊下に寂しく取り残された星華の拳が強く握られ、小刻みに震えだす。

そしてついに頂点に怒りが達した時、

「馬鹿魁いいいいつ！ いーもん、すっからかんになるまで金使い込んでやるんだからああああー！」

その叫び声すらシャットアウトするように、薄っすらと開きかけだった扉がぱたんと乱暴な音を立てて閉じられた。

スラム街の入り口には、流れの商人達が集まって作られた露店街がある。

「信じられないあの馬鹿！ こっちは心配してあげてるのに……！」

その灼熱の日差しが降り注ぐストリートのだ真ん中でいきり立つ星華を、彼女を挟んで歩く彩と斎がまあまあ、と宥める。二人の手には抱えきれないほどの紙袋。星華が宣言どおり魁の というよりは盗賊団の財産を使い込んでいる証拠だ。

「魁さんが何日も部屋に籠るなんていつもの事ですし……」

「そうツスよ。前なんか一週間何も食べない、飲まないで死にそうになったところを危うく発見したんスから」

そのときのことを思い出しか、腕を組んで斎が憤慨する。

冗談みたいな一言。しかし、今現在も部屋に籠っているだろう魁を考えると、笑ってごまかすこともできない。集中するのも没頭するのも悪いことではないが、これが続くようだったら部屋から引きずり出してやろう。星華は内心そう決意する。

「けどレディを部屋から放り投げるなんて酷くない？」

同意を求めて星華の目が、同じレディである彩に向けられる。

そんな星華に彩は栗毛色の髪をふわりと揺らして、困ったような笑みを浮かべた。

彩は星華の一つ上。年齢が近いために星華が団に身を置き始めた当初から何かと一緒にいることが多い。神殿の中では星華は巫女として腫れ物に触るような扱いばかり受けてきたため、彩という存在は嬉しい。が、本人は癖だというが、未だこうして敬語は抜けていないところが、星華の唯一納得行かないところだった。

「確かに酷いですけど……今まで部屋にいて怒られなかっただけ凄いですよ」

そうなの？ と目を丸くする星華に、彩は小さく頷く。

レオとの一件があった後、魁は星華が部屋に入ることを禁じもしなかったし、気にも留めなかった。遺跡に忍び込む算段を整えるときは、寧ろ呼びに行くのが面倒だ、と部屋に星華を呼び出す始末だ。「魁さん、絶対に部屋には誰も入れようとしないますよ」

「誰もって、燐さんも炯さんも？」

「はい」

盗賊団の中でも、魁は燐と炯には特別な信頼を寄せている。そんな風に星華には見えたのだが、そんな二人にでも知られたくないことがある。そういう事なのだろうか。

しかし、ならば何故団の首領を務めているのだろうか。

思い出すのはあの暁時、一緒に偽りの晨星を見たときの魁の瞳。瞬きもせず、その姿をまるで目に焼き付けようと真っ直ぐに星を見つめる、炎のようなアイスブルーの双眸。

そして枯れたオアシスで、自分が星学者であると告げたときの寂

しげな表情。あの時、星華は何故だか深く聞く事が出来なかった。あれ以上立ち入ってはならない。そんな気がしたのだ。

（あたしは、まだ知らない事がたくさんある）

そう思考に埋もれながら通りを歩いていると、「巫女様ーっ！」と元気な声が星華を呼んだ。ふと道の脇を見ると、数人の子供達が笑顔で手を振っていた。

頭からすっぽりと被った砂色のマントの隙間から笑顔を覗かせて小さく手を振り返す。

注目を浴びることは嫌いではない。むしろ自分の存在で誰かが喜んでくれるなら、これ以上嬉しいことはない。けれど、

（顔、ばれちゃうかな……）

目立つのは極力避けたかった。

魁がレオと対峙して以来、何故だかそれまで星華を付けていた獅子宮が姿を消した。だからこそこうして護衛には不向きな彩と斎だけで出かけていられるが、それでも街には治安維持兵である人馬宮がうろついている。獅子宮と違って星樞軸の直属の兵ではないが、人馬宮も星樞軸の手先には変わらない。

星華は顔を覆うフードの裾を引っ張る。

銅貨数枚で買えそうな砂色のマント。魁が顔を隠すためと、強い日差しから肌を守るために渡してくれた物だった。神殿を抜け出すときに着ていた夜色のローブも持っているのだが、あの上質品をスラムなんかで着ていたら目立つと怒られたのだ。

「でも魁さんが自分から話すなんて珍しいですねえ」

と、彩が感嘆のような声を漏らしながら、廃材で組み立てたような店から身を乗り出して商品を勧めてくる店主をやりわりと押し戻す。

（慣れてるなあ……）

元々の性格か普段はおっとりしていて大人しいのだが、彩はこういうところでしたっきりとしている。

言葉の意味が判らないで何も返せないでいると、

「星のこと、ですよ」

と、彩が付け足した。晨星のこと、とは言わない。どこで誰が聞いているか分からない以上、下手に口にはできない。

「珍しい……ってなんで？」

「魁さん、自分のことは殆どって言っていていいほど喋らないんです」

「素性不明、ってやつツスね！」

星華と彩の前を先導する斎が振り返って元気よく言う。

や、それはちよつと違う気が。確かに素性が分からない人ではあるけれど、そう言うのと急に怪しく聞こえる。

同じ事を思ったらしく、彩がおかしそうに思わず吹き出す。だがその目は慈愛に満ちていてどこまでも優しい。

「星の事は星枢軸と対立することになる私たち団の人間に関わるからか、必ず教えてくれるんですけど、それでも、なかなか教えてくれないんですよ。私もほんの一ヶ月前まで知りませんでした」

「えっ、嘘？」

以前聞いた話では、彩は盗賊団に入って半年ぐらいだったはず。

それなのに教えてもらったのがつい最近。星華自身が晨星のことを聞いたのが入ってから半月ほどのことだったために、思わず声を上げずにはいらなかった。

「嘘じゃないです。それに、燐さん伝いに聞いたことですし」

「斎君も？」

星華の問いに、斎は記憶を探るように空を見つめる。

「そうツスね、僕も入って一年半ぐらいは経つツスけど、教えてもらったのはしばらくしてからツス。僕は炯さんからだったツスよ」

「探し物のせいなのか、魁さん警戒心の塊みたいな人ですからね」

クスクスと笑う彩のその物言いに、星華も斎もつられて笑みを零しながら、ふと唐突に思い当たった。

「燐さんと炯さんは？」

「聞いてませんか？ あの二人は 影の星 結成当初からのメンバーで、魁さんの事情は最初から知っているみたいですよ。魁さんの

事はあの二人が良く知っています」

そう言われて、魁がどうしてもあの姉弟に特別な信頼を置いているのかなんとなく理解する。盗賊団 影の星 が現れたのは確か三年ほど前。星枢軸に喧嘩を売ったという事で、当時ナヴィガトリアで大々的に報じられていたから、星華もよく覚えている。

たった三人の盗賊団。それで星枢軸と闘ってきたのだから、一緒に敵を出し抜いた喜びも分かち合った苦難の味も一入だったのだろう。

「だから、珍しいんです。その……こう言ったらあれかもしれませんが、魁さん、最初は星華のことあまり良く思ってた……」

「別に気を使わなかったっていいよ。事実だもん」

伏目がちに口を濁した彩に、星華は頭を振った。

星華は、レオの事があるまで魁がどういう目で自分を見ていたのか知っている。魁ははつきりと表に出すことはなかったけれど、あの時はまだ星枢軸に所属する者であることに警戒心と嫌悪感を抱いていた。

あの夜、互いの目的を始めてはつきりと明かしてから魁は変わった。

「多分ね、似てるからなんだと思う」

脈絡のない言葉に、彩も斎も目を丸くして星華を見る。

「魁は星枢軸に追われながらも、星を探してる。あたしは神殿を抜け出して、自由に踊りたいと思ってる。星枢軸と敵対して狙われているって所では同じなんだと思う」

脳裏に浮かぶのは部屋で本に没頭していた、魁の横顔。

「だから魁には頑張って、絶対見つけて欲しいな」

「星華さんもツスよ」

唐突に斎が立ち止まり、星華を振り返る。

「魁兄だけじゃなくて、星華さんもツス。星枢軸なんか負けちゃダメツスよ。いつか舞台で綺麗に踊って見せてくださいッス！」

「うん、そだね。ありが……」

純粋な応援を送ってくる斎に、そうお礼を言いかけて　気が付いた。

星華の足が、自然と歩くのを止める。

「星華？」

心配そうに顔をぞ退きこんでくる彩に、星華は我に返ったように慌てて首を振った。

「な、なにか僕変なこと言ったツスカ？」

「う、ううん。何でもない、よ。ほらっそれよりさ、今日は魁の有り金全部使ってやるって決めたんだからパアッと行こうか！」

「……星華、それ盗賊団のお金なんですけど」

星華の問題発言に、彩が眉尻を下げる。

「細かいこと気にしないの！　斎君案内は任せましたよ！」

「任されたツス！」

「あ、斎君単独行動はダメですよ！　また後で魁さんに怒られますってえ！」

ビシッと敬礼を一つ決めて、斎が勢いよく走り出す。その後を彩が血相を変えて追っていき、置いていかれそうになった星華も慌てて駆け出す。

その瞬間、どこからともなく伸びてきた手に腕を引かれた。

突然の力に反応することもできず、そのまま建物同士の隙間に引きずり込まれ壁に押さえつけられる。

脳内にフラッシュバックするスラムに来た日の事。ただあの時と今は違う。今は、助けてくれた魁がいない。そう思った瞬間、本能在全力で声帯を震わせた。

「ふんー　っ！　はひふんほおなにすんのよ」

叫び声を上げようにも口を塞がれていて、くぐもった声しか出てこない。

かくなる上は強硬手段。そう手足を振り上げようとし、

「星華、俺だ」

夜空の静けさを思わせる、低い声。

ハッとなり星華は動きを止める。

その人を判別するのには声だけで十分だった。
聞き間違えるはずがない。

毎日毎日聞いていた声。

「こっ……き？」

フォニカ神殿で仕える星枢軸最高位星学者、洸樹・A・アリオス
星華が最も慣れ親しんだ人物がそこにいた。

* * *

洸樹の名を呟いたまま、星華は突然の彼の登場に驚いて呆然としているようだった。

それもそうだ。神殿の上層部に住む人間がスラムなんか一人でいるとは思わない。

ようやく事態が呑み込めたのか、気まずそうに目が泳ぎだす。

「な、何か用？」

突然訊ねてきた友人に用件を聞く。場違いにもそんな風に平然と聞き返してくる星華に、

「『何か用？』じゃないだろこの馬鹿！」

洸樹は思わず声を張り上げずにはいられなかった。

顔がくっつきそうなほど至近距離で怒鳴られ、覚めたように目を白黒させる。

「いきなり怒ることないでしょうよ！」

「お前が馬鹿をやってばかりいるから言っただけだ」

「何よ人のこと馬鹿馬鹿って、馬鹿って言うほうがば……」
「星華」

鋭く名を呼ばれ、星華が開きかけていた口を閉ざす。

「いい加減、戻れ」

たった一言。だが星華のすべての望みを断ち切る言葉に、彼女の表情が凍りついた。

「それ、本気で言ってるの？」

「本気じゃないと思うか？」

問いに対し問いで返す。その返事は無言だった。思わない。その沈黙が如実に答えを表していた。

洸樹はフォニカ神殿の学者達を束ねる立場にある。つまりそれは、神殿における星詠みを管理するという事。いつだって机の上に書類の山がいくつもあつたことを。

そんな洸樹がわざわざこんなスラムにまで足を伸ばしてきて、嘘をつくはずがない。

「いつまで我が儘を言っているつもりだ。このままでは、長老会も黙っていない」

長老会。腐りかけた星枢軸の根幹を表すその言葉に、星華の肩が大きく跳ね上がった。

「……今は俺の方からもうしばらくは様子を見てもらうように何とか言い聞かせている。お前みたいなじゃじゃ馬は無理強いをしたところで、梃子でも動かないことは分かってるからな」

「なあっ……！」

「だがな」

不躰な物言いに怒気を募らせた星華が反論を繰り出すのを、洸樹は遮った。

「もう抑えていることもできない。長老会も傍観はしていない」

まるで時を止めてしまったように、星華の表情が凍りついた。

「爺どもに対する俺の力も、そこまで強くない。一月後には星夜祭も控えている。いずれ長老会が動き出したら、その時はどんな手を使うか分からない」

最高位星学者といえど、星枢軸の駒である身分には変わりはない。長老会に進言できるのは、信仰者から見た『星詠みの巫女に仕える』という身分の高さから。しかし、星枢軸という組織においてそれは通用しない。

いざ長老会が一声命令すれば、それが星華にとって最悪の結果を

もたらすことであろうとも洸樹は動かなくてはいけない。

星華はただ齒を噛み締めていた。俯く事なく、洸樹の視線を真っ向から受け止めている。

返事はない　だからこそ、洸樹は言わざるを得なかった。

「お前は、いつまでもあの盗賊団にいられると思っっているのか」

氷のようだと洸樹自身も思っってしまうほどそれは冷たい一言だった。声も、言葉も。

天の色をした星華の両瞳が、そのとき初めて揺れる。

「いいか。お前は星詠みの巫女だ。それはお前にとって不本意なことかもしれない。だが、お前がいなくなれば、民が動揺する。事実、既に巫女不在に不安を感じ神殿に大勢の人が押し寄せてきた」

それでもか、と洸樹は静かに問いかけた。

俯く星華と洸樹の間に、沈黙が降りる。一秒、二秒、と時を重ね、数秒後。ようやく星華が震える唇で音を紡いだ。

「嫌よ」

それが、答えの全てだった。

洸樹は静かに星華の手首を握っていた手を放し、それから、

「また……会いに来る。その時は良い返事をくれると期待しているよ」

次が最後のチャンスだ。

そんな響きを含ませた言葉を残し、洸樹は少女に背を向けた。

路地から出て行く洸樹の後ろ姿が見えなくなる。

途端、力の張り詰めていた全身から力が抜け、星華は倒れるように壁に背を預けた。

『お前は、いつまでもあの盗賊団にいられると思っっているのか』

体の内側まで決るような洸樹の声が、まるで呪いのように何度も頭の中に響いては消えない。

いつまでもいられない

そのことは星華も薄々は実感していた。

もう何年も、星詠みの巫女として多くの人々の前で星を詠み、踊ってきた。色んな人の、色んな思いが込められた視線を浴びてきた。この身に科せられた役目は、嫌というほど理解している。そして、人々の眼差しに込められた思いも。

信仰が集まるのは、組織である星枢軸ではない。導き手としての象徴である星詠みの巫女に人々の心が寄せられる。

そして気付いた。このまま星枢軸と対立していながら、踊り子となることの難しさに。誰が否定しようと、一度星詠みの巫女に選ばれた以上星華は一生その称号に縛られることとなる。

いつかは戻らなくてはいけない。

（星夜祭……もうすぐだもんね）

確か一カ月後位だったか、ナヴィガトリアでは星に感謝と祈りを捧げるための祭りが催される。星華はその祭りで、舞を夜空に捧げなくてはいけない。例年だったら、今頃は舞の調整に追われている頃だった。

このまま星詠みの巫女が戻らない。そんなことになっては、星に祈りを捧ぐ事が出来ない。信仰の要を失ってしまう。

だから、洸樹が長老会を抑えていられるのももう限界なのだ。

このままでは、長老会はなんとしても星華を連れ戻しに獅子宮や人馬宮を差し向けるだろう。きっと影の星の皆に迷惑を掛けしてしまう。魁がレオと闘ったときのように、誰かが傷つく。魁は自分のせいではないといったが、引き金となったのは自分だ。

けれど、それでも

（それでも、あたしはここにいたい）

そう願うのは、いけないことなのか。

欲しくもなかった称号と役目を押し付けられる日々に戻らなくてはいけないのか。

また、あの友達も仲間もない神殿の部屋の中に戻らなくてはいけないのか。

思考を振り払うように、ゆっくりと頭を振る。

(行こう)

力の入らない足でふらりと立ち上がる。急に姿を消して彩も斎もきつと慌てている。

大丈夫。あたしはまだ闘える。魁だつてずっと星枢軸と闘つてきたんだ。

そう弱々しい一步を踏み出した瞬間、星華の視界は闇に包まれた。

まるで塔のようにうず高く積み上げられた本の山が、机の上から崩れ落ちる。

「それは……本当なのか？」

震えた小さな呟きが、部屋に寂しく響いた。

「間違いないよ」

彼の問いに、数十分前突然魁を訪ねてきた情報屋　畢は静かに首肯した。

蜃気楼の遺跡の奥で見つけた『央都ナヴィガトリア』　この二

日間、魁はずっとその言葉の意味を探し続けた。

アジトを構えてから三年。その間集めて集めた何十、何百という本を読み漁った。

深夜から明け方にかけて本物の晨星を探して天体望遠鏡を覗き込む日課の合間にも、何十冊と読み続けた。

けれど、どうしても見つからなかったのだ。

央都　聖都でも王都でもない、その意味を。

そんな時、畢が突然魁を訪ねてきた。元来外をあまり出歩くような人間ではない彼が、切迫した声で『魁はいるか？』と、以前渡した古い歴史書を片手に。

そして、魁は聞かされた。

星枢軸が隠したものの一つ。星華とであつた夜に、星枢軸が隠した神殿の宝物庫で見つけた、旧語で書かれた歴史書の中身を。

驚きか、それとも怒りからか、震える手を押さえつける。

「星枢軸は、どれだけ嘘を……！」

蜃気楼の遺跡の真実を。夜明けの晨星の存在を。この歴史をあの砂漠で起こった、逃げようのない惨劇を。

星枢軸は 一体どれほどのものを隠し通せば気が済むのだろう。だが、納得できなかった。

（何故、隠す必要がある？）

八百年前に突然発生した大地震よって、今は蜃気楼の遺跡と呼ばれている都は滅んだ。地下の圧力によって水の湧き出る、砂漠の命の源であるオアシスが枯渴したのだ。

だが当時の人々は、水が日に日に減っていく中、新たな湧泉を見つけた。それを求めて、多くの同胞を失いながらも人々は歴史上稀に見る砂漠の大横断を行い、移住した。そして新たな都 聖都ナヴィガトリアを築いた。

この歴史は、星枢軸に何の関わりも持たない。むしろ歴史の真実を隠し通すという事は、身の危険を膨らませるだけだ。

蜃気楼の遺跡 否、星の旧跡。

星の軌跡を辿る道が、まだあの遺跡には残っているのか？ と、そう思ったときだった。

「魁兄っ！」

床に散乱していた本や書類を蹴散らして、勢いよく開け放たれた部屋の扉。淀んだ空気を切り裂く声と共に、斎が駆け込んで来た。それに続いて、息を切らした彩が。

魁の視線が栗色の瞳とぶつかり、堪えきれなくなったかのように、彩が胸に飛び込んでくる。

「星華さんが、星華さんが……っ！」

涙を滲ませて縋ってくる彩に、魁は目を細めた。

* * *

「……本当に一人で行くのか？」

アジトより離れたスラムの一角、砂埃が立つ路地の真ん中で、何

度目になるか分からない炯からの確認に、魁も何度目か分からない肯定の意を返した。時刻は既に深夜、草木も眠るほどの静寂が辺りを包んでいた。

「ザキ、ね……そいつが夜明けまでに来てって言ったんだろ？」

斎に視線を向ければ、小さな少年は自分の失態に沈んだまま小さく頷いた。

星華が攫われた。事を現すのはその一言で十分だった。

攫ったのは、ザキ。魁と同じく、巨蟹宮のスラムで盗賊団を束ねる男だった。

だが魁と同じ盗賊といえど、その働きぶりは最悪だ。星枢軸が持つ民から奪われた財を奪い返す影の星が義賊のようなものならば、向こうは文字通りの悪党。強盗、強姦、力に任せて何でもやるそれが星華を酒場に連れて行った日に、彼女を襲おうとした三人組のリーダーすなわち、魁が退けた者の一人だったのだ。

魁から見ればそんな男知りもしなかったし、覚える価値もなかった。それが、今になって厄介ごとを運ぶ位だったらあの時に一ヶ月は動けなくなるような怪我を負わせとけばよかった。

「あのなあ、何も処刑されに行くわけじゃないんだから……」

「星華を人質に取られてたら動けない。同じようなもんだ」

若干心配性の癖がある青年に呆れたように呟くと、厳しい目で返された。

彩と斎に聞いた、向こうが突きつけてきた要求はただ一つ。

『星華・セイリオスの命が惜しければ、夜明けまでに一人でアジトに来い』

そんな要求をしてくる以上、争い事になるにしてもただの殴り合いで終わるわけがない。炯の言うとおり、向こうは命を狙ってくるだろう。

畢に聞いた情報では勝手な縄張り意識を持ち前々から魁をよく思っていないかったの事だが、今回の件は端的に言ってしまうば、逆恨みだった。

あの時星華を手中に収める事ができず、魁に負けてしまった報復。そのために、星華を人質にとり、敵陣のど真ん中に一人で来るように仕向けた。

自分の首にそんな価値があるとは思えないが、これでも一応は影の星の首領だ。ナヴィガトリアを騒がせる盗賊団の首領を打ち負かしたとなれば、その名は一気に広まりを見せるだろう。

名誉　そんなくだらないプライドの為に星華は攫われた。

「本当にごめんなさい……私たちがちよつと目を離れたから……」

「責めるわけじゃないが、謝って解決する問題でもない」

項垂れる彩に居た堪れなくなつて、魁は夜空に視線を逃がした。

「雨、か……」

「どうしたツスカ？」

ポツリと言葉を零した魁に、斎が不安げに見上げてくる。

「いや、珍しく雨が降るなつて思つてな」

「雨……ツスカ？　空は晴れてるツスけど……」

斎の言うとおり、空はいつもの砂漠の空と同じく晴れ渡っている。星詠みを用いて天候や自然災害を予測する金牛宮からも、雨が降るという予報はない。

だが、この星空模様からすれば明け方近くには雨が降るだろう。

「いつもより見える星の数が少ないし、この時間は見えるはずのヒアデス星団が見えない。上空の大気が湿り気を増したんだと思うが」

まるで魁の台詞に合わせたかのように、乾燥した土地柄には似合わない、少し肌に張り付くような一風が音を立てて通り過ぎる。嫌な風だ。

「……恵みの雨だといいいんだけどな」

『また』　星華の脳裏に浮かんだのは、その一言だった。

星詠みの巫女であるからあの夜、ザキたちに狙われた。

星詠みの巫女であるから、レオは星華を連れ戻そうと魁と刃を交えた。

そして 『星詠みの巫女』であるから、また魁達を巻き込んだ。事が起きる度に、自分は星華・セイリオスではなく『星詠みの巫女』であるのだと思わされる。自分が争いの火種であるのだと、痛感させられる。

だから、来て欲しくなかった そう、思っていたのに。

「よお、 影の星 首領様、この間はどうも」

まるで十年來の友人に挨拶するかのように、星華を攫った張本人ザキが片手を上げる。その視線の先には月色の髪をした魁が、周囲の様子に臆することなく佇んでいた。

部屋の中央に立つ彼の正面にはザキ。入ってきた出入り口はザキの手下に塞がれ、部屋中を柄の悪い賊に囲まれている。

その部屋の一番奥に、星華はいた。両手は縄でしっかりと縛られた上に、腕は胴と一緒に括られた状態で首に鋭利なナイフをあてがわれている。唯一自由が利くのが足だが、それで何とかなるような状況ではなかった。

魁は挨拶を返すこともなく、無表情のままに口を開く。

「そちらの要求どおり、一人で来た。星華を返してもらおう」

魁が人の合間から星華を見つめる。交錯する蒼い瞳は、どこまでも静かだった。一瞬、心の中の不安を消してしまうほど。

魁のその言い方に、ザキが口元に裂けた笑みを浮かべた。そうまるで玩具を見つけたように。

「星華、ねえ……その前に、武器を外せ。持っている武器全部だ」

ザキの更なる要求に、魁は何の抵抗も見せなかった。一言も発することなく腰に提げたベルトに手を掛け、まず接近戦用のナイフを手に取り床に投げ出す。それからシースに入っていた細い投擲用の細いナイフもまとめて投げ捨てられた。

「ブーツの中のもだ」

用心深いザキに、魁が右足のブーツの内側に手を入れ、一本のナイフを取り出す。左足も同様だった。

「これで全部だ」

その言葉と共に、最後の一本が放り投げられる。

放り投げられたそのナイフが、床に着くか着かないか。

その瞬間、ガッ！ と、骨を殴る鈍く嫌な音がした。

目を逸らすこともできなかった。魁の背後近くにいた手下の一人が、その身の影に隠し持っていた鉄パイプで魁の後頭部を力の限り殴ったのだった。

「魁っ！」

床に倒れ伏す魁。その頭からは今の衝撃で頭部が切れたのか、血が流れ落ち金色の髪を赤く染めていた。

彼が起き上がるよりも早く、他の一人が彼の胴体に蹴りを入れた。体が少し宙に浮き、魁の口から小さな呻き声が漏れる。

その様子を見て、ザキが星華を振り向いた。

「連れてけ」

「へいつ！」

予想だにできなかった首領^{ザキ}の命令に星華が驚くよりも早く、星華を捉えている男が威勢良く返事をし、星華を上階へと連れて行こうと引っ張った。

「放せ！」

何とか身の自由を得ようと試みるが、男の力に星華が敵うはずもなかった。咄嗟に声を上げようとしても、口をふさがれる。

その無骨な手に、星華は思いつきり噛み付いた。一瞬だけ男の手の力が緩む。そして、星華は声を張り上げた。

「魁っ！」

呼んでどうなるわけではない。そう分かっているにも叫ばずにはいられなかった。

「なんでっ、なんで来たの！」

来て欲しくなかったわけではない。むしろ、来てくれて本心は喜んでいいる。けれど、

（また、巻き込んだ）

来れば自身の身が危くなる事など、魁だって誰に聞くまでもなく

明白だったはずだ。

星華の声に、魁がかすかに頭を持ち上げる。星華を見た左目は、流れた血で赤く染まっていた。目も背けたくなくなるような痛々しい姿、それなのに、

「お前が……言っただろ。『あんな風に踊ってみたい』ってな……」

魁は笑っていた。こんな状況だというのに。口角を吊り上げる自嘲気味な、けれど自身に満ち溢れた笑み。魁がよく見せる、いつもの笑みだった。

「だから、こんなところで終わらないように、来た。お前は、こんな所で諦めるのかよ！」

言い終わるのと同時に、その笑みが気に入らなかったのか手近にいる男が魁の顔を蹴る。

「っ、魁！」

もう一度彼の名を呼ぶのと同じ、彼の姿は星華の視界から消え失せた。

「あーあ、本当に降り始めやがった」

唐突に降り出した滝のような雨を見上げ、炯は不満の声を上げた。砂漠にとっては恵みの雨だ。だが、このコンディションは最悪だ。濡れれば服が重くなり動きづらくなる。このスコールでは、雨の音が強すぎて他の音も拾いにくくなる。

そう思いつつも、炯に雨宿りをしようという気は皆無だった。どの道濡れるなら無駄だ。

（魁の星詠みはよく当たるなあ）

この間の遺跡に行った時もそう。炯たちが遺跡での用を終え、砂漠を抜けたその次の日。つまり昨日昼気楼地帯では大規模な砂嵐が巻き起こった。風向きが変わったのだ。おそらく、そのときに風が変わった影響もあつての今夜のスコールなのだろう。

「魁も厄介な仕事押し付けてくれるよ」

「あんただから押し付けるんでしょ」

雨音の中でもよく通る声に振り向けば、炯と同じくずぶ濡れになった姉が腰に手を当てて彼を見据えていた。

「上着ぐらい着ろよ。風邪引いても知らないからな」

「無駄口叩いてる暇があつたらとつと行きなさい。魁が殺られる前にね。　　しっかりやつてくるのよ」

昔から変わらない、上からものを言う口調。姉だから仕方がないと思うが、炯はこれが嫌いではなかった。言葉の裏に、どれだけ相手を思う気持ちか込められているか知っているから。

不敵な笑みを一つ残し、炯は雨音の支配する街へ身を翻した。

痛みが、体中を駆け巡っていた。

鈍い痛み、鋭い痛み。腕から、足から、腹から。色んな痛みが色んな所から感じられて、もはや『痛い』という感覚すら曖昧になりそうだった。

大の大人が束になって数十分も無抵抗の相手をなぶり続ければ、誰だってそうなるだろう。ましてや魁の体は闘うために鍛えたものではないのだ。

動くこともできなくなり、仰向けに横たわった魁をザキが見下ろしていた。

一度は負けた相手をこうして地に伏せさせ、見下ろす事が出来てさぞ嬉しいのだろう。口元に浮かぶ笑みは、どこまでも下劣だった。「本当に単身で乗り込んでくるなんて、よっぽあの女が大事なんだな。天下の　影の星　首領ともあろうお方が、あんな小娘に惚れたのかあ？」

勝者の余裕からか、魁をからかう罵倒がザキから発せられる。

そんなザキに、魁の口から呼気とも取れる嘲笑が漏れた。

「下衆が。やられた腹いせに、実力では敵わないからと人質を取るか。とことん腐った性」

性根、と言葉を全て発するよりも早く、ザキの砂にまみれた足が

魁の頬を蹴った。また口内が切れたのか、口の中に広がる血の味が一層濃くなる。

「まだ軽口叩く力は残ってるみてえだな。ま、今にそれもなくしてやるけどよ」

とどめようのステイレットを抜き放ち、ザキが猟奇的な笑みで刃を舌なめずりする。

「お前がいなくなれば、俺がこの街で一番の盗賊だ。たいした力もねえくせに正義の味方気取りやがって、ここは力で支配するスラムなんだよっ」

「くだらない」

瞬間、ザキの高笑いが止んだ。笑みが勝利を喜ぶそれから、剣呑なものへと変わる。

「てめえ、なんつった」

「くだらない、と言ったんだ。復讐、報復、名誉、権力。そんな小さなプライド、何の役にも立たない。ましてや、お前のような貧民街でしか生きられない奴にはな」

「……言いたい事はそれだけか」

魁は答えない。答えの代わりに、魁は口元に物笑いを刻んだ。侮蔑するような嘲るような、格下の者に見せる勝者の笑み。

そしてステイレットが振り下ろされ

「があああああああつ！」

ザキの狂乱じみた悲鳴が、部屋を抜け、建物を抜け、雨音の響くスラムをつんざいた。

魁を穿つはずだったステイレット　それを持つザキの右手にどこからか飛んで来た一本の細いナイフが突き刺さっていた。そこから鮮血が滴り落ちていく。

突然のことに、どよめく手下達。その隙を縫い、魁は反動をつけて起き上がった。その勢いを生かして間髪いれず手近にいた男の腹に拳を叩き込み、相手が突然の事態に困窮している合間に床に散らばっていた自分のダガーを取り返す。

そこでようやくザキの手下が何人か動き出すが、遅い。痛みを軋む体を見せ、それぞれ腹と後頭部、それから後ろ首に一撃ずつ叩き込み最後の一人に足払いを掛ける。

ギロリと睨みを一つきかせれば、輪を作っていた男達が半歩後退した。

「まったく……挑発するのも、大概にしとけよ」

小さなはずの呆れた溜息が、部屋中に木霊する。それはここに居る誰の物でもなく、魁の良く知った最も信頼できる者の一人の声だった。

ザキの一味が、揃って声の方向を振り向く。

いつからいたのだろう。きっとこの場にいる全員が思ったことだろう。

ガラスも何もない吹きさらしの窓。そこに、いつの間に現れたのか水の滴る朽葉色のコートを纏った青年が悠然と腰掛けていた。

「……遅い」

「はいはい、文句は後で聞きますよ」

ふてくされたように小さく呟いた魁に、青年 炯は苦笑を見せた。

「ななつ、何で、どうやってここに……！」

ようやく痛み慣れたらしいザキが、正面に魁がいることも忘れて炯を振り返る。

「どうやってって普通に三階の窓から入らせてもらったけど」

「馬鹿な！ 三階にはオレの部下が……」

「あー星華の所にいた奴？ まあ、ちょっと気絶してもらったただだよ」

そうである事が当然だというように答える炯に、ザキが言葉を失う。

信じられないのも無理はないだろう。アジト中に大勢いる手下達を配置しておきながらあっさりと三階に侵入し、その階にいた手下を全員気絶させた上で星華を救出した。しかもその一連の行動を、

直ぐ真下の階にいたザキ達に気付かれることなく完遂したのだから。しかし、それが可能であるのが炯だ。影の星において、最も争いごとに長けている者。実力だけを見れば、遙かに魁を凌駕するだろう。

「ま、上手くいったのは雨が他の音を隠してくれたおかげもあるけどな。これぞ恵みの雨」

狼狽するザキに目もくれず、炯は人垣を挟んでダガーを構える魁に笑顔を向けた。

「安心していいぞ、魁。星華はちゃんと燐たちが回収する予定だから」

「助かる」

そう頷き返して口の端に付いていた血を手で乱暴に拭う。

雨に濡れた炯を見、それから両の足でしっかりと立つ魁を見てザキが齒軋りをする。

「最初っからやられたフリだったってことか」

「当然だ。なんの策も弄さず敵中に突っ込む愚か者はいない」
ジャグリングのように、手中でくるりとナイフを回す。

「人質に齋でも彩でもなく、星華を取るという選択は良かったな。お前がそこまで考えていたとは思えないが、神殿から星華を連れ出した手前、星華の身に何かあれば確実にオレの首は飛ぶからな」

得物を回しながら、ただし、と魁は続けた。

「邪魔になるからと、星華をこの場から引き離れた事が失敗だ。星華に付く人数が少なければその分炯が動き安い。星華の無事さえ確保できれば、あとはなんの障害もない」

空中で数回転させたダガーをキャッチし、真っ直ぐにザキに向ける。

「炯というこちらの手札を知らなかった時点で、お前の負けだ。……退け」

それは以前ザキたちと対峙したときと同じ台詞だった。

武器は全て回収しきっていないが、炯がこの場にいるのであれば

問題ない。完全な形勢逆転。先程の炯の实力を見せられて、ザキたちには勝機がないことなど一目瞭然だ。

だが、ザキの答えは撤退でも抵抗でもなかった。哄笑が迸る。

「詰めが甘いのはてめえの方だ！やるんだったら気絶じゃなくてきつちり殺しとくんだったな！」

その言葉の意味を瞬時に理解し、魁は息を呑んだ。その瞬間を狙って背後を取っていた一人が剣を振りかぶってくるのを、反射的に身を捻ってかわす。

階上から騒ぎの音が聞こえたのは、その時だった。

「ああ、もうっ。来るなって言ってるでしょうが！」

来るなど言って来ない者はいない。それは分かっているが敵のあまりのしつこさに叫ばずにはいらなかった。

ザキの手下に三階に連れ去られ、ばらされるか薬漬けにして売り飛ばされるか、いずれにしてももう終わりだと思ったその間際、雨に濡れた炯が突然部屋に飛び込んできた。炯はまず星華を捉えていた奴を気絶させ、そのままその部屋にいた全員をあつさりと昏倒させてしまった。それこそ物音一つも立てずに。

だが炯が魁を助けに姿を消して暫くの後、気絶したとばかり思っていた男たち数人が急に起き出し、更にはどこに隠れていたのか増援が現れ星華に向かってきたのだ。

周囲を囲まれないように、階段上へ逃げながら星華は追って来る内の一人を睨みつける。

「だいたい何よあんたたち、炯さんにやられたんじゃないのよ！」「！」

「こちとらやられなれてるんだよ！敵の目を欺くなんて朝飯前だあっ！」

「自慢できることじゃ　ないでしょっ！」

そう言い返ししながら、階段下から上がってくる手下を蹴り落とす。その時、

「星華！」

自分と呼ぶ、耳に馴染んだ声にハッと顔を上げる。その視線の先にいる魁を見て、星華の顔が自然と綻んだ。

「魁！」

「そのまま上に逃げろ！　上は屋上だ。屋上なら燐たちが迎えに来る！」

その言葉と共に、投げたナイフが星華を追っていた男の背に突き刺さる。

「ここは俺が何とかするから……早く！」

横薙ぎに振るわれる相手のナイフを魁は飛び退って避け、自分のダガーを振り上げる。硬質な音が響くと同時に相手のナイフが飛んでいき、その隙に懷にもぐりこんだ魁が相手の腕を掴んで床に叩きつけた。

その投げた衝撃がやはり傷に響くのか、魁が苦痛に顔を歪める。

（そんな体でどうしようって言うのよ……！）

ギュッと拳を握り締める。

「追ってくるなら追ってきなさい屑ども！」

そう挑発的な言葉を投げつける。ぎょっと目を剥く魁もそっこのけに、星華は階段を駆け上がった。

雨はいつの間にか止んでいた。

珍しく空气中に充満している湿気が夜の冷気を浴びて、上着の一枚も着ていない体には砂漠の寒さが一層強く感じられる。

姿の薄くなつた北の星を見れば、もう数十分で太陽が世界を照らし出す時刻まで迫っていた。星詠みの苦手な星華でもそれくらいは分かる。

「ありがたく思いなさいよ。星詠みの巫女直々に相手してあげるんだから」

そう、腰に手を当てて星華は目の前で対峙する男に自信たっぷりに言い放った。

星華を追って来たのはショートソードを手に持った男一人。おそらく、星華の発言を耳にした魁がその場に何人が抑えたのだろう。ならば、それはそれで十分。星華は自分を追ってきたこの男を倒せば良いだけだ。

「調子に乗ってんじゃねえよこの女あつ！」

そんな安っぽい台詞を吐きながら、男が真つ直ぐに星華に向かって突っ込んでくる。

だが、星華は動かなかった。

眼前まで迫った男が剣を突きのに構えるその一瞬、星華は地を強く蹴った。

「っ　っ！？」

突いたはずの標的がないことに男が驚愕の声を上げたその瞬間、星華は宙にいた。滑らかに体をそらし、舞を踊るような軽やかさを持って宙に浮かび上がっていた。

直後、先程の場所から一步下がった地に足が着くのと同時に星華は踏み込んだ。男の腹に深々と入る、重い一撃。男が短い呻き声を上げる。

間髪おかず、後ろに回りこんで相手の首筋に手刀を叩き込む。強烈だが、軽い一撃。それで十分だった。

緩慢な速さで男が前のめりに倒れ、再び起き上がる様子はない。

「星詠みの巫女を舐めるんじゃないわよ」

倒れた男に向かって吐き捨てる。

星華は星詠みの巫女として長大な舞を踊れるだけの訓練と、保身の術を学ばされたのだ。こんな武術の心得もないような男一人倒すぐらいの研鑽は積んでいる。そう、星詠みの巫女として。

『お前は諦めるのか』　魁が言ってくれたあの一言で、ようやく気付いた。

こんなところで諦めたくない。昔見たあの女ひとのように、いつか舞台上で踊ってみんなと楽しみたい。その思いがあるなら、迷うことなんてなかった。

だから、そのために自分がしなくてはいけないことがある。星華・セイリオスとして、星詠みの巫女として。

ゆっくりと顔を上げる。白み始めた空に、太陽が頭を覗かそうとして

「え……？」

その空の光景に、星華の口から自然と声が零れ落ちていた。

目の前の景色が信じられず、二、三度瞬く。次の瞬間には、その姿は、すっと日の光に溶けて消えていつてしまっていた。

けれど、見間違いではない。

あんなに強く輝く星など、星華は今まで数えるほどしか見たことがない。

夜明けの一時、何よりも強く輝く星

夜明けの晨星は、ツィー山の右側に見えていた。

第五章 空の陰り、長き夜

フォニカ神殿最上階層の廊下に、荒々しい足音が響いていた。

星枢軸の意向を定める、長老会の会合。そこに呼び出され、会議が終わるや否や飛び出すように出てきた洸樹の後を、補佐官が慌てて追いかける。

「洸樹様、長老会は巫女様のことをなんと……？」

補佐官の問いかけに応えることなく、洸樹は歩きなれた神殿の中を通過して自室前へと辿り着く。そのまま無言で扉に手を掛け、中へと入る。

「こ、洸樹様？」

いつもとは違った上官の様子に、補佐官が首を傾げた。平常心
そう自分に言い聞かせる。

「なんでもない」

「顔色が優れません……医務官をお呼びいたしたほうが……」

「なんでもないと言っている！」

突然張り上げた声に、洸樹の背後で彼女が肩を跳ね上がらせたのが手に取るように分かった。

「で、ですが……」

「下がれっ！」

殺気にも似た怒りと共に発せられた命令に、補佐官は一瞬戸惑ってから恭しく一礼をして退室する。

「ばたん、とどこか乱暴に扉を閉める。直後、

「なんでだ……なんで、俺が、こんな……っ！」

やり場の無い怒りと共に、ありったけの力で拳を壁に叩きつける。何故自分がこんなことをしなくてはいけないのか。そんな理由、分かってきっていた。

星華が神殿を抜け出したとき、長老会は早急に巫女を捕らえ連れ戻すべきだとの判断を下した。信仰の要がなくなる上、彼女がいる

のはこの街で最も治安の悪いスラムである。

しかし、洸樹はそれに異を唱えた。星華がどれだけ星枢軸を嫌い、自由を欲していたか知っていたから。

長老会とは、星華の影に獅子宮を潜ませることで合意。

だが、星華を連れ出した盗賊の首領は獅子宮を退け、更に彼女を手元に置くことを宣言。そしてそのまま星華を放置した結果、彼女は取り返しのつかなくなるような危険に身を晒すこととなった。

その報せを受け、長老会の我慢も限界に達してしまったのだ。

どうして、星華と出会ったのがよりによって彼だったのだろう。過去、誰もが羨んだ碌牙の助手にして弟子。資格を剥奪されし星学者。晨星を探し求める、魁と名乗る青年。

（碌牙さん……）

それは、幼い頃から憧れ続けてきた人の名だった。数多くの星を発見し、そのぬきんで優れた星詠みで人々を導いてきた星学者。彼が異端者として世界中から蔑視されても、洸樹の中の彼への憧れが曇ることは無かった。洸樹は知っていたから 彼に何の罪も無いという事を。

許してくれだなんていえない。自分はこれから 取り返しのつかないことをする。

「はっ……」

知らず知らず、嘲笑が漏れる。誰に対してもない、自分自身に對してのものだった。

「俺の道行く先は常に災難だな」

いつだってそうだ。アルカイドが示す先には、常に災厄しか待っていない。

* * *

太陽も一番高い時刻を過ぎ、最も気温の高い時間帯に差し掛かっ

た頃。

第四宮巨蟹宮の一角にある貧民街の酒場の店主、夏埒は夜の開店に向けて準備に追われていた。

開業から早十数年。この酒場はスラムでも特に人が集まる。それに見合っただけの準備を、従業員を雇っていない夏埒は一人でしなくてはいけない。猫の手も借りたいくらいの忙しさだった。

何より、今日は思わぬトラブルのせいで仕事が進んでいないのだから、事の発端である張本人たちに手伝ってもらいたい。

そんなことを腹に抱えた夏埒が表で仕込みに追われるその酒場の奥で、

「ちよつと魁！ 待ちなさいって言うてるでしょ！」

高らかな燐の叫び声が、広い背を追いかけていた。その彼女のあとを弟の炯が困惑した様子で付いて来る。

しかし、燐の呼び声に留まることなく魁は奥の部屋に向かって廊下を進んでいく。

揺れる金色の髪の下には真新しい包帯が巻かれ、顔やシャツから覗く体のあちこちに見るも痛々しい血の滲む痣がいくつもある。昨夜から今朝にかけてザキと対峙した結果だった。

今朝方ザキのアジトから無事に星華を奪還してきた魁は、影の星のアジトに戻るよりも近い夏埒の酒場に身を寄せていた。

ザキたちに負わされた魁の怪我の治療が最優先、という事らしくまだ夜も明けて間もない夏埒の元へ魁達は駆け込んだらしい。

というのも魁自身はどうやら星華を連れてザキのアジトを出た後、負傷による疲労からか意識を失ってしまったらしくそのことは起きてから聞かされたのだ。

起きたのは今しがた、ほんの十数分前のことだった。そして炯と燐からその一言を告げられた魁は、いても立ってもいられず燐の制止を振り切つて星華の元へ向かつていた。

「今朝の今で、そんな体で無理しないの！ 怪我の治療だつて十分に済んでないんだし、体だつて休息が必要なはずよ？ そんなに無

理して怪我の治りが遅くなっ」

と、前触れもなく魁は足を止めた。あまりにも唐突なことに、反応が遅れて危うくその背中にぶつかりそうになる燐に、一言。

「……黙れ」

唐突な魁の命令口調に、燐が反論するよりも早く更に畳み掛ける。

「首領命令」

その低い声音に、燐は口を噤んだ。

普段こそあまり団内で階級は気にしていないが、一応は魁が盗賊団の首領なのだ。燐は分別もわきまえられないような愚かな人間ではない。

今度こそ静かになったか、と身を翻そうとする。が、

「首領……命令ですって？」

地の底から響くような声が聞こえたと同時に、魁の体は力任せに振り向かされていた。

胸元と首にかかる圧迫感と、肺付近の僅かな痛み。気が付いたときには燐が魁の襟を掴んでいた。

確か裏専門の医者の見立てを燐から聞いたところ、肋骨が何本かやられているらしいかった。

「ざけてんじゃないわよ！ こちとらあんたの事を思ってるっていうのに、なにその反応は！？ こういう時は素直に年長者のいう事聞きなさい！」

「だから怪我ぐらい何ともないって言ってるんだよ！」

「嘘つけ！ 今朝死体みたいに炯に運ばれてたのはどこのどいつだ！」

そこらへんにいる男よりも尚男らしく胸倉を掴み上げる燐に、つい怒鳴り返してしまう。

まあまあ、炯が火花を飛ばす二人を宥める。

「姉貴、落ち着け。それに魁も。騒いで怪我に響いたらダメだろ？」
だが炯の勇気ある仲裁も、燐が幾分か声の音量を落としたぐらいで言い争いを止めるには至らなかった。

「頭ぶん殴られたんだから一回ぐらいちゃんと見てもらえないさいよ。後で頭ん中大変なことになってました、とか勘弁してよ？」

大体あんたは、とおそらく親心のようなものなのだろうがグチグチとぼやく燐。

（それが怪我人に対する扱いかよ）

内心燐を睨みつつも、彼女のその艶やかな口元の前に魁は手を当てて言葉を遮り、

「……燐、一ついいか？」

「な、なによ？」

ふう、と溜息一つ。

「怒ると皺、増えるぞ」

ピシッ！

瞬間、空間に亀裂が入った。そう錯覚すら覚えさせるほどに、空気が凍りついた。

同時に、言葉の重大さに炯の顔から一気に血の気が引いていく。

「魁の馬鹿野郎！ 何て一言を言ったんだよ！ ただでさえ行き遅れになりかけて、殺気立って……」

「……炯？」

ハッと炯が慌てて口を噤むが、燐は聞き逃さなかった。引きつる燐の頬と、額に浮かび上がる青筋。

「それどういうことよ！ ええ？」

「うわああああっ！ マジでごめんすみませんっ、他意はないんだって！」

「つまりそれ本音って事でしょうが！」

そんなやり取りを背後に、魁は星華のいる部屋へと向かった。

丁度一言を言ってくれた炯に、内心感謝の意を表す。

「魁！ だからちよっと待ちなさいって……星華もあんたと同じで今起きたところ……」

魁に気付いた燐が慌てて魁を止めにかかるが、時既に遅し。魁は既にドアノブを回し終えていた。

ノックもなしに部屋を開け

「せい」

その光景に、魁は固まった。

奥のベッドに掛けられている、彼女のキャミソール。

焦点を手前に合わせれば、地に向かって真っ直ぐ流れ落ちる金色の長い髪。

その金色の薄いベールに隠れて、絹糸のように滑らかそうな白い素肌が

「きゃああああああああああつー!!」

彼の注意通りの可愛らしい悲鳴が轟くと同時に、魁の額に物凄い勢いで飛んできた花瓶が直撃した。

「変態、スケベ、痴漢」

一刻後、ようやく部屋に入る事が許された魁に飛んできたのは辛辣な言葉と星華の侮蔑の視線だった。ベッドの向かい側でスツールに腰掛ける魁が、何を考えているのか目を逸らす。

「だから悪かったって言ってるだろ」

そう跋が悪そうに呟く魁の額には薬の染み込ませた白い布が当てられている。その下には、幸か不幸か星華の着替えに直面してしまった代価として、薄っすらと腫れた額がある。

(ザマーミロ)

「何よ、巫女様の裸を見といてそれだけ？」

「……だから、悪かったって」

挑発的な星華の物言いに、魁は視線を落として謝るだけだった。それ以外に何も喋ることなく、口を閉ざす。

何か反論が来るのかと思っていた星華は、予想しなかった魁の様子に思わず拍子抜けしてしまうが、しかし、その無言の意味を理解し、星華もおのずと口を閉ざした。

重い沈黙が部屋を支配していた。

星華は、彼が言い出すまでただ待った。

「晨星を……見た、らしいな」

絞り出すような魁の声は、星華でも驚くほど震えていた。それほどに、普段の魁からは想像出来ないものだった。

星華が小さく、しかし確かに頷く。

「多分、あたしが見たので間違いないと思う。東の空、シエダルクバ山脈ツイー山のすぐ右側に晨星はあったよ」

「右側……」

魁は、星華の言葉を口の中で小さく反芻する。口数がいつもよりも少ないのは、おそらく思考を巡らせているからなのだろう。

口元に手を当てて思案を始める魁を見ながら、星華は続けた。

「といつても一瞬しか見てないんだけど……」

「一瞬？」

「うん。太陽が頭出すと同時に消えちゃった。偽物みたいにね」

鸚鵡返しに尋ねる魁に、星華がそのときの光景を脳裏に浮かべる。

魁は片膝を椅子の上に立てて、俯き気味に横目で星華を見た。

「どんな星だったんだ？」

「偽物の晨星みたいだった。似てた……ような。でも、ちょっと違った。なんかこう……上手くいえないんだけど、光ってたっていうか明るかった。あと姿はつきりしてたと思う」

「……似てた、か」

「だから一瞬偽物にも見えただけで、明るさからあれが本当の晨星なんだって思ったの」

夜明け時に現れる、何よりも強く輝くとされる星。空を照らし始める太陽にも負けないようなその輝きがあったからこそ、直感ではあったが星華はあれが晨星だと思う事が出来た。

「他に何かあったか？ その時の状況とか何でもいい、気付いた事があれば……」

「うーん……」

魁の問いに、星華はその時の詳細な様子を思い出そうと低く唸る。だがそれも数秒のことで、ややあつて、「あつ」と声を上げた。

「偽物の晨星がなかった」

その言葉に、魁は一瞬だけ時が止まったように動きを止めた。どこかぎこちない仕草で星華を見る。

「なかった、だと……？」

「晨星が見れたのがほんの少しだからタイミングが悪かったのかも
しれないけど、あたしが見たときには見えなかったよ」

信じられないといったばかりに訝しげな視線を向けてくる魁に、
星華は少し戸惑いながら説明する。

見たこともない星の姿　晨星に目を奪われてしまっていたが、
あの時東の空には晨星以外の星は一つもなかった。それは間違いな
い。

それきり、魁はしばらく黙りこくってしまった。

星華がどうしていいものと迷っていると、ポツリと魁が独り言
のように呟いた。

「条件、か……？」

「どうかしたの？」

「少なくとも、俺は今までそんな星見た事がない。だからそのとき
だけ現れたとすれば、何か特別な観測条件があるのかと思って、な
……」

魁の考える事ももつともだった。星華も、あれだけの明るさをも
った星はシリウスのように夜空で何度か見たことはあるが、あの本
物の晨星と思われる星は見た事がない。

時季、時間、場所。それぞれ決められた条件が全て揃った観測か
でしか見られないというのは当然考えられる。

あの時の観測状況はおそらく普段魁が観測している時のものと大
して違わないはずだ。時間帯は勿論、魁はここ二年ほど晨星を探し
てきたらしいので、ならば時季も変わらない。ナヴィガトリアとい
う同じ街の中での場所の違いなど、星空を見るに当たって大きな変

化にはならない。

強いて挙げれば、砂漠地帯であるにも関わらず珍しく滝のような雨が降ったという事。その雨もほんの一時間ほどで治まってしまったが、常に水資源に乏しい環境を思えば恵みの雨といえた。

「……聞いていいか？」

思索にふけていた星華は、ふとした魁の声に少しだけ驚いて彼を見た。

どうかしたの、と視線で訊ね返すが、魁はどこか明後日の方向を向いている。

ややあつて、目を合わせないまま戸惑いがちに魁は口を開いた。

「その……お前が見たつて言う晨星……綺麗、だったか？」

どこか気恥ずかしさを含んだ響き。いつもの魁らしくない魁に、自然と星華の顔には笑みが溢れていた。

「うんつ。綺麗だったよ、すぐ。夜の星とはまた違ってね」

何故星枢軸が隠しているのか分からないが、魁が『一度でいいから見てみたい』と思うのも納得のいく星の煌きだった。星華もできることならばもう一度この目で見てみたい。そう思う。

星華の笑顔の答えにそうか、とだけ小さく返事をし、魁は再びだんまりを決め込む。

だが、やがて何を思ったのか突然手で顔を覆い、そのまま前髪を掻き揚げるようにクシャリと頭をかいいた。

「ああ、もうっなんでお前なんだかなあ。俺が見たほうが手がかりとしては確かなのになあ」

かと思えば元通り立てた膝と腕に口元を埋めて

「……見たかったな」

なんで俺じゃないんだ。そんな、まるで子供のようなふてくされた言い方に、星華は一瞬呆然とし、しかし笑みを零さずにはいられなかった。

突然笑い出した星華に、魁は不審な者を見るような眼差しを向ける。

「見ればいいじゃない」

星華はそんな視線を気にしなかった。少しだけ腰を屈め、挑戦的な瞳で魁を見上げる。

「見ればいいじゃない。魁が本当の晨星を見つければ、見られるんだから。存在するんだったら、見られないわけじゃないでしょ？」

挑戦的な、瞳。

「そうだな、見つければいい話だ」

そう、ふっと口元を緩め、魁は再び星華に向き直った。

自信に満ちた口元の笑みと、真っ直ぐに星華を見つめてくるアイスブルーの瞳に、意志とは別に心臓が跳ね上がる。

「纏めると、偽者の消失と晨星の出現は同時。晨星はツイー山の南側に現れ、観測可能な時間は偽物とおおよそ同じ、という事でいいんだな」

深く頷き返す星華を見て、魁が長い睫を伏せる。

やがて瞼を上げた魁は、分かった、と言呟いて静かに立ち上がった。

「アジトに戻るぞ」

「……は？」

唐突過ぎる魁の一瞬頭がついていかず、そんな間抜けな声が漏れた。

「ちよつ、魁。今なんて……」

「帰る。調べたい事がある」

そう言つて勝手に部屋を出て行く魁の背を、星華は慌てて追う。

魁は命に別状はないものの、少なくとも重傷といえる怪我を負ったはずだ。魁のことだ。一度調べ事を始めれば、また昨日までのように飲まず食わずの徹夜生活になるに決まっている。そんな状態で『調べ事』をさせるわけにはいかなかった。

暑さ避けにかあまり日の差し込まない廊下をしばらく行った所で、隣が角から顔を覗かせる。

「あれ、話は終わり？ 案外早かったわね。あんな事があつた後だ

から魁が変な気起こすんじゃないかと心配だったけど、よかったわ」
「燐さん、そういう事じゃなくて……！」

燐の意味するところに星華の頬に朱が指す。首を傾げている燐の横を平然と魁が通り過ぎていく。と、その時、

「どこか行くのか？ 魁」

廊下に反響する、低い声。いつの間にか現れた炯が、魁の道を塞ぐようにそこに佇んでいた。

魁は目の前に現れた炯すらも無視して、通り過ぎようとする。

だが、炯はそれを許さなかった。魁の腕を掴んで引き止める。

「放せ」

獣のような魁の鋭い瞳。しかし、炯は全く動じなかった。

「お前、今戻ったらまた休みなしに研究にのめり込むからな。なんでもわざわざ酒場に連れてきたと思ってるんだ」

魁は動かない。抵抗も見せないが、かといって炯の言い分に従う気配もない。

その様子に炯はやがて呆れたように溜息を吐き、首だけで背後を振り返った。

「おっちゃんも何か言ってやってくれよ」

不特定多数を指す愛称。その言葉に、魁がぴくりと反応を見せると同時に、炯の背後に大柄な人影が姿を現した。日に焼けた逞しい体と、顎を覆う無精髭。この酒場の店主・夏埒だった。

魁がゆっくりと顔を上げる。

「おっちゃん……」

「魁、頑張るのは良い事だ。が、やりすぎは良くないのは分かるだろ。体を壊したら、できることもなくなる」

薄灰色の双眸で夏埒は魁を見据える。

しかし、首を縦に振る素振りすらも見せない魁を見、「それに」と夏埒は静かに続けた。

「お前にもしもの事があれば、アイツも悲しむ」
瞬間、魁の肩がびくつと跳ね上がった。

「……なら、無理はしない。だから、戻らせてくれ」
諦めの悪い魁に、その場にいる全員が嘆息する。
その時だった。

「……なんだ？」

まだ開店前の店の方が、にわかに騒がしくなった。

夏埒が不審そうに、店の方を覗きに行こうとするその時だった。

『星枢軸が 影の星 を襲った！』

誰かのそんな叫び声が耳に飛び込んできた。

* * *

世界が緋く染まっていた。

黄昏の赤に照らされて、沈む太陽の赤に照らされて。

空に浮かぶ白い雲も、廃れかけている町並みも、全てが夕焼け色に染まっていた。

ふと天上を仰げば、東の空にいくに従って赤から橙、紫を経て濃紺へと色の深くなっていく夕焼けのグラデーション。

瞬きすることを忘れてしまいそうなその彩りを遮り、空が、赫く染まっていた。

夕焼けの赤よりも、尚鮮烈に空を焼き。

太陽の赤よりも、尚鮮烈に空を焦がし。

世界の黄昏のような炎を天に上らせて、 影の星 のアジトが燃え上がっていた。

それを目の前にし、駆けつけた 影の星 の誰もが言葉を失う。
「なん、で……」

時計塔まで全てを呑み込む炎を見上げ、星華が呆然と呟く。

離れていても容赦なく、襲ってくる炎の熱波に星華の頬から汗が一つ滴り落ちる。

その下に、見慣れた茶髪の姿。背後に獅子宮と人馬宮の兵を引き連れ、星枢軸で唯一着ることの許される最高位の神官服に身を包んだ彼が佇んでいた。

「洸樹！」

呼び声に、洸樹は星華にゆっくりと視線を移した。遠目にも分かるほど、静かな瞳。

「あんたが……やったの？」

「そうだ」

平然と、それがなんでもないように応える洸樹に、星華は血の沸き立つような感覚を覚えた。全身の血液が逆流している。そう錯覚してしまいそうだった。

「あんた……っ、あんたが言ってた手段を選ばないってこういうことだったの！？」

気が付いたときには、感情のままに叫んでいた。

洸樹は何も応えない。

代わりに、静かな声で告げた。

「影の星 首領 魁。度重なる星枢軸への暴挙、塵気楼の遺跡への不法侵入。更には第五十六代目星詠みの巫女をかどわかし、晨星が偽りであるなどの虚言で民を惑わそうとした。その罪、裁かれるに値する」

洸樹が荒れ狂う熱と共に、深く息を吸い込む。

「よって、直ちに 影の星 首領 魁斗・D・メグレズを処する！」

彼の口から発せられたその名に、ざわり、と周囲が波立った。

時が止まったかのようだった。いや、いつそ時が止まってくれたらどれだけいいだろう。

「……え？」

星華の口から、微かな困惑の声が零れ落ちる。その声に、斎と彩のそれも重なる。

三人　否、周囲の全ての視線が魁に突き刺さる。

燐と炯だけは、真っ直ぐに洸樹・A・アリオスを見据えたままだった。

その星華たちの反応が意外だったのか、洸樹が驚いたように目を細める。

「聞いてなかったのか？」

言うな、止める。そう言いたくても、声が出なかった。炎で焼き付いてしまったように、喉を震わす事が出来ない。

今すぐ駆け出して、洸樹の喉笛を引き裂いてやればいい。邪魔者が消えるじゃないか。そう思うのに、体は心が切り離されてしまったかのように動かなかった。

「師である碌牙・ミルザムと同じように異端の研究に手を染めた。

所詮は、『光の当たらぬ星』という事だな」

嘲笑うような言葉。だがナヴィガトリアの民の手前が、その表情は冷静さを保ったままだった。

あの魁斗

離反者碌牙の弟子

そんな囁きが、口々に聞こえる。

（な、んで……）

これじゃあまるで、三年前と同じではないか。

ガクツと膝から力が抜け、体が崩れ落ちる。

だが、両膝が地に付くことはなかった。

「立て」

頭上に降ってくる静かな声。炯が魁の上腕を掴んで無理矢理に立たせていた。

炯を見上げようとして、けれどそんなことすらもできなかった。

「何やってんだよ馬鹿野郎！　立て！　お前はあんな奴らに屈するのか！？」

嫌だ。星枢軸なんかに、屈したくない。

「魁、立つんだよ！　こんなところで捕まって　死んでいいのか

よ！」

捕まりたくない。死にたくない。

立つ。起つ。立て。立ち上がれ。

なのに自身を奮い立たせようとしても、指の一本すらも反応を見せられなかった。

魁斗……

脳裏に、懐かしい声が木霊する。

（師……匠……）

脳裏に浮かび上がる全てを無に還そうと、炎を吹き上げて燃え上がる研究所。

周囲を炎に包まれ、呼吸すらもままならない中で師匠は必死に魁斗を助け出そうとしてくれた。

いいかい、魁斗。忘れるんだよ、晨星のことなんか……

そう。あの夜も、こんな炎だった。

「魁斗を捕らえ、巫女を連れ戻せ」

洸樹その命令に一系乱れぬ返事が聞こえると同時に大きくなっていく、鎧の音。

チツという炯の小さな舌打ち。

焦点の合わなくなつた霞む視界の中で、音だけが妙に鮮明に聞こえていた。

「燐、魁を連れてけ！俺がこいつらを食い止める。斎と彩は星華を守れ！」

「了解」

炯に代わって今度は燐が魁の体を支え、半ば引きずるようにして後方に下がらせる。

直後、空気を裂いて耳に届く金属音。

絶え間なく響くそれが、どんどん遠ざかっていく。

歩いている。そんな感覚すらもなかった。

全てが、どこか遠い世界のことのようにだった。

（なあ、師匠……俺が何をしたっていうんだ）

ただ星を見たかった。それだけだったのに

第六章 星の旧跡

酒場の二階へと続く階段から姿を現した炯を見るや否や、星華は音を立てて椅子から立ち上がり彼に駆け寄った。

星華と 影の星 がいるのは、夏埒の店だった。だが、夜も深まったというのに星華たち以外に人影はない。あんな騒動があった後で、スラム全体が出歩くような雰囲気ではなくなり、スラム中の店が閉められてまるでゴーストタウンのようになってしまった。

「魁は……？」

不安げに見つめる星華に、炯は静かに首を横に振った。

「部屋にいる。まるで魂が抜けたみたいだ。なのにこっちが何か言くと、妙にヒステリックになって騒ぎ出す。あんな魁、始めて見た」酒場のあちこちに座る各々を一通り見、炯は疲れた様子でカウンターへと着いた。腕や顔のあちこちに巻かれた、白い包帯。いくら炯の技量を持つてしても、一人で獅子宮と人馬宮を相手にするのは荷が重すぎたのだ。

再び満ちる静寂に、その場に立ち尽くしていた星華はカウンターの一席へと戻った。あの日、魁と斎の二人と一緒に来たときに座った席だ。

夏埒が目の前にカクテルを造って置いてくれる。しかし、手を付ける気にはなれなかった。

「……燐さんと炯さんは、知ってたんだね」

誰にともなく、星華の独り言のような呟き。

「まあ、それを承知の上で盗賊団組んだんだからね」

黙っててすまなかった。まるでそう苦笑するような燐の口調に、星華は静かに瞼を伏せた。

魁斗・D・メグレス 有名すぎる名前だった。

王都レクスフォールにあるという世界随一の王立天文学校を主席で卒業し、以後星学者として碌牙・ミルザムの助手を務めた少年。

だが、その後碌牙が星に関する不穏な研究をしているとの話が浮上し、星枢軸が動いた。

彼に告げられた罪状は『晨星が偽りであるとの虚言を振り撒いた』と、それだけ。当時、既に星詠みの巫女であった星華はそう聞いていた。

王都にある碌牙の研究所は全焼し、彼自身は炎に焼かれ死亡。残った助手達は星枢軸に捕らえられ厳重な処罰を受けたと聞く。

だが、彼の弟子である魁斗ただ一人だけがその後行方不明だった。星枢軸に捕らえられる事もなく、しかし研究所跡から遺体が発見されることもなく生死すらも分からないままであった。故に、魁斗は表向きには現在も指名手配中である。

碌牙・ミルザムという星学者が星の発見、星詠みを用い世界に大きく貢献していただけに、その一報は大々的に世界中に報じられた。また、その弟子で行方知れずとなった魁斗のことも。

星に大した興味もない星華ですらも知っていたのは、そのためだ。まさか、魁がああ魁斗だとは思わなかったが。

星華も顔くらいは写真で見た事があった。魁に初めて会ったとき気が付かなかったのは、魁斗は茶髪であったのに、魁は月の様に明るい金色の髪をしていたせいだけではない。

星華が見た『魁斗』は大人しい顔をしていた。純粹無垢　そんな言葉が当てはまりそうな、真っ直ぐにカメラを見つめる視線は今の齋のようだった。

それが、三年前のこと

「三年前の事は、知ってるな」

齋と彩、それに星華の顔を順々に見、硬い声で、夏埴はそう切り出した。三人は揃って小さく頷く。

「既に察しはついていると思うが、星枢軸の差し金だ。碌牙は秘密裏に晨星を見つけ出そうとして、でもそれが漏洩したんだ」

声が酒場に浸透していくと共に、徐々に空気が張り詰めていく。

「研究所には火が放たれ、それまでに碌牙が調べ上げたことは全て灰になった。星枢軸は晨星に関する一切を消そうとしてたからな」
(全てを……消す)

同じように、全てを消すために魁のいる 影の星 のアジトにも火を放った。夏埦の言葉に、ようやく星華は洸樹 星枢軸の行動に納得がいった。

「碌牙は汚名を着せられ、行方不明になった魁も星学者としての資格を剥奪された」

剥奪された。それを聴いた瞬間、魁の言葉が脳裏に思い出された。

一応は、星学者だ。

あの時、蜃気楼の遺跡で魁が戸惑いがちに言ったのは、今は星学者としての資格がないからだだったのだと、ようやく星華は気付く。
自然と俯いた星華を気がかりに伺いながら、燐が夏埦の後を引き継ぐ。

「あたしと炯が魁と出逢ったのはその数カ月後。あたしらは元から盗賊紛いのことをして、魁が碌牙さんの昔馴染みであるおっちゃんを頼ってナヴィガトリアに来ていたところをこのスラムで会ったんだ」

「なんでおっちゃんなんスか？」

斎が首を傾げて夏埦を見る。わざわざスラムで酒場を営む夏埦ではなく、他にも頼る人はいたのではないか。それは星華も一瞬浮かんだ、純粋な疑問だった。

夏埦は目を伏せてから、ややあつて答えた。

「碌牙はな、魁に星と星詠みを教えた師匠でもあり、魁の育ての親でもあるんだ」

「育ての親？」

「魁は孤児だ」

鸚鵡返しに訊ねた星華に、夏埦は間髪入れず返した。

星華は思わず息を呑む。

「碌牙との付き合いでちっちゃい頃から魁とは何度も会ってたから

な。孤児である魁斗が頼れるところなんて、そうそうなかったんだろっよ」

一層沈んでいく空気を気になげながら、燐が再び口を開いた。

「あたし達もちよつとわけありで星枢軸に恨みはあったからね。聞いたんだ 『復讐でもするのか』 って」

「そしたらあいつ、言ったんだよ。『星を見つける』 って、それを言ったのは燐ではなく、炯だった。

「師匠を殺した星枢軸に復讐したいわけでもない。星を見つけて名誉が欲しい訳でもない。ただ、師匠が見つけようとした星を一度でいいから見てみたいってな」

それは、あの夜明けの時に魁が星華に言った言葉そのものだった。「だから俺たちは魁の後ろ盾になれるように、影の星を作った。俺たちも元から星枢軸と対立してるし、戦うんだったら一人より大勢の方がいいだろ？」

軽薄そうに炯が笑って見せる。笑いきれていない笑顔は、少しでも場の雰囲気軽くしようとしての、彼なりの努力なのだろう。

「万事、上手くいってると思ったんだけどね……」

燐が重く深い溜息を吐き出して、麦酒を煽る。

同時に、溶けて形の崩れた氷が、星華のグラスの中でカラリ、と乾いた音を鳴らした。

「ねえ星華。なんでこの盗賊団が、影の星っていうか、魁から聞いた？」

そう唐突に話しかけてきた燐に、星華は無言のまま首を横に振った。

そんな星華に、燐は静かに話し始める。

「影の星っていうのは、光を浴びない星っていう事じゃないんだよ。その言葉に、星華はびっくりして目を丸くした。今までその意味を深く考えたことなどなかったが、そのニュアンスと洸樹の『光知らぬ星』という言葉から今燐が言ったような意味を連想していた。

「自ら光を発することなく、普段は太陽の光が強すぎて、光が当た

らない影の部分みたいに私たちに見えないから、『影の星』って言うらしいよ」

「それって……」

まるで晨星のことではないか。

音にせずとも星華の言おうとしたことを理解して、燐がにこりと微笑む。

「アイツの師匠が残した、唯一の手がかりらしいよ。盗賊団の名前を決めるって時にね、教えてくれたんだ。あいつは研究のことは他に何も喋ろうとはしない。晨星のことに足を踏み込んだ奴がどうなるかなんて、アイツが一番良く知ってるからね」

「公にはされていないが、畢から聞いた話、碌牙の助手たちは晨星のことは一切知らなかったらしい。本物の晨星があるという事すらな。だが、それでも星枢軸に捕らえられた後、今も厳重な監視下に置かれて働いている」

「星枢軸もそう簡単に人命を奪うわけにはいかないからね」

ストン、と。その瞬間、まるで胸のつつかえがなくなったかのように何かが胸に落ちた。

どこからともなく、鼻をすする音が聞こえる。発生源は斎だった。……僕、前に魁兄になんで蜃気楼の遺跡のこと調べてるんスかって聞こうとしたツス。でももしたら、怒られて……っ」

斎の声が詰まり、小さな嗚咽だけが酒場に響いた。斎の隣に寄った炯が目線を合わせるようにその場にしゃがみ込んで、少年の頭にぽんつと軽く手を置く。

なんとなく、分かった。魁が仲間にも情報を教えようとしないうちは決して相手が信用できないからなんじゃない。

巻き込みたくない　彼なりの、ぶっきらぼうな優しさなんだ。

途端、目の奥が一気に熱くなる。

「ねえ星華」

優しい声音が降つてくると同時に、いつの間にか隣の席に座っていた燐が星華の頭を抱き寄せた。

「確かに星華が 影の星 に入ったのは成り行き上だったかもしれない。けどね、あたしは星華がここに来てくれてよかった。初めてだったんだよ。魁が誰かを部屋に入れたのも、自分から晨星のことを話したのも、偶然かもしれないなかったけど研究を手伝わされたものなにより、あんなに嬉しそうに星を探す魁、初めて見た」

燐が赤子をあやすように、星華の頭を柔らかに叩いたり撫でたりする。

「おっちゃんでも炯でも、あたしでもない。星華 あんたが一番、今魁に近いところにいるんだ」

溢れそうになるものを抑えるのに必死で、星華は何も言う事が出来なかった。

* * *

暗い階段に、二階へと登る小さな足音が響いていた。

炯から魁が一人にして欲しいという事は聞いたが、それでも星華は自然と魁の元へ向かっている足を止められなかった。

彼がいるはずの部屋の中には誰もいなかった。代わりに部屋の中に、月明かりの影が伸びている。その影を辿った先にはベランダ。外と中を仕切るところどころ割れたガラス戸の向こうに、金髪を夜風に揺らした魁がいた。

上着も着ずに冷たい石の床の上に座って背を丸め、手のひらで顔を覆って俯いている。その姿が、どこか泣いているようにも見えた。テーブル席の間を抜け、ベランダのガラス戸を開ける。同時に室内に舞い込んできた夜風が、星華のポニーテールを攫っていった。

その音に気付いてか、魁が緩慢な動作で顔を持ち上げた。かすかに首を動かす、星華を一瞥する。

「なんだ、まだいたのか」

砂漠の夜よりも凍てついたような声に、星華は凍りついたように動きを止めた。

「早くどこかに行け。俺が星枢軸につかまるのも時間の問題だ。そうすればお前もタダじゃすまない」

「……やだ」

紡ぎだした声は、魁の声音に気圧されたようにかすかに震えていた。

魁の瞳に剣呑な光が宿る。

「その言葉の意味を、分かってるのか？」

「分かってるよ。でも嫌だ」

はつきりと言う。今度は震えても掠れてもいなかった。

「おっちゃんたちから聞いたよ、碌牙さんのこと。それに助手の人たちのことも」

「なら分かるだろう？ 晨星に関わった者がどうなるか……幸い、お前以外はまだ詳しいことを知らない。白を切れば、隠し通せるはずだ。けど、お前は違う。知りすぎた。伝えたのは俺の責任だ。けど、晨星の手がかりを知っているとばれたら、それこそお前は一生神殿で暮らすようになる」

早口に少し苛立った口調。対し、星華はどこまでも静かだった。声も、心も。

「分かってるよ」

「じゃあ何で」

「嫌なものは嫌なの」

「っ！ 俺は、もう失いたくないんだ！」

俯いたまま突然張り上げられた声に、星華の肩が反射的にびくりと跳ね上がった。

驚きと困惑の入り混じった瞳で、魁を見る。そして、ようやく気付く。

「このことで、もう誰も失いたくないんだ！ 師匠みたいに……っ」
魁が 震えていた。

「たった一人の、家族だった。なのに、いなくなった……炎に焼かれてっ。あの時、偶然こっちにいたから良かった、けど……もしアジトにいたら、いなくなっていたんだ。炯も燐も、斎も彩も 星華も」

絞り出したような掠れた声は、泣きそうに揺れて

「怖いんだ……もう、仲間が消えていくのが……」

肩を小刻みに揺らして、魁が震えていた。

一ヶ月で魁の事が全部わかるとは思っていない。けれど、それでも星華が今まで見たことのない、悲しくなるほど弱々しい魁が目の前にいた。

「ごくり、とつばを呑み込む。

「……だから、諦めるの？」

また怒鳴るのかと思っただ、魁は静かなままだった。

返事はない。そのまま風切りの音だけが聞こえ、数十秒後。

「夢……だったんだ」

ポツリと、呟いた。そこに気力の欠片すらも感じられない。炯が、屍のようだと言った理由がなんとなく理解する。

「晨星を自分で見つけて、自分の目で見える事が」

「けど、アジトは焼かれた。資料も望遠鏡も……もう、星を見つめる術もない。もう直ぐ、きっと俺の人生も終わりになる。 だか

ら……いいんだ」

諦めの言葉が、魁の口から紡ぎだされる。 聞きたくない。

「もう……いいんだ」

繰り返された、諦めの言葉。

瞬間、星華の中で何かが音を立てて切れた。

「ふ……ふふ。ふふふふ……なんか分かったわ。今唐突に、とてつもなく分かったわ。あんたが何年かけても見つけられない理由がね」
何故だか無性におかしくなって、いつの間にか星華の口からは不気味な笑い声が漏れていた。

なんとか笑い声を抑えて、深呼吸をする。そして、

「甘ったれんじゃないわよ！」

力の限り、叫んだ。

「この優柔不断！一回やるって決めたんだから最後まで遣り通しなさいよ！見つけられるはずないじゃない。そんな、そんな中途半端な気持ちで！」

魁がまるで叱られて萎縮する子供のようになり身を強張らせる。

「望遠鏡がなくなった？星を見つける術がない？ふざけんじやないわよ！あんたには目があるでしょ、星を見ることのできる目が！その目で晨星を見るんじゃないの！？」

肺に吸い込んだ空気を全部出さん勢いで、一息に言い切る。その瞬間、すんと肩の力が抜けると同時に、何かが胸の中から抜け落ちて行った。

一瞬前まで星華の中で渦巻いていた怒りは、どこにもなかった。代わりに、泉のように澄んだ心があった。

「前に聞いたの。星枢軸に敵対する盗賊がいるって。それを聞いた時、すごいと思った」

星華は静かに、語り始める。分からなくてもいい。伝わらなくてもいい。ただ、聞いておいて欲しかった。

「あたしはずっと神殿から抜け出したかった。『無理だ』って最初から諦めてて、その盗賊がうらやましかった。星枢軸に真っ向から喧嘩売れて」

初めてその盗賊が現れたその時のことを、星華は今でもよく覚えている。ナヴィガトリアの街はその話しで持ちきりになり、フォニカ神殿中が慌てていた。

「そう思う内に、時間は過ぎてった。その間にも盗賊は神殿貴族を襲い、神殿に忍び込んで、何度も危ない目に会った。でもね……」

一度、息を吸いなおす。

「その盗賊は退かなかった。立ち向かっていった。だからあたしも頑張ってみようって、抜け出してみようって、そう思えるようになった」

魁が、ハツとしたように顔を上げて星華を見る。星華は、少しだけ微笑み返した。

（気付くのが、遅いよ）

「それで魁と会って、星のことを聞いて、ただ一つの事のためにずっと頑張って星枢軸と闘ってる魁を知った」

魁から視線を逸らし、満天の星空を見上げる。

「あたし、魁に憧れてた」

いつか魁みたいになりたい。逃げてばかりではなく、強くなって星枢軸と闘えるようになりたい。夜明けの光に照らされた魁の横顔を見た瞬間から、あの強い眼差しが脳裏に焼きついて離れなかった。「決して折れることなく、真っ直ぐに星枢軸に向かっていける魁がいたから、あたしは頑張ってみようって思った。星詠みの巫女であっても、その役目から逃れられなくても、できる限りは抗ってみようって」

何故だか彼の目を見る事が出来ずに、星華はそのまま星空を見つめ続けた。

星が流れ、静寂が幕を下ろす。

寂しげな風の音は、いつの間にか優しい歌のようなメロディーを奏でていた。

頬が少しだけ熱い。冷たい夜風でも、その熱を冷ましてくれそうにはなかった。

心臓が、五月蠅いぐらいに激しく脈打つ。

「……あたしさ、神殿に戻ろうと思ってる」

魁が、驚愕に目を見開いて星華を見つめる。諦めるのか、とそう問うてくる瞳に首を横に振った。

「諦めるんじゃない……魁はあたしに言っただね。『お前は、こんなところで諦めるのか』って」

ザキに攫われて、もう諦めるしかないと思った時、魁はいつもの笑顔で言ってくれた。

「こんなところで、あんな奴らに負けたくない。そう思ったからか

ら、決めたんだよ」

あの言葉で、星華は気が付いた。

「このままじゃあたしは神殿に連れ戻される。いつか踊り子になりたくても、『星詠みの巫女』っていう称号が邪魔する。けど、星詠みの巫女はあたしじゃない」

胸元で、両手を握り合わせる。まるで、祈るように。

「だから、あたしは戻るの。星詠みの巫女あたし自身と向き合うために戻るの」
(抜け出して、良かった)

あの日抜け出して本当に良かったと思う。魁と 影の星 の皆と会えた。神殿の外を知る事が出来た。楽しい時間を過ごせた。勇気を貰った。大切なことに気付いた。

魁は硬い表情のまま呆然と、星華を見上げていた。

砂色のマントを外し、魁の肩にそつとかける。

星華の夜明け色の瞳と、魁の黎明色のホライズンブルーアスールブルーアスールブルーのそれが交差し ふわり、

と まるで朝を迎えた蕾が開くように、星華の顔が綻んだ。

「戻って、なんともならないかもしれない。それでも、自分の力で洗樹も長老達も納得させて、役目を止めることはできなくても、せめて外で自由に踊れるぐらいにはしたい」

すつと立ち上がり、星華は魁に背を向けた。

「まだ道が絶たれたわけじゃない。だから、あたしは絶対に諦めない」

それが、魁と出会ってから星華が導き出した答え。

踵を返した星華は、一度も魁を振り返らなかった。

冷えすぎた体には寒い風が、小さな溜息を攫った。

「憧れてたなんて、言うなよ……」

(憧れてたのは、俺の方だ)

最初はすごく憎かった。星詠みの巫女なんて誰からも憧れ、慕われる存在が、正直言えば嫉ましかった。

でも、一緒にいる内に星華は自分と同じで星枢軸と闘っていたと

知り、その姿に憧れた。星枢軸と闘うことのできる星華がうらやましかった。

自分はあるなふうに、笑うことなんてできない。三年前のあの日、炎に全てが包まれた夜のことは忘れようと思っても忘れられないのに、それまで覚えていた笑い方という記憶だけをそこに置いて来てしまったかのようにだった。

当たりすぎた夜風に身を震わす。と、その時、

「クソが」

そんな短い罵倒が魁の頭上に落ちてきた。気配を消して近づいてきたその人物を、はっと見上げる。

「女一人泣かしといて、何悲劇の主人公ぶってるんだよ」

炯から告げられたそのことに、魁は驚きを隠す事が出来ずに目を見開いた。あの星華が泣いていた？

魁は何も応えない。それを見て、炯がポツリと口を動かす。

「諦めるのか」

まっすぐに見下ろしてくる視線。哀れむわけでも、蔑むわけでもない。けれど、何故だかその視線を真っ向から受け止める事が出来ずに、魁は顔を伏せた。

「頭ん中から……離れないんだ。あの時、炎の中に消えてった師匠の声が　師匠を焼いた、炎が目も閉じてても消えないんだ」

「だから、諦めるのか」

間髪いれず炯が聞き返してくる。だがそれは魁を責めるものではなかった。

「お前、この団の首領をやるって決めたんじゃないのかったのか」

どこまでも静かな炯の声。鋭くもなく、威圧しようもしない細波のような響き。

「誰も失いたくないのなら、巻き込まないように一人で星を探せばいい。お前が団の首領となることを了承した時、斎と彩を仲間にした時お前は　魁は仲間を持つことを決めたんじゃないのか」

だからこそ、その言葉はゆっくりと魁の内側へと浸透してきた。

決して仲間を増やしたいわけではなかった。けれども魁は斎も彩も、星華も放つて置けなかった。だから、炯と燐、斎と彩　そして星華。仲間を持つと決めたとき、あの時の自分は失わない覚悟を持った。首領として、皆を守り抜けばいいだけだと。

手放す気はない　レオにそう静かに吼えて、魁は闘った。

星華を失いたくないから、獅子宮と、そして星枢軸に新たな喧嘩を売ったのだ。

（まだ道が絶たれたわけじゃない）

魁の表情に、それまでとは違う何かを感じ取った炯が口元を綻ばす。

「……諦めない。俺は」

小さく、だが確かな意志を持って呟いたその瞬間。

微かな歌声が、鼓膜を震わせた。

* * *

熱かった。

体も頭も目も、目の端に溜まったものも熱く、星華にはそれしか感じられなかった。

一度は姿を潜めたそれが目の端から流れ落ち、耳の後ろを伝って屋上に小さな染みを作った時、星華はようやく自分が泣いているのだと実感した。

何故泣いているのかすらも分からないのに

「綺麗、だな……」

酒場の屋上で仰向けに寝そべったまま、星華は吐息を吐き出した。不思議な気分だった。心は風一つない水面のように妙に静かなのに、頭の中は正反对だった。色んな言葉が現れては消え、忙しく飛び交っている。

それらが静まり涙が退いた時、星華の中には一つだけ残っていた。

「踊り……たいな」

何かあったとき、星華は常に踊ることを選んだ。怒ったときも悲しいときも、踊っていれば全ての気持ちが出まるべき所へ還っていた。それが踊りと呼べないものでも。

何を踊ろう、とそんなことを考える暇もなかった。

気が付いたときには星華は立ち上がり、足が一步を踏み出していた。

天地の狭間 星の民

微かな歌声が、風に乗って広がっていく。

歌は得意ではなかった。

それでも、星が人々の道標であるのなら

（どうか、魁の道行きを示して下さい）

その為に、自分は祈ろう。ここで、星たちに舞を捧げよう。

黄昏時に照らされて 浮かぶ夕星導く闇

夜空に歌声が溶けていった

* * *

吹き込んでくる、冷たい砂雜じりの夜風が頬を撫でた。その乗って聞き慣れた鈴のような声が魁の耳に届く。

一段、また一段と魁は屋上へ続く階段を上っていった。ゆっくりとどこかおぼつかない足取りで、不思議な歌声に誘われるように。

雄雄しき金牛 猛り大地を踏みしめる

天は微睡み嘆けども 双児の瞳は目醒め知る

聞いたことがある詩だった。集約詩　星夜祭で星詠みの巫女が踊る星の舞に合わせて巫女が歌う、星を讃える詩の各節の頭を取り簡略化された詩だ。公式の場で謡われる総詩に対し、集約詩と呼ばれ、人目に付く事はめったにない。

最後の一段を上り終えた瞬間、髪を揺らす風が一層強さを増した。視界を掠めた金色の髪に、顔を上げる。

一瞬、心臓が鼓動を止めた。

月明かりが降り注ぐ今にも落ちて来そうな星空の下で、星華が踊る。

華麗に、流麗に、荒々しく、静かに。星屑の髪を靡かせ、宝石のような瞳を夜空に向け、

天地の北辰今一度　夜明けの陽を待つ　ただ独り

瞬きすらも忘れて、魁はその神々しい姿に魅入っていた。

この世でもっとも有名な舞　星夜祭で踊られる星の舞。その足取りは星の位置を指し示し、動きは星の輝きを表し、歌声は星へ捧げられる祈りだと言われている。けれど、

(違う……)

どこかが違う。魁の記憶にある何かと、目の前で踊られているそれが噛み合わない。記憶の奥底が、違和感を訴えている。

舞が終焉へと向かっていく。

暁時に染まる空　現る晨星導く朝

魁はじつとその舞を見続け

「きやつ……」

気が付いたときには走り出し、高みで踊る彼女の腕を掴んでいた。バランスを崩した星華が倒れこんでくるのを、魁はしっかりと受け止める。

「ちよつ、何すんのよ！ 危ないでしょ！？」

「お前……その舞は何だ」

「何って、星の舞に決まってるでしょ？」

「少しだけ頬の紅潮した困惑顔で見上げてくる、腕の中の星華を見つめ返す。」

「お前のその舞……公式に記録されているものと違う」

「えっ……？」

「星図と一致しないんだ」

「ま、まさかそんなはずないでしょ？ だってこれは歴代の巫女が一寸たりとも間違えないように、受け継いできたのよ？ あたしだって間違えたりしないわよ」

「そついうことじゃない」

魁の声に含まれる、焦りと高揚。

「その舞の歌が、踊りが指し示す方向が偽物の晨星を指していない上に、お前が見た晨星の方向と一致している」

「ちよつと待つてよ……それって……」

「……なんで気が付かなかったんだ」

心臓が五月蠅いぐらいに早く脈打つ。

「星華の舞は、本物の晨星を指している」

* * *

夜明けの日差しが、店内に射し込んでいた。

「先に、皆に言っておく」

酒場の一階に集められた面々を見回し、魁は緊張した面持ちで呟いた。

そこには星華を含んだ 影の星 の全員と夏埒、そして魁に呼び出された畢が大きな円を描くように佇んでいた。

「これから話すことは、晨星に繋がる核心だ。これを聞いたら後戻りできなくなる。星枢軸に捕まったら、首が飛ぶのは必至だ」

一息吸ってそれから吐き出し、覚悟を決める。

「今まで黙ってって、すまなかった。けど巻き込んだからこそ、勝手かもしれないが皆には知っておいてもらいたい。これ以上巻き込まれるのはごめんだ、と。そう思うのであれば、退室してくれ。影の星 も抜けて、これから先自由に暮らしてくれて構わない」

魁はもう十分、ここにいる皆を大変なことに巻き込んだ。これ以上巻き込む道理はない。

そんな魁の前に、斎が一人進み出てくる。

「誰がなんと言おうと僕らの首領は魁兄ッス」

そうギュツと手を握って一心に見上げてくる。顔を上げて燐、炯、彩を順に見れば皆そろって頷いてくれた。夏埒と、そして畢も。

「ここまで関わっておいて今更だ。碌牙の探し物でもあるしな」

「面白そうじゃない。是非とも聞かせて欲しいものだね」

そして、星華。

「覚悟なんて、とつくの昔にできてるよ。神殿に閉じ込められる気も、死んでやる気もないけどね」

そう言って、にかつと笑う星華。

（怖がる必要なんて、どこにもなかった）

魁が誰かを失わせるつもりもなければ、皆も失われてやるつもりもないのだ。

「ありがとう」

笑顔は伝染する 昔聞いたそんな言葉の通り、そう、魁は微笑んだ。

「まずは、これを見てほしい」

そう言って魁は一番大きなテーブルにナヴィガトリア周辺の地図を広げた。

全てが灰になってしまった今、頼んで畢の物を持ってきてもらったのだ。それと羽ペンとインク、定規やその他諸々。

それらを使い、魁は遠慮なしに地図に書き込んでいった。まず偽

物の晨星を現す丸印をツイー山の左側に、それから星華の舞によって分かった晨星の位置を書き記す。

「舞に示された星が、星華が見たという本物の晨星と一致する。星の舞は本物の晨星を指し示していると見てまず間違いないだろう」

そう説明を加えながらも、魁は作業を続ける。偽者と本物、それからツイー山の中央をそれぞれ聖都ナヴィガトリアと線で結んだ。

「あつ、これって左右対称って奴じゃないツスカ？」

「それをいうなら線対称。まだお前には難しかったか」

「む、難しくないツス！」

ツイー山と聖都ナヴィガトリアを結んだ線から二つの晨星の位置を見て、声を上げた斎。見栄を張って言い返す斎に、魁は思わず苦笑した。

「だが、良いところに気付いたな。この位置取り、加え、星華が晨星を見た時は珍しく、砂漠に雨が降った後だった。そこで気付いたんだ」

魁は更にその周辺に書き込みを加えていった。今度は矢印と文字を。

それは厩気楼地帯周辺の大まかな気流や海流と気温の様子だった。ツイー山の北側は寒流が流れ込み、山を隔てた海の上には冷たい空気が充満している。

ナヴィガトリア周辺の砂漠化の原因の一つだ。

一方、南からは二本の矢印が描かれている。二つとも、南からの暖気を運ぶ風を示している。

片方は南西から厩気楼地帯の方に向かって伸びている。南から吹き込む暖気だ。これが厩気楼地帯を覆うような形のシェダルクバ山脈にぶつかり、厩気楼の遺跡周辺の気温がナヴィガトリア周辺に比べて高くなる。厩気楼が発生する原因とも言われている風の流れだ。もう一本は南東からツイー山へ向かったものだった。これがツイー山にぶつかり上空へ上がる。

ツイー山を挟んでちょうど北に冷たい空気が、南に暖かい空気が

存在する格好となった。

「ツイー山は面白い形をしているな。山にしては稀有な、極端に言えば板を立てたような形だ。この山を挟んでここに記した条件を満たしたとき、一つだけ発生する現象がある。それが、鏡映蜃気楼」

『鏡映蜃気楼？』

聞きなれない単語に齋、彩、星華の三人の声が綺麗に重なり、魁は一瞬怖気づく。そんな魁に代わって炯が口を開いた。

「確か蜃気楼の一種で、元となる物体の側面に虚像が現れる。上方、下方に比べて極めて発生しにくい……とかいうやつだっけ？」

確認の視線を向けてくる炯に、魁は力強く頷いた。

「そうだ。俺は今までもずっと、別の星が星枢軸の手によって勝手に晨星と定められていたんだと思っていた。だが、違う。別の星が存在するんじゃないくて、本物の晨星が鏡映しのようにになっていただけなんだ。星華が本物の晨星が偽物に似ていたといっていた理由がこれだな。本物そのものが映っているなら、そっくりなのは当然だが、鏡映蜃気楼は鏡に映ったように見えるわけではない。その姿は揺らぐし、光の強さも劣る」

確証はないが、と付け加えながらも確信を滲ませる魁の説明に、それまで静かに話を聴いていた夏埒が低く唸った。

「なるほど、蜃気楼は温度差によって発生する。だからこの一帯に雨が降り、ツイー山の頂上付近の温度差が緩和されたときだけに蜃気楼は消え、本物が見えるようになる、か」

「すごい……こんなことがあるなんて」

夏埒に続き、彩も感嘆の声を漏らす。反応はそれぞれ違ったが皆一様に驚いているようだった。当然といえる反応。このからくりに気付いた魁自身も、まさかと思ったほどだ。

しかし、唯一反応の違う人間が一人だけ存在した。

「でも、なんで晨星が蜃気楼で違う場所に見えるかって分かってても、それじゃあ根本的な解決にはならないじゃない。星枢軸をどうにかして今見えてる晨星が偽物であることを発表するなりにしたって、

現物がこのまま見られないなんて、大問題じゃない」

文句を言ってくる星華を、魁は半眼で睨みつける。

「急かすなよ……集約詩の舞に晨星の位置が隠されていた。この詩にはもう一つ重要な要素が隠されてるんだ。今度は歌のほうでな」

魁は地図を裏返した。そこに星華が昨夜 決して上手とは言えないが 謡っていた集約詩を書き綴っていく。その作業片手間に、魁はもう一つの話を持ち出した。

「蜃気楼の遺跡で見つけた『央都ナヴィガトリア』 この言葉の意味が判った。この歴史書のおかげでな」

「歴史書？」

訝しげに見てくる夏埒に、魁は畢に渡していた一冊の古い本を目の前に上げて見せた。

「神殿からくすねてきたものだ。酷い状態な上旧語で書かれていたんだが、畢が半月以上をかけて解読してくれたおかげで分かった。

解説はまあ、畢に任せる」

「はいはい……」

事前の打ち合わせも何もなく突然仕事を押し付けた魁に、畢がはあとあからさまな溜息を吐いてみせる。だが、やはり言葉とは裏腹に畢の顔に陰鬱な表情はなかった。解読した本人からの方が、魁を通して言伝に聞くよりよいだろうという魁の考えを素早く読み取ってくれたのだろう。

「斎君、蜃気楼の遺跡のことは、なんて知ってる？」

「千年以上前に滅んだ大昔の遺跡……」

「それが大嘘。蜃気楼の遺跡は八百年前に滅びた央都ナヴィガトリアの成れの果て」

おどけたようにさらりと言う畢。突然の答えに、この場にいる全員が表情が、驚きに目を見開いたまま強張った。

（いきなりそれを言うかよ……）

皆が衝撃を受けるのは分かりきっているのだから、ワンクッションは置いて話すぐらいの気遣いはして欲しい。

「八百年前っていうと、ちょうどティコ大地震があつたころよね……」

「待てよっ、その地震って確かツイー山を崩落させた……」

口元に手を当てて考え込む燐の言葉に、炯が焦燥を含んだ声を挟んだ。

ティコ大地震。歴史上稀に見る大地震の名だ。

シェダルクバ山脈から東に突き出るような形で存在するツイー山、その南側は内海に面しており、地質上崩れ易かったらしく、大地震が起こった際に崩落した。比較的地質がしっかりしていた北側だけが残り、今の変わった形を形成するようになったのだ。

畢が大仰に頷く。

「その通り。まさしくその大地震によって、ツイー山の一部が崩落し、蜃気楼を生み出す山が誕生。更に、央都ナヴィガトリアのオアシスが枯れたんだ」

八百年前に突然発生した大地震によって、今は蜃気楼の遺跡と呼ばれている都は滅んだ。地下の構造が変わり、地下の圧力によって水の湧き出る、砂漠の命の源であるオアシスが枯渴したためだった。

だが当時の人々は、水が日に日に減っていく中、新たな湧泉を見つけた。それを求めて、多くの同胞を失いながらも人々は歴史上稀に見る砂漠の大横断を行い、移住した。そして新たな都　聖都ナヴィガトリアを築いた。

と、あの一昨日魁に伝えたものと全く同じ解説をその場にいる全員にする。それが終わると、魁が集約詩の最後を書き終えたのはほぼ同時だった。

「で、それが集約詩とどう関係あるのよ？」

自ら考えようとせず真っ先に尋ねてくる星華に、魁は大きな溜息を吐き出す。星華に溜息を吐くのも、すごく久しぶりな気がした。「……気付かないか？　集約詩の流れとこの歴史。いや、集約詩の違和感に」

魁が言うや否や、星華たちはテーブルを上から覗き込むようにし

て、それぞれ詩を目で追っていく。紙面と睨めっこをすること数秒後、彩の目つきが変わった。

「同じ……？」

ポツリ、と零れた一言に、魁の口元には自然と笑みが浮ぶ。

「同じって何が？」

「ええと……」

「今、畢が喋った歴史とだ」

確証がないことが不安なのか星華の追究にしどろもどろになってこちらを見てくる彩に代わり、魁は答えた。途端、星華を始めとし炯、燐が怪訝な顔をする。

「彩はどこが同じだと思う？」

「えと……私が見た感じでは詩の一部なんですけど、第一宮の白羊宮のから……」

そう言って彩は、魁の書き綴った詩を指でなぞり始める。

『安寧深き夢の底 漂う白羊星詠い

雄雄しき金牛 猛り大地を踏みしめる

天は微睡み嘆けども 双児の瞳は目醒め知る

巨蟹は刃を振り下ろし 夢への惑いを断ち切らん

道行き護る獅子の牙 惑う民の盾と成り

その手に実る乙女の愛 彷徨う民の安らぎに』

それと、詩の折り返し地点に入る北極星に纏わる部分を飛ばした、

『運命を図る天秤は 砂の幻へと沈み

天より降りる蠍の針 砂礫に道筋描き出す

聖なる地への門拓く 貴き賢者、人馬の知

磨羯大地に足をつけ 静寂忘れ声高らかに』

その二箇所を声に出して読み上げた彩に、魁は「正解」と呟いた。彩の顔が笑顔で満ちる。

「平和な都、大地震の発生、天の蜃気楼、枯れていく泉への不安と絶望、決死の砂漠横断、砂漠の蜃気楼、砂漠の旅人の道標となる星聖都の開拓、栄える都 彩が挙げた詩は、それぞれの出来事を想

像させるものになっている。央都から聖都への人々の歩みをな」

星華と燐が喉を上下させる。燐に至っては、もう言葉すらも失っているようだった。

魁は続けた。

「集約詩に含まれる歴史。だが、この中には歴史を現していない詩もある。そこがポイントだ」

ペン先にたつぷりとインクをつけ、魁は先ほど彩が読み上げた詩を斜線で消した。残ったのは黄昏と夜明け、十二宮の一部と北極星の詩だった。

「天地の北辰今一度 夜明けの陽を待つ」

突拍子のない事を言い出した魁に、全員が勢いよく魁を振り返った。

それは、詩の中間 北極星を現す二行詩の一部だった。

「何故『天地』なんだ？」

どこか驚きながらも分からないと訴えてくる視線を受けながら、魁は口角を上げて問いかけた。

「一般的には、『まだ夜明けは遠く、星たち天地の北辰は夜の闇の中で太陽を待っている』とそう訳される。では、何故『地』が入っている？」

「それは地の星 夜闇に迷う人々が世界の夜明けを待っているから……」

「ここに謡われているのは、北辰と呼ばれる星なの？」

魁に威圧されてか、戸惑いがちに答えた星華に間髪おらずに切り返すと、星華はぐっと押し黙った。

「北辰とは、北極星の呼び方。他にも色々な呼び方があるな。キノスラ、フォエニス、ナヴィガトリア」

そこまで言い進めた所で、星華があつと声を上げた。気付いたらしい。

「世界各所の地名は、世界を天球に例えつけられる事が多い。シェダルクバやツイーがいい例だ」

「天の北辰は北極星そのもの。だつたら地の北辰はナヴィガトリア！」

「それも央都のほうな。央　　回る天球の中心軸にある星には相應しい字だな」

嬉しそくに満面の笑顔を向けてくる星華に、魁は静かに微笑み返す。

残ったのは一つ。そしてこれが、詩の謎を解く最後の鍵。

「それじゃあもうひとつ。夜明けの陽　　つまりこの詩で言うところの光知らぬ民知らず　　輝く晨曦」。さてここで問題だ。光知らぬ民とは？」

蒼い光を宿した魁の瞳が、どこか楽しそうに細められる。

「宿星が人の命運を表す。人が星そのものに例えられるこの世界。つまり、光知らぬ星　　」

「影の星　　つまり晨星ツスね！」

斎が澀刺とした表情で、魁の台詞を引き継いだ。

それが、碌牙が残してくれたたった一つの手がかり。詩を説くための重要なキーワード。

「合わせて訳すと、央都ナヴィガトリアは晨星を待つ」
それが、詩に隠された最大のメッセージ。

これで、全て整った。

酒場に集まった全員の顔を、魁は一人ずつ順々に見ていく。返ってくる、力強い眼差し。

「晨星への道を紐解く最後のファクト　　それは蜃気楼の遺跡にある」

* * *

フォニカ神殿上層部に設けられた会議室には、重苦しい空気と静寂が籠っていた。

その中央に洗樹は、立ち尽くしていた。追及されるわけでもなく、

糾弾されるわけでもなく。その沈黙が目の前の広い円卓に座る、彼ら長老会の言葉だった。

「……それは、真でございますか？」

震える声で、洸樹は訊ね返した。

長老会　星枢軸の実権を握る七人の老人達から下された決定を前に、声の震えを抑えることなどできなかった。

「巫女は神殿の窮屈な暮らしに飽き、抜け出した。そのほとぼりが冷めればやがては帰ってくるだろう。それまでは巫女のために、しばらくは様子を見て欲しいと言ったのはそなた自身であろう」

「間違いありません。私が申し上げたことです」

一人の老人のに、俯いたまま、しかしはつきりと答える。

「我々は貴公のその望みを聞き入れたその結果、魁斗に晨星の手がかりを与えることとなった。そして奴はつい数刻前に遺跡へと向かった。巫女と共にな」

「晨星が偽りであるなどと、民に知られるわけにはいかぬのだ」

一番左端に座っていた長老の言葉に、唇を痛いほど噛み締める。

何故こんな長老どもの利権のために嘘を吐き続けなければならない

そんな歯痒さが脳内を駆け巡った瞬間、洸樹の唇は知らず動き出していた。

「もう……いいではないですか」

「何？」

長老会を構成する七人全員が、揃って眉を顰め目を細める。

「もう長きに渡り星枢軸は晨星という星一つを隠して参りました。

いつかは真実の姿を民に現すと、貴殿らは仰います。では、その時はいつくるのですか？　貴方がたは、いつまで民を騙し続けられ……」

「洸樹よ」

自身の名を呼ぶ声に遮られ、洸樹は半ば口を開いたまま言葉を失った。

「これは長老会の意志である。いくらお前が優れた星学者であり、

星詠みの巫女に仕えるものだとしても、進言することはできぬはずだ。この決定は覆せぬ」

できることなら耳を塞ぎたかった。

「魁斗・D・メグレズをその手で討て。そして巫女を連れ戻せ。それがお前の責務だ」

下された命令。その決定を覆す手立ては、最高位星学者の洸樹は欠片も持ち合わせていなかった。

第七章 明ける空、最後の夜

暗澹とした階段が、長く続いていった。階段の終着点に向かって濃度を増す、一寸先すらも見えぬほどの闇。

しかし、その階段を下りる魁と星華の足取りは、それを見る者に微塵の不安も迷いも感じさせないほどにしっかりしていた。

「また落ちるなよ」

「またつて何よ！　そう簡単に落ちな……っきゃ！」

そう言っている傍から足を滑らせる星華に半ば呆れつつ、魁は左手を差し出した。

星華は一瞬戸惑い、それからギュツとその手を掴んでくる。

詩に隠された最大のメッセージ　それを頼りに厩気楼の遺跡に
来た魁は、星華と共に遺跡の最奥へと向かっていた。そこに　影の
星　のほかの四人の姿はない。他の四人は魁の侵入を手助けし、外
で兵たちを抑えることを選んでくれたのだ。　つまりは囷となる
ことを。

「で、どこに向かつてるの？」

「枯れた泉の真下に当たる地下だ。集約詩にそれが示されている」
真っ直ぐに階段下を見据えながら答える。

星華が手に持ったランタンで先を照らそうとしてくれるが、それ
だけではどこか頼りなかった。魁自身も灯りは持っているが、腰の
ベルトに提げたままだ。

一応右手は空いている。しかし、いつでもダガーを引き抜けるよ
うに魁はランタンを持とうとはしなかった。

晨星への秘密を解き、再度厩気楼の遺跡に来た以上、遺跡の内部
まで兵が邪魔しに来てもおかしくなかった。一度は完全に魁の命を
狙って来た星枢軸だ。おそらく既に魁の動きには気付いているはず。
そのことを考慮すれば、いつでも戦える状態でいたかった。

少しだけ早足に、それでも星華が遅れることのないように着実に

階段を下りていく。

『流れ導く宝瓶は 枯れにし泉を潤わせ

揺蕩う双魚地の底へ 雫音一つ響きたる』

集約詩における十二宮の最後、宝瓶宮と双魚宮の詩を魁は口ずさんだ。

「この二行だけが、十二宮の中で歴史を現していない」

「単に必要ななかったか？」

「いや、下手な含みを持たせないのであればいつそ十二宮全てを使ったほうが分かり易くなるはずだ。だとしたら、これも歴史であると考えるべきだと思う」

「過去の人が歩いてきた歴史と同じように、これは人が通るこれらの歴史っていうこと？」

魁の考えを察した星華に、深く頷く。

「集約詩は晨星を見つけられるように作られている。だとしたら、それが遺跡を指すだけではなく、どこへ行けばいいのかが記されていると考えたほうが順当だ。ならば『枯れにし泉』は聖都の泉の事だと考えられる。ご丁寧に、『地の底へ』なんて書かれてるしな」

「……やっぱり、集約詩は誰かが意図的に作ったんだ」

星華の声のトーンが、数段落ちる。姿は見えなくとも、その表情が曇ったことはなんとなく分かった。

「全てが隠されていたことだからな。舞に晨星の位置が示されていたことを考えれば、昔の星詠みの巫女あたりが作ったと考えたほうがいいだろう」

「でもそう考えると、よく今まで舞が改定されなかったね」

舞に晨星が繋がる手がかりが隠されていると知られれば、星枢軸の手によって変えられてしまう。

星の位置は不変ではない。一夜、一年の中で動くという意味ではなく、何百何千という長い年月をかけて、天球そのものが少しずつだがずれていくのだ。事実、北極星とされる星は現在ポラリスであるが、その昔はコカブであった。

故に古くから続く星詠みの歴史の中で、星の舞を始めとする星の位置取りを示す舞は何度が改定された。星の位置が変わったという理由さえあれば、星枢軸は怪しまれることなく舞を改定する事が出来るのだ。

「集約詩の舞は、その晨星の部分一箇所だけが違う。なおかつ、ツイー山を挟んだ本物と偽物の位置の違いは、現在のナヴィガトリアから見ればほんの数度しかない。気付ける奴なんてそういないからな」

「それ自慢？」

「……事実だ」

背中に突き刺さるような視線を感じ、魁の返答が一拍遅れる。

「集約詩に込められた意味もそうだ。集約詩は殆ど謡われることも踊られることもない。見聞きする機会が少なければ、発覚する機会も極端に減る。なおかつ、星枢軸によって隠された真実の歴史を知る事が出来なければ、詩の意味は解けないからな」

話を終わると同時に、階段の踊り場に辿り着く。右方には回廊が伸びており、ここを曲がれば以前訪れた壁画の間に辿り着く。

しかし、そこ魁は曲がることなく更に階段を下へと進んでいった。ここから続く更に奥は、星華が舞を奉納したという場所に繋がっている。魁の予測では、そこがちょうど遺跡群を抜けオアシスの真下に当たっているはずだった。

「でも、なんで星枢軸はその……晨星を隠したんだろう。今じゃなく、昔の」

沈黙に耐え切れなくなったのか、唐突に星華が魁にそんなことを聞いてきた。

魁はしばらく何も発さなかった。星華の質問に対する問いは、星枢軸しか知り得る事の出来ないことだ。

星枢軸が晨星を隠したその理由。察しはついている。

「これは推測でしかないが、多分当時の人々は晨星が蜃気楼の影響を受けたって事に気付かなかったんだと思う。央都ナヴィガトリア

も、地震の被害にあつてたらしいしな。それである日、気付いたんだと思う。その日まで見ていた晨星が蜃気楼でできた虚像だったことに」

「ふんふん」

星華が適当な相槌を打っているうちに、階段が終わる。その先には、長い長い回廊が続いていた。はがれ落ちた壁や天井の破片が、床に散らばっている。さすがにここまで潜ると湿気が多くなり、壁や破片のいたるところに苔生している。

この先に答えがある　そう思うと、自然と胸が高鳴った。

魁に何かを感じ取ったのか、星華が手を握り返してくるのが伝わった。

「だからといって、星枢軸は人々にそれが虚像であると教えるわけにはいかなかった」

「……なんで？」

「当時を考えれば分かる。オアシスが枯れていく中で、今まで信じていた晨星が嘘でしたなんて発表できるわけがないだろ。だから

」

「星枢軸は晨星を隠し通した」

魁の台詞を引き継いだその声は、星華のものではなかった。回廊に反響する忘れもしない声と、コツコツと歩み寄ってくる靴の音。

星華が灯りを持ち上げる。同時に、さながら亡霊の如くその姿が浮かび上がる。

「なかなかいい推理じゃないか、魁斗」

場違いにも賞賛の拍手を送ってくる星枢軸最高位星学者。

「洸樹！」

星華が彼　洸樹・A・アリオスを目に反射的に声を張り上げた。だが、彼のその手に握られている鈍い銀色の光を放つそれを見て、彼女の表情が凍りつく。

銀細工の施された、細身のショートソード。

「……お前が直々に殺しに来るとはな」

「これは俺の責任だからな。星華を自由にし、結果お前に晨星の秘密を解かせてしまった事へのな。安心していい。地上に控えている獅子宮は暫く入ってこない」

「ちよつ、ちよつと待ってよ！」

互いに殺しあうことを既に了承している二人の間に、星華が割つて入った。

「なんで二人が……どうして魁が殺されなきゃいけないのよ！」

その問いかけに、洸樹は答えることは無かった。眉尻を下げて、

「悪いな、これも命令なんだ」

ただその一言と共に、苦笑する。

音も無く両手でショートソードを構える洸樹に、星華が絶句する。魁は無言で星華を下がらせ、二本のナイフを抜き放った。右手に大振りのダガーを逆手に、左手にカルドを構える。

「魁斗　できることならばお前とは違う形で出会いたかった」

洸樹のどこか悲しげな呟きが響いた、その瞬間。

どちらともなく、駆け出した。

鋭い金属音と共に、暗闇に火花が爆ぜる。

振り下ろされた洸樹の一撃の重みに耐えられなくなり、一足飛びに後退。直後、洸樹が体勢を立て直す前に再び接近し、ダガーを横に薙ぐ。その一撃はあっさりと避けられるが、それも予測済みだ。

洸樹が回避した瞬間を狙って、カルドを突き出す。だが、

「っ　！」

息を呑んだのは、洸樹ではなく魁だった。魁のナイフよりも早く繰り出された洸樹の剣。

がら空きになった魁の胴体　心臓を一突きにせんとしてくるそれを、紙一重のところ宙に飛び上がって回避。そのまま洸樹の背後に着地する。

「神殿に籠ってる割にはなかなか動けるようだな」

魁が身の軽さと手数之多さで攻めるのに対し、洸樹のそれは手数

さえ少ないがその一撃一撃が的確に急所を狙ってくる。相手の隙をついた正確無比な剣さばきは、星学者としてはとても思えないほどに練達していた。

「身を守る術ぐらいは持っているからな。あとは嗜む程度だ」

ふっと洸樹は口元を緩める。

（どこが嗜む程度だ……！）

くるりと、左手のダガーを順手に持ち替え、跳躍。

「文武両道とは、さすが史上最年少で最高位星学者の名を冠したエリート様だな！」

飛び上がったまま、洸樹に向けて真つ向からダガーを振り下ろす。全体重をかけたそれを、洸樹は刃に手を添えた剣で受け止めた。上と下から、力と刃が拮抗する。

「それを言うならば、お前もだろう。さすがは碌牙の弟子、よくぞ限られた手がかりを見つけ出し、ここまで辿り着いたというべきか」
「っ!？」

彼の口から出てくるはずの無い言葉に驚愕する魁。その一瞬、ナイフを押す力が緩み、押し返された魁は着地の姿勢を保ったまま数メートル、地の上を飛ばされた。

剣呑な光を宿した魁の視線と洸樹の視線がぶつかり、二人は静止した。距離は、互いの間合いの一步手前。

「お前、何故そのことを知っている」

集約詩と舞に隠された晨星への手がかり。その事を星枢軸の者が知っているはずがなかった。知っていれば、当然集約詩も舞も改定されるのは必至だ。

そんな魁の意図を読み取ったのか、洸樹は首を振ってそれを否定した。

「馬鹿な長老どもは気付いていないが、知ることさえあればあんなもの簡単に気付ける」

「だが」

「晨星に辿り着ける者はいない、とそう判断したからだ。それこそ、

星詠みの巫女の協力でも得る事が出来なければな」

「ちらり、と洸樹が魁の背後で不安そうな顔をしている星華を見遣る。」

「……ずっと、知っていたのか」

「……ああ。最高位になった時に、全て語り継がれた。知りたくも無かった」

その瞬間、魁の中でそれまで堪えていたものが音を立てて切れた。沸き上がってきた怒りに呼応して、血が煮え滾るような感覚を覚える。

「知っていたなら、何故お前は動かなかった！」

再び右手を逆手に直すと、ベルトの後方につけた小さなダガーを引き抜き、洸樹に向けて一気に放つ。三本の投げたダガーは簡単に見切られる。

「お前は全てを知っていながら、許せたのかそれを　星枢軸が何百年にも渡り」

「許せるわけがないだろう」

まるで感情の読めない声。

間髪おかず、洸樹の間合いに踏み込む。

「だったら何故動かなかった！　日の当たる場所で、誰もが羨む地位で、成そうと思えば成せた事をどうしてしなかった！　お前ならば、長老会に反してでも晨星を現す事ができたろうに！」

「お前に　何が分かる！」

それは先程までの彼とは全く違う、肺の空気を全部絞り出すような声に、洸樹の懷に飛び出そうとしていた魁は思わず足を止めてしまっていた。隙ができてしまい、身構える。

だが、洸樹はピクリとも動かなかった。無防備なほどにただその場に立ち尽くしている。

「洸樹……？」

星華が不安げに彼を見る。その視線の先、俯いた洸樹の拳は震えていた。

「四年前、魁斗・D・メグレズが王立天文学校を主席卒し、あの碌牙の研究室に入ったと聞いたとき、それがどれほど羨ましかったか！ 誰もが願った日の下を歩いているのはどっちだ！」

そこにいたのは、最高位星学者の青年ではなかった。洸樹 ただの星学者としての青年がそこにはいた。

強く握られすぎた洸樹の拳から、血が一滴、滴り落ちる。

「星を見る事が好きだった。民の為に星詠みをする碌牙に憧れてこの道を選んだ。なのに星枢軸の実態は腐った爺どもの懷を肥やしているだけ。おまけにいざ最高位の地位を貰ってみれば、民を欺いていました、だと？」

自嘲するような笑みを浮かべると同時に、洸樹が一足飛びに魁の目前まで飛び込んでくる。

（速い つ！）

そう思ったのも束の間、気が付いたときには洸樹の剣が魁のわき腹を浅く裂いていた。宙に舞う血と傷口を走る鋭い痛み。

それを見て、魁の背後で星華が悲鳴にも似た声を上げる。

「全てのしがらみから放たれ、盗賊として自由の中にいるお前に分かるものか！ この地位を取り、晨星のことを知り、けれども明かせば民を不用意に不安に晒すことになる！ 民を導くべき地位にしていることの責務が、お前に――」

間髪おかず振り下ろされたショートソードをかるうじて受け止める。だが、攻撃を流すことはできずに、そのまま剣を押し合う硬直状態に入ってしまう。

せめぎ合う剣と短剣。どちらが不利かなど、目に見えて分かる。けれど、退くわけにはいかなかった。

至近距離でぶつかり合う、一對の蒼翠の瞳。

「……だからお前も晨星を隠すことを決めた、か」

魁の声はどこまでも澄んでいた。数瞬前まであった、身を焦がすような怒りも驚きも、今は何処かへと消えてしまっていた。

「誰もがお前のようにいられるわけじゃない。諦めずに真っ直ぐに

前を向くことが、どれだけ難しいか……！」

「じゃあどうしてお前は捨てなかった」

その瞬間、怒気に染まっていた洸樹の新緑色の瞳が、揺れた。それが大きく見開かれていくと共に、剣を押してくる力が緩む。それを逃さず、魁は両腕にありつた力の力を込める。

「地位が邪魔なら捨ててしまえばよかった。民を不安にさせるのであれば、惑うことのないようにお前が導いてやればよかった。それだけの実力がお前にはある　だから、最高位の名を持っているんじゃないのか？」

渾身の力で押し返した一瞬、弾かれるように洸樹は後方へと退いた。

「お前は足掻くことすらできなかったんじゃない。自ら足掻くことを諦めたんだ」

上がってしまった息に肩を大きく上下させながらも、魁は動きを止めなかった。静かに口火を切る。

「俺は……後ろばかり向いていた。師匠を失った過去ばかり見ていた」

横薙ぎに一閃。洸樹の右腕を浅く裂く。破れた服の箇所には血が滲み出ていた。

星華が制止の声を掛けるが、魁はそれを無理矢理意識の外に追出し洸樹がバックステップで後ろに下がるよりも早く、その頭上を飛び越えて背後を取った。

「諦めようと思った。師匠を失ったみたいにな、もう誰も失いたくない。もう、殺されて楽になろうかとも思ってたさ」

諦めようと思った　その言葉が放たれると共に、洸樹の体の中央よりやや左にそれたところにカルドを投げる。

洸樹がそれを避けようと横に飛ぶ。それでいい。

「けど、星華が教えてくれた。道が途切れているわけじゃない。ただ、道の上にくつもの障害物があるだけだ」と

洸樹の背中が、壁についた。洸樹は不意を突かれて一瞬だけ驚き、

魁の接近に気付き剣を振り上げるが、遅い。魁のダガーの方が数段早かった。

「だから、諦めない。邪魔なもんなんか、脇道にどかしてやる。それがどんなに難しくても」

魁のダガーは洗樹の喉元　刃の切っ先が皮膚に触る一歩手前で止められていた。

チェックメイト　ゲームオーバーだった。

息を深く吸って吐くのに合わせて、魁の肩が大きく動く。洗樹も両肩と胸を大きく上下させていた。彼のその瞳に、既に戦意は残っていないかった。

「今更だけど、俺は思う。晨星が隠れてしまったのは、偶然だったのかもしれない」
けれど、と魁は続ける。

「お前が　お前達がそうやって抜け出せない闇に入ったのは、自ら晨星を隠すと押すことを決めたから。　自分の中から晨星を見えなくし、自らの夜明けを遠ざけた」

そうやって星枢軸は、今も抜け出せない闇の中にいる。
刃を突き付けたままの魁と洗樹の元に、星華が慌てて駆け寄ってくる。

そして放心したままの洗樹を見、柔らかな声音で呟く。

「ねえ洗樹。……諦める必要なんて、どこにもないんだよ？」

喉元に刃があることも忘れたかのように、洗樹が暗い天井を仰ぐ。
その顔には、怒りも悲しみも羨望も絶望もなかった。

ただ一つだけ　哀しみだけが色濃く浮かんでいた。

* * *

「央都ナヴィガトリアが滅んだのは、星枢軸の失態なんだ」

真っ直ぐに回廊を進みながら、洗樹はそう切り出した。それは、魁がどうしても分からずにいた、星枢軸が歴史を隠さなくてはいいけ

なかった理由だった。

「お前達は央都ナヴィガトリアのオアシスとなる地下水脈が地震で崩壊したと思っっているらしいが、厳密には違う」

洸樹を先頭に星華と魁は再び最奥を目指す。更に深くに潜るのか、緩やかな斜面になっている回廊をひたすらに歩いていた。

「ティコ大地震があつた際、ツィー山の崩落によつて晨星の姿に異常がある事は直ぐに分かつたらしい。晨星の虚像が現出していることに。そのことに気が付いた星枢軸の学者達は、晨星の姿を出現させようとしたんだ」

「どうやって？」

星華がきょとんしながら、首を傾げる。その動作に合わせて揺れる金髪は、暗闇の中でも輝きを失わなかった。

数秒の沈黙。

「ツィー山を再び崩落させるんだ」

意を決したような洸樹の応えに、魁も星華も息を呑む。山を一つ崩落させるなど、容易いことではない。だが、魁はただ黙って洸樹の続きを待った。

「な、そんな大規模な事が人為的に……」

「できるんだよ。この、央都ナヴィガトリアを使えば」

迷いのない洸樹の話し方に、星華も自然と口を噤んだ。

「央都の下にある、泉の命脈　地下水脈は、ツィー山の地下水が流れてできたものだ。水脈は、途中大小の鍾乳洞を挟みつつツィー山の麓まで繋がっている。ナヴィガトリアの水脈を崩壊させれば、連鎖的に全ての地下水脈が崩れる、と。それが当時の学者達の見解だった」

周囲の様相が、徐々に変わっていく。瓦礫ばかりが散乱していた通路から、

「だが、幸いにも央都の地下水脈は崩落しかけただけで、完全に命脈が絶たれたわけではない。危ういバランスを保って、辛うじて生きていたんだ。そのままではまた崩落する可能性を孕みつつもな」

ランタンの炎に浮かび上がる洸樹の横顔に、影が落ちる。

「当時の星枢軸は、二つに一つを選ぶしかなかった。水脈の崩落を防いで民の命を護るか、それとも晨星を出現させるか」

「それで、星枢軸は晨星を隠し民の命を護る事を選んだ」

「ああ」

晨星を隠さなくてはならなかった理由。魁の声に洸樹が深く頷く。

「けど、泉は枯れたんだね」

そして、話の続きを促す星華にも。

「その後数十年して泉は枯れた。水脈の補強工事に無理でもあったのか、それとも元から水脈を守るなんて無理だったのか。いずれにせよ、その数十年の間に運良く新しい泉が見つかったために、民は移住。聖都ナヴィガトリアが築かれた」

「じゃあなんでそのときに水脈を崩落させなかったの？ 枯れた地下水脈なんていらないじゃない」

「聞くより先に考えるよ馬鹿」

考えることを放棄して洸樹に尋ねる星華に、魁は痛烈な一言を突っ込む。星華がむっとする。

その理由は、今の星枢軸を見れば魁にも容易に察しがついた。

「今更嘘です、何て言えなかったんだ」

洸樹は悲痛な面持ちで、小さく頷いた。

「そのころにはもう、星枢軸は民のためとはいえ吐き通してきた嘘がばれる事を恐れるようになっていた。それどころか、自分達の判断ミスで晨星の姿が隠れ、更にオアシスまで枯らしてしまった。…民に追及されるのを恐れたんだ」

結果として都が滅んだのだから、民を守るためだったとの言い訳は通じない。そのことを明かさずにしても、晨星がただの虚像だったと知られれば星枢軸への信頼は一気に崩れ去る。

だから今の長老会のように、その椅子から追い出されることを恐れた。その言葉の裏に秘められた意味は、そういうことだった。

「だから、失敗の塊である央都の存在を隠し、歴史を隠した」

そう洸樹が締めくくる。それとほぼ同時に、目の前が開けた。決して人目につく事のない、暗き舞殿。

洸樹が手馴れた様子で壁に掛かっている燭台の油に火を移している。

炎の赤さに浮かび上がる清廉な白に覆われたその空間は、まさしくフオニカ神殿の一部を思わせるような造りだった。

星華が長かった道程を思い出してか、大きく伸びをする。

「じゃあ、その地下水脈をぶっ壊しちゃえば晨星はちゃんと見られるようになるんだね」

「その方法があればな」

それが予想外の返事だったのか、星華の表情が固まる。そしてたつぷりと数秒後、

「え？」

間拔けな声が星華の口から漏れた。

「俺はその方法とやらを知らないからな」

「ええええっ!？」

驚愕に素っ頓狂な声を上げて、洸樹に詰め寄る星華。

「なんで知らないのよ!　ここまで来たのに無駄足になっちゃうじゃない!」

「知らないものは知らないんだ!　俺は一言も知っているなんて言っていない!」

燐の影響か胸倉を掴んで揺さぶる星華に、洸樹が思わず声を大きくする。その二人のいい争いが始まるよりも早く、魁は素早く口を挟んだ。

「星華、落ち着け。集約詩にこの場所を指す言葉があるんだから、ここにその手がかりがあるのは間違いないんだ」

「……なんであたしだけに言うのよ」

背に突き刺さってくるような文句を無視し、魁は舞殿の中を歩き回る。

「……なあ洸樹。なんで、こんなところで舞の奉納が行われるんだ

？」

「さあ？」

「さあつて……」

「昔から続いている事だからな。この場所で舞を捧げるってことは、随分前から決められているらしい」

お手上げ、と言った様子の洸樹に適当な相槌を打ち、魁は星華に視線を移す。

「もう一つ聞くが、踊るのは星の舞じゃないかな？」

星華がくるり、とその場で一回転すると共に頷いてみせる。

「つまらない舞だよ。ゆーっくり踊るだけなんだもん。それだったらまだ星の舞の方が動けるから好きだなー」

どこか不服そうな表情で、言葉を裏づけするかのようになり、星華が華麗なバク転を決め、更に数度身を捻るように動かしながら舞殿を歩いていく。直後、その足が唐突に止まった。

突然動きを止めて足元を見つめる星華に、魁は怪訝そうな顔をする。

「星華、どうした？」

「……踏んだときの感触が違う」

その言葉を聴いた瞬間、魁と洸樹の顔色が変わった。

「なんて言うのかな……音が少し違う感じがするの。あと、足に返ってくる反発も。沈むような感じ。ここと、あっちと」

そう言つて、幾つかの床を指差す星華。魁と同じことに思い当たったのか、視線を向けてくる洸樹を見返す。

「魁斗、まさか……」

「可能性としてはあり、だな」

互いににやり、と口角を吊り上げ、

『星華、違ふ床を全部探せ』

どちらからともなく、そう言った。

* * *

舞殿の中央に立ち、星華が顔を伏せる。

魁も洸樹も、ただ静かにその姿を見つめていた。

そして数秒後　星華が星の舞の一步を踏み出した

あの夜と同じく、しかし今は炎の灯りに照らされて舞う星華を見て、魁はポツリと呟いた。

「本当は、星華が解くべきだったんだろうな」

「……だろうな。ここを崩落させる方法だけは星華　巫女であるものにしか解けない」

地下水脈の崩落方法　それは、星詠みの巫女に代々受け継がれる舞の一つである、集約詩の舞を踊ることだった。

星華の言った感触の違う床は、集約詩を用いて踊られる星の舞の足取りにほぼ一致。魁と洸樹がその場所を調べた結果、おそらくこの場所の更に下に空洞があり、その天上部分に当たる床の何箇所かが脆くなっているようだった。星の舞には、何度か高く飛ぶ場面がある。その着地の衝撃をある順に床に伝えることで、地下水脈を崩落させる事が出来る。

過去に遺跡巡りをした経験がまさかこんなところで役に立つとは思わなかった。

「舞も、巫女ただ一人しか知らないものだからな」

「けど、当の星華が星詠みは苦手だ巫女になりたくないと言うもんだから、ここまで辿りつけるはずもなかったんだけだな」

星華を見て洸樹は困ったように嘆息する。

着地時の星華の微細な振動が、床を通じて足の裏に伝わってきた。

「……洸樹、星華は神殿に戻るらしい」

唐突に話題を切り替えた魁の言葉に、洸樹が訝しげな視線を向けてくる。

魁は星華から目を離さずに続けた。

「夢を諦めたんじゃないくて、夢を叶える為にらしい。今のままじゃ、『星詠みの巫女』が邪魔だから、せめてもの自由が取れるぐらいに

は長老会と戦うらしい」

洸樹が一瞬驚いたような顔をする。だがそれは直ぐに微笑へと変わり、彼はそうか、とだけ小さく呟いた。

星華が最後の一步を踏み終える。宙に舞うポニーテールがふわりと重力に従って、真っ直ぐに地に落ちる。

同時に蜃気楼の遺跡が、その地下からゆっくりと崩落を始める。

そしてその夜、シエダルクバ山脈ツィー山が崩壊。

翌朝、世界はただ一時強く輝く星と共に夜明けを迎えた。

終章 暁色 朝焼けに染まる世界で

その日、聖都ナヴィガトリアは一年で最も人の多くなる日を迎えていた。街中いたるところに人が溢れ返り、宿はどこも満員、飲食店に至っては客が途絶える事がない状況だ。

そんな中でも取り分け人の集まる白羊宮の、小さな酒場にて。

「なあ兄さんはどう思うよ？」

カウンター席に座る中年の女性と談笑していた店主が、唐突に女性の隣に座る青年に尋ねた。頭からすっぽりとマントのフードを被る青年は、一瞬だけグラスを傾ける手を止めた。

「どうって、何がだ？」

酒場の喧騒で隣の話が聞こえてなかったのか、訊ね返してくる青年のぶつきらばうな声に店主がにわかに慌てる。

「いやいや大した事じゃないんだけどさ、明日の朝、巫女様が夜明けの舞を踊られるか踊られないかって話だよ」

「踊らない？」

怪訝そうに返してくる青年。

「兄さん知らないのか？ ほら、二年前に本物の晨星が見つかって、去年だったか星枢軸ではそれまでの舞を一新しただろう？」

「けど、『夜明けの星』の舞だけは踊られなかったんだよ。星枢軸の方が何度申し立てをしても、それだけは踊らないのさ。皆がその舞を待っているっていうのにねえ……」

ずいっと青年に耳打ちするように、女性が身を近づける。

「ここだけの話、巫女様は恋人の帰りを待っているらしいよ」

「おい、それは単なる噂だろ？」

「噂じゃないさ。巫女様が洸樹様に言ったらしいよ。『この舞は魁に一番最初に見せるんだ』って。魁っていうのはあれだろ、碌牙様の弟子で盗賊団 影の星 首領の魁斗様！ 聞いた話金髪碧眼の美男子らしいねえ」

「ふーん……恋人、ねえ」

噂話に咲かせる二人に、青年はただ適当な相槌を打つと、一気にグラスの中身を飲み干して立ち上がった。カウンターの上に数枚の硬貨を置いて、青年は出口へと向かっていく。

「ご馳走様」

「あ、ああ毎度……」

そうだ、と思い出したように青年は呟いて立ち止まった。

「さっきの答えだけど、今年は踊る、のほくに一票かな」

「ほう、それまたなんでだ？」

興味深げに唸る店主に、青年は考える素振りを見せた。

その数秒後、

「恋人が帰ってきました、とだけ言っておこうか」

にやり、と口元に笑みを浮かべると共に、青年がフードを少しだけ持ち上げる。その下に覗く、太陽のような金髪と濃い碧空の瞳。

『ええええええええええええつ！？』

店主と女性の叫びが店内に轟いたのは、青年　この街で魁と名乗っていた青年が街の喧騒の中に姿を消した後だった。

* * *

夜明けが近づいていた。まだ空は真つ暗なままだが、あと十分もすれば空が明るくなり始めるだろう。

そんな星の残る空を見上げながら、フォニカ神殿の東端にある星夜祭の舞台裏に控える少女の背に夜空を思わせる声が掛けられた。

「星華」

その低く落ち着いた声に星華が振り返る。彼女も同じく、落ち着き払った声色で訊ね返した。

「どうかしたの、洗樹」

「どうかしたじゃなくてな……分かってるよな」

それは、晨星を讃える舞を踊らないことへの注意だった。昨年は

舞台にまでは上がったのだが、そこで立つたまま踊ることなく終わってしまったのだ。

それを言った途端、それまでの落ち着いた『星詠みの巫女』としての顔はどこへか、星華は拗ねたように頬を膨らませた。

「あれは帰って来ない魁が悪いんだからね？ 何よ、王様に呼ばれたからって王都に行つたつきり何の音沙汰もないんだもん」

「そう言うなよ。そのおかげで俺だってこうしていられるんだし、星華だって……まあ護衛つきだが外にも出られるようになったんだ」

魁の働きにより、星枢軸が晨星を隠蔽していたと発覚し長老会を構成していた七人の長老達は全員が失脚。それまでに行つてきたナヴィガトリアや他の町への圧政も取り糺されての事だった。

洸樹自身も隠していたという事で星学者の資格剥奪ぐらいの処罰は覚悟していたのだが、魁が王都の機関の方へ取り繕ってくれたらしく、最高位の称号を失うだけで済んだ。

今までそれが重みだった洸樹にとっては、ありがたいことだった。更にはそれを機に長老会という閉鎖的制度は廃止され、星詠みの巫女に対する扱いも変わった。

「炯さんも燐さんもみんな魁が帰ってくるの待ってるのにさ」
「いつかは帰ってくるさ」

ぶつくさと文句を言う星華に苦笑する。それと同時に神官の一人が星華を呼んだ。 時間だ。

星華が洸樹に背を向け、舞台に続く階段に足を掛ける。

「魁、星夜祭ぐらいは来てくれると思つただけだな……今年も、か」

「逢いたいなら逢いに行けばいいだろ？」

「……逢いたいわけじゃないもの。一番最初に見て欲しいだけ」

蜃気楼を模した薄いシヨールを身に纏い、星華は舞台へと上った。

舞台の中央に、一人立つ。瞼を伏せて俯いたままでも、観客席から期待の視線が痛いほどの突き刺さってくるのが肌で感じられた。

できることならば踊りたくなかった。

晨星は、彼の力があつたからこそ見つける事が出来た。そしてそのおかげで、星華は神殿から出ることもでき、この舞も作る事が出来た。

（魁　　）

彼の名を胸中で呟き、瞼を開ける。

一面に広がるブルーアワーの青に染めた夜明け前の空。そこに

「か、い……」

ボロボロになった砂色のマントを靡かせ、朝焼けに染まり行く東の空を背負い、巨蟹宮の焼けてしまった時計塔　その頂点に立ち、魁が悠然と星華を見つめていた。

シャン、と　星のきらめきを思わせる、朝の澄んだ空気よりも尚清廉な鈴の音が響き渡る。

黎明の空にポツリと、一つ浮かび上がる小さな、けれど強い輝きを持った星。

晨星　夜明けの舞が、始まる。

そう考えるよりも早く、気が付いたときには星華の体は動き出し、ていた。

ただ、無心に踊る。何も考えることはない。

そして夜明けの舞の最後にして、星の舞の終詩に差し掛かる。

蜃気楼を払う　その意味を込めて、星華はシヨールを宙に投げた。視界が、霞が掛かったかのように覆われる。

吹き抜ける一陣の風。それと共に視界が晴れたとき

星華の目の前に現れる夜明けの太陽のような金髪と、ブルーアワーの空をした瞳。紛れもない、魁　魁斗・D・メグレスその人が星華の目の前に佇んでいた。

突然の魁の登場に、観客席にどよめきが走る。「魁斗だ」「魁だ」「盗賊だ」「影の星　だ」　色んな呼び名で彼を呼ぶ声が飛び交う。

しかし、そんな声の一つも、星華の耳には入ってこなかった。心

臍が早鐘を打つ音が、五月蠅いくらいに耳に聞こえる。何を言おう、どうしよう　そんな考えが頭の中を駆け巡る。

「久しぶりだな」

一番初めに何を言うかと思えば、至って普通の挨拶に星華は拍子抜けする。同時に、張り詰めていた緊張が一気に何処かへ吹っ飛んで行ってしまった。

「『久しぶりだな』じゃないでしょ！　ずっと手紙一つ寄越さないで、あんたは……！」

「仕方ないだろ。向こうに行ったら行っただで学会とか引つ張りだこだったんだから」

「仕方ないって……！」

すっと、唇に押し当てられた魁の人差し指に、星華は口を噤んだ。そして、

「綺麗だった。晨星に負けないくらい、すくなく」

そう言つて、魁が微笑む。そこにあつた瞳は、魁のものであつて魁のではない　彼が魁斗と呼ばれた頃と同じ光が、その目には宿つていた。

「当たり前でしょ」

「それでこそ星華だ。　それじゃ、行くか」

「え？」

言葉の意味が呑み込めずに星華が声を零す。それと同時に、

「盗賊は盗賊らしく、欲しいものは奪つて手に入れるべきだろ？」

「うひゃあ！」

そう言つと、魁は両腕で星華の体を軽々と抱え上げた。

発せられた悲鳴に、魁が可笑しそうに体を揺らして笑つ。と、

「魁斗、星華っ！」

明らかに切迫した声が、舞台下から響いてくる。

「うつわやバ。洗樹だ……」

星華と同じく久しく見ていなかったその姿を懐かしく思つてか、魁の顔が自然と笑顔を作る。

「久しぶりだな、洸樹」

「あ、ああ久し……」

「そういうわけで、星華はいたでいきますんで」

突然の事態に動揺しつつも洸樹が返そうとした挨拶を遮るや否や、魁は舞台から飛び降りた。

魁がにやり、と口角を持ち上げて腕の中の星華を見る。

「今度は星華の番だろ？」

自分の目標は達成できた。だから、次は星華の番。その意味を理解した瞬間、星華の表情が一瞬にして華やいだ。

「待てっ！」と洸樹や神殿兵たちの慌てた声を無視して、魁は眼下の街に向かっていく。

出会った夜と同じように、けれども今度は夜ではなく、夜明けの中で。

その手をしっかりと握り、二人は仲間の待つナヴィガトリアの街へと身を翻した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097y/>

夜明けの晨星

2011年12月31日16時54分発行